

---

# ～時計塔の下で～

あずまひとみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

～時計塔の下で～

### 【Nコード】

N5499C

### 【作者名】

あずまひとみ

### 【あらすじ】

同じ日に同じ病院で生まれた夕夜と穂高。16年間変わらず幼なじみをやっていた2人だったが、ある夜を境に関係が変わり始め…。不器用女と不器用男の恋物語。

## ブローグ

### ブローグ

10月12日。同じ病院で同じ日に、2人の赤ちゃんが産まれた。

産院内に響き渡る元気な産声。

「決めたわ、この子の名前：穂高にする。稲穂のようにすすくと育ってほしいという願いを込めて。あなたは？」

名前決めた？と傍らにいるもう1人の母親に問いかける。

「うん…そうね、私は…」 そう呟くと、彼女は空を振り仰いだ。

16年後。

あのときの赤ちゃんは、16歳になっていた。

## 第一話 変わらない日常

「いつてきまゝす」

「気をつけてね、夕夜」

うん、と返事をする、夕夜と呼ばれた少女はカチャ、とドアを開けた。

「あ」

「げ」

声を発したのは2人の人間。1人は夕夜、もう1人は……

「『げ』って何よ、穂高」 夕夜は穂高をじとっ、と睨めあげる。

そう、この2人は、あのとときの赤ちゃんだ。

「別になにも……」

視線をそらして歩きだす。それを夕夜は追う。

「なんなの朝から」「だからなんもねーって」 朝っぱらから言い合う2人が住んでいるのは7階。街を見下ろしながらマンションの廊下を並んで歩く。普通なら男の穂高の方が速いはずだ。

さりげなく、夕夜に合わせてくれている。

…穂高ってふだん意地悪だけど、こーゆートコあるから嫌いにならない。

斜め下からちらっ、と穂高を盗み見る。

カッコイイ。

「何見てんだよ。見物料とるぞ」

……

…顔だけはね！

「フンッ」

ずだっ、と足を思い切り踏んづけて。

「てっめ……」

待てコラ、という制止の声を振り切って、夕夜は学校へと駆け出した。

「うわっ」

「おまえ俺から逃げ切れると思ってんの？」

走りだして約200メートル。夕夜はあっさりと穂高に捕まった。

「……………」

そりゃあ、思ってるワケないけど。

でもここで認めるのも悔しい。

「強情なやつ」

穂高が捕んでいた首根っこを離すと、また2人で並んで歩きだす。

ふと、今度は穂高が夕夜を見下ろした。

にしてもコイツ、ほんとちつちえな……………あ。

意外にまつげ長え。

思わずじつと見入る。

「何見てんの？見物料とるわよ」

・・

…黙っていれば少しは可愛いものを。

心のなかで悪態をつく。

夕夜がそれを破って話しだす。

少し空気がピリピリし始めるが、

おずおずと、伏し目がちに顔をあげて。

「あのさあ…あたし…」

キーンコーンカーンコーン

学校の予鈴だ。

「おまえのせいで遅刻だっつーの」

ほら、と穂高は夕夜の手を握って走りだす。

「何であたしのせいなのよ…」

そう言った夕夜の瞳が揺れていたことに、穂高が気づくことはな

かった。

教室に着いた夕夜は、後ろの席に座る栄理の元へ近づいた。

栄理は、中学校からの友達だ。

「あ、おはよ夕夜。…どした？」

「栄理…」

今にも泣きだしそうな表情で栄理の名前を呟く夕夜に異変を感じ、「ここ、座って」と自分の隣に座らせる。

「何があつたか言って」 「…あのさ」

そう言って話し始めた夕夜の言葉に、栄理は開いた口が塞がらなかった。

## 第二話 隠しごと

「それ…穂高くんに言った？」

「言ってない」

夕夜の話が終わって直後、栄理がまずした質問がこれだった。  
ここでの一番に穂高の名前が出てくるって…。

「言つつもりは？」

「……………」

ふう、と栄理は溜め息をつく。

「穂高くんのこと好きなくせに…それでいいの？」

「……はあ？…好き？」

あたしが？穂高を？

「栄理何言ってるの」

けらけらと夕夜は笑う。 栄理は遠い目をして外を見た。

（そういえば…夕夜が何か言おうとしてた気がするな）

1時間目の退屈な授業が始まり、うとうとした頃にふいに思い出した。

窓際の後ろの席は特に眠くなる。

まあ、あいつのことだ。夜にでもなんか言ってくるだろ。

あの時はとにかく、間に合うことが最優先事項だったのだ。

ひとつ欠伸をし、また寝ようとして。

カキーン！！

「打ったあ！」

「走れ走れ！」

「夕夜すごい！大きい！」 外からの歓声。

…こんなに大勢の中からでも分かる。

「しゃあッホームラン」 あいつの声。

これじゃあ自分にとって夕夜が特別のようで、穂高は自分に違和感を覚えた。  
いや、特別は特別なのか？あいつは、昔  
っからの幼なじみだし…。

「なーに見てんの？ あ、彼女じゃん」  
ビクッ。

前の席の大野智也が、後ろを振り返る形で穂高に話しかけた。

一応2人は友達だ。

「だから…彼女じゃないって。あいつは「それが毎朝毎晩一緒に登下校してる奴の言う言葉ですか」

穂高の声を遮って、智也が言った。

たとえるなら、ニヤニヤという効果音がまさに当てはまるような笑顔。

「……………」

こいつ

「へえ」

マジぶっ殺す。

「死ぬ覚悟はできてるんだよなあもちろん」

ぐい、と胸ぐらを掴み引き寄せる。

席には座ったままだ。

「じよっ、冗談だって！」 穂高ならやりかねない！ 身の危

険を感じた智也は、止めて下さい！と懇願する。プライドも何もあったもんじゃない。

嫌そうに智也から手を放すと、再び穂高はグラウンドに目を向ける。

夕夜がコケた。

「ぶっ！」

「どうかしたんですか？結城くん」

「…いえ、なんでも」

目を向けてきた教師にそう返事をしてもお、穂高はくっくっ



と肩を震わせ笑い続ける。

…あゝ、あいつってホントに…。

驚いたのはクラスメイトの方で、次の休み時間には「あの穂高くんが笑ってる……」の話題で持ちきりだった。

「穂高、さっきどうしたのオマエ」

例外なく智也も不思議に思い、尋ねる。

「オマエがあそこまで笑うのって滅多にないよな」

「え？ いや…夕夜がさ」

そう言つと穂高はさっきまで夕夜が居た場所に視線を移し。

「コケてたんだよ、なんも無い場所で。それがツボでさ」

そしてまた笑う。

「昔っからなんだよな、あいつ…」

柔らかい笑顔。

智也が知る限り

力才

穂高のこの表情は、『幼なじみ』の『夕夜』の話以外では、出すことの無い表情だった。

…智也は、大きな大きな溜め息をついた。

帰りのHRが終わり、それぞれが席を立ち始める。「そろそろ穂高くん来るんじゃない？」

何気なく栄理が言った。ビクッ！

穂高が…来るッ！！

「あつあたし…帰るから！あいつには適当に言つといて！じゃっ！」

そう言つと夕夜は脱兎のごとく逃げ出した。

「はあ！？夕夜！？」

今更なに！？

「あんたいつも一緒に帰ってるじゃない」という栄理の言葉は、必死で逃げる（ように彼女には見えた）夕夜に届くことはなかった。

「あれ…あいつは？」

一足遅く穂高の登場だ。「なんか…先に帰るって」「はあ？先に帰る？…意味分かんね」

「だよねえ。なんか分かんないけど…今日の夕夜、少し変だったし理由なんて知ってるくせに、そんなことを言う。」

「あいつが変なのはいつものことだろ」

……………。「ま、まあそれもそうなんだけど、なんてゆうかね…」

その言葉を聞いた瞬間、穂高の表情が変わった。

「わり…俺も行くわ」

そして穂高は玄関に向かって走りだした。

「愛されてんねえ」

栄理の呟きは、教室のざわめきに溶けて消えた。

「んだよ…いねえじゃん」 本当に先に帰ったのか？ 高橋栄理が言っていた、「…ッ泣きそうだったってどーゆー…」

考えても分からない。 とりあえず自分も帰宅することに

した穂高は、靴を履き替え、門の外に出るのだった。

穂高と夕夜が住んでいるマンションには、大きな時計塔がある。

小さな頃から、何かあれば2人はここへ来ていた。 もう陽

も落ちかけているこの時計塔広場へ、夕夜はいた。噴水の淵に座っ

て。」「……………」

もうどのくらい、時間が経っただろうか。10分にも思えるし、1時間にも思える。

家に入りたくなかった。行けば、どうせあの話をされるに決まってる。

「はぁ……」

ひとつ、ため息をついて。

「げっ」

顔を上げればそこには穂高がいた。

「げっ、はこっちの台詞だと思っただけど」

「穂高……」

「ったく、なんなのおまえ。高橋が先帰ったっていうから来てみれば……こんなトコ座ってるし。しかもその格好……まだ家入ってないんだな」

「ご名答。」

「あぶねえだろ！こんな時間まで外にいて！いくら夏で明るいつて言っても時間は充分遅いんだから……！」

今まで穂高には

何度も怒られてきた。けど……………。

「ごめん……なさい……」

ここまで真剣な顔したのは初めてだった。

だから夕夜は、素直に謝った。

穂高と目が合う。

ふいつ、と直ぐに夕夜が逸らす。

「……………」

あ、やば。穂高怒った？　すると次の瞬間、穂高は近くに來たかと思うと、ドスツと音をたてて夕夜の隣に座った。

「……何？」

「それもこっちの台詞。おまえ……なんか隠してんだろ」  
ギクツ。

「なっ……何の話？」

精一杯の笑顔。

ものすごく胡散臭い。

「何の話？じゃなくて」

穂高は静かに夕夜を見つめる。

「言えば？どうせまた1人で悩んでんだろ」

う…ッ。

「俺にも言えないこと？」こいつってホント…。

「……………黙秘します。」「はあ？」

黙秘？

「…っとおまえは…」

もう知らね、と言って穂高はマンションへと入って行った。

その背中に。「言わないんじゃないって、言えないんだ」

そう呟いた夕夜の言葉が届くことはなかった。

### 第三話 心地よい時間

穂高が去って20分。

ようやく夕夜は家に入ることにした。

「ただいま」

…あれ？

いつもならここで出てくるはずの母が出てこない。不思議に思いながらも、まあ仕事が長引いているのだろう、と特に気には留めず、夕夜は制服から部屋着に着替えた。

「腹減った…」

冷蔵庫に向かおうとして電話に目が行き、そこで留守電が入っていることに気づく。

「？」

ピッ、と再生ボタンを押して。

『ピーッ…1番目のメッセージです

……………」

一方その頃、穂高といえば。

「ったく、なんなんだあいつは」

イライラしていた。何か悩みごとがあるのなら、相談すればいいものを。夕夜は、昔から変なところで意地っ張りだ。

隠しごと下手なくせに…バカじゃん。

むすつとしながら穂高は風呂に入ることにした。

風呂から上がると、狙ったようにインターホンが鳴った。

「どっかの非常識バカがきやがったな」

しぶしぶドアを開ける。

「穂高、泊めて？」

そこにいたのは、そんなお願いをする夕夜だった。

「泊め…は？」

こんな隣同士の部屋で、泊めても何もないだろう。見ると、

スネたような夕夜の表情。

あ…。

「絵里さん、残業？」

「ん」

首だけでこくつと頷く。そんな夕夜の動作を、穂高は可愛いと思う。

夕夜が可愛く見えるとか…俺も末期か？

べしつと夕夜にデコピンをくらわす。

自分の気持ちをこまかすように。

「いったツ！？何！！」

ギツと穂高を睨む。夕夜からしてみれば、普通に会話をしていたのにいきなりデコピンをされたのだから、当然の反応である。

「別に。中入れば」

「ありがとう」

そうして2人は、部屋へと入った。

久しぶりに入った穂高の家は、簡素で綺麗だった。造りは同じなの  
で、どこに何があるのかは大体分かる。というか、幼なじみの2人  
は本当に小さい頃から一緒に、お互いの家を毎日行き来していた。  
だから造りどころか、家具の配置、どこに何がしまっているか。  
そんなことまで分かっている。

「久しぶりだな。おまえがこうして泊まりにくるの」 晩ご飯を用  
意しながら穂高は言う。

「最近お母さん泊まり掛けの残業なかったから。あ、あたしもやる」

「当たり前だろ」

…穂高つてさあ…。

じろつと見上げてみるものの、当の穂高はどこ吹く風。何とも思  
つてないようだ。

あーツムカつく!!

ガシャンガシャンと乱暴に食器をテーブルに置く夕夜を、穂高は  
実に楽しそうに見ている。

「は…ッ」

単純。

昔からそりゃあもういじりがあるったら。

そんなこんなで準備は進み、穂高と夕夜はスパゲティ を食べる  
のだった。

「そういえば…絵里さん、なんて？」

絵里さんとは夕夜の母で、昔1度穂高が『おばさん』と呼んだら  
めっちゃめっちゃ怖い思いをさせられた為、それ以後こう呼んでいる。

ちなみに夕夜が穂高の母を呼ぶ時は、『穂高ママ』である。

「お母さん？あー…」

すると夕夜は、唐突に口マネを始めた。

『ピーッ…1番目のメッセーじです。……………あ

っ、夕夜？お母さんだけど。今日会社に泊まんなきやいけなくなっ  
ちゃったの！もう最悪！！くそ上司が今日中に仕上げるってうるさ  
くて…!!……………あっ部長！いらしてたんですか！？やだなあ

そんな汚い言葉使ってませんよお。空耳じゃないですか？はい！お  
任せください！今すぐ…!!……………つとに耳ざといっつーかなんつ

ーか…うるさいくそじいね。あっ、そいうわけだから夕夜、あ  
んな今日隣行つて穂高くんちに泊まりなさい。絶対ね！そのマン  
ションでセキュリティ甘いんだから！！じゃあ、今日帰れないから。  
愛してるわよ！夕夜！お休みなさい。チュッ』

「……は？」

「だからあ……あんたが聞いたから答えてやったんじゃない」  
お母さんのセリフ。

「今のが……？俺の質問に対する答え……？」

「そうですね何か？」

文句でもあんの？というように鋭い視線を送る。  
すると。

「……………くっ」

……え？

「ふ はッ」

なにになになになにに！？

「あははッ……」

なんなワケ！？

「おっおまえなあ……クッい……いくら俺が絵里さんの言葉聞いたからって……普通口マネする？」

「……………何よ」

悪い？

「だっ大体なあ……ッ留守電の機械オペレーションまでやんなくていいっての」

そう言ってテーブルに身を突っ伏して笑い続ける。      もしかして  
……ッボ入ってんの？

「……………失礼なやつ」

呟いてそっぽを向く夕夜もどこか楽しそうで。

そこには、ゆっくりと心地よい時間が流れていた      。



## 第四話 イタズラと前兆

「おまえ先シャワー行ってくれば」

「……………は？」

「は？じゃなく」

現在時刻は午後10:00。 晩ご飯も終えて、見たいテレビも見た。あとは寝るだけ…となったとき。

穂高から飛び出したこのセリフ。

「なななななに言いやがられてんのあんだ!？」

気色悪いツつの!!!

「はあ？そっちこそ何考えてんの」

不機嫌そうに夕夜に視線をやつて。「寝る前に風呂入ってくれば  
って言つてんの」

「そんなの分かつてる!」「じゃー黙れ」

「分かつてるけど気持ち悪いの穂高に言われると!!!だから…」

「あーそう…俺はおまえに1番風呂譲つてやったのに…そーゆ  
ー態度なワケね…」

…目が…すわっている。こ、怖…!

分かった、とひとつ頷くと、穂高は部屋から足早に姿を消した。  
シーンとなった部屋に1人残された夕夜もまた、むすつとして戸  
口を見つめて。

「そんなに怒んなくてもいいじゃん。穂高のバーカ」 言つて夕夜  
は、風呂場へ向かうのだった。

ザーザーと音が響く。

「やっと入ったな」

正直言つのなら、自分だってできるならば夕夜には自分の

家の風呂に入って欲しかった。でもそれはできない理由もあって。……いくら幼なじみといえど、同年代の少女が自分のうちでシャワーを浴びていて、気にならないワケがない。

「……まあやっぱり俺も１７の男だから」

「……宿題やるか、と机に向かい、夕夜を待つこと３０分……。」

「穂高」

控えめに穂高の部屋のドアが開かれた。

「……なに？」

机に向かったまま振り向きもせず答える穂高に、夕夜はとつとつと、若干ぶすつと、そしてそっぽを向きながら言葉を返す。

「さっきの嘘だから」

「……は？」

「だから……『気持ち悪い』つつたこと。あんなの……売り言葉に買い言葉っていうか……」

それでもごめんね、の一言はでてこない。

そんなこと、簡単に言える性格ではないし、それは穂高も重々承知のはずだ。

「ああ……それね」

そういえばそんなこと言ってたな、とでも言うように首をかしげた穂高は、次の瞬間、にやりと笑い。

妙な、イタズラ心が湧いた。

「本当は……恥ずかしかった？」

「……はっ？」 またまた何を

を言っただらうこの男は。

「照れ隠しに言っただろ」

「……頭でも打ったんだろうか。」

「……日本語喋って頂けますか？」

「めっちゃ日本語だったの。なに？もう１回喋ってほしいの」  
え。

すると穂高はみるみる内に夕夜との距離をちぢめ、夕夜を強引に

中に引つ張り込み、さらにはドアを閉め、あるうことが…そこに手をついて夕夜をはさみ込んでいた。

なに？この、態勢！

静かに、耳元に唇がよせられる。

「照れ隠しだったんでしょ…？」

穂高の、低く、甘い声が、耳朵をかすめる。

「んっ…」

何かが這い上がるような感覚に、ピクツとからだは反応して。

それは、夕夜にとって初めての感覚だった。

「……………」何も、できない。

…ん？

いつもなら、「ふざけてんじゃないわよ!!」と、罵声と鉄拳が飛ぶ場面なのだが…。

今は、ぴくりともせず俯いている。

「…？」

なんか変なもんでも食ったか？

首筋から顔を離し、覗きこむ。

…そこには。

顔を真っ赤にし、涙で目を潤ませ、必死に何かを我慢しているような…そんな表情の夕夜がいた。「……………え？」

「……………ツ、いつまでそこにいんのよ!どいて!!」夕夜がドンツと胸を打ち、穂高は我に返る。

「もっ、いいでしょ!？あんたは早くお風呂入ってくれば!？」

そう言うや否や、彼女は穂高の横を駆け抜け、ベッドにもぐり。

「早く行けっ!」

そう罵声を飛ばすのだった。

…今だったか…。

てかその布団、俺のなんだけど。

驚きと、呆れたという感情。そして…戸惑い。

いつもの夕夜からはとうてい考えられない反応。

今日のコイツは…どうかしてる。

考え込みながら、夕夜の窒息死阻止のため、穂高は風呂場へ向かうのだった。

「…ふうーっ」

布団から顔をあげて、夕夜は部屋を見渡す。 本当に

行っただけみたい。

ひとまずは安心だ。

あたし…どうしちゃったんだろ？いつもなら穂高なんてブツ飛ばすのに。

でもあの時は、動けなかった。

心臓が、おかしいくらいにうるさかった。

「穂高のバカ…」

あんなイタズラ、しないですよ。

難しいことを考えるのに夕夜の頭は限界で。

いつの間にか夕夜は、深い眠りへと落ちていた。

コンコン。

返事がない。

風呂から出た穂高は、自分の部屋でも一応ノックした。

部屋に夕夜がいるのは分かっていたから。

「…入るぞ」

窓を開け放したままの部屋には、月明かりが満ちていて。

「……………ッ」

ベッドに布団もかけず横たわる夕夜の姿は 息を呑むくらい綺麗に見えた。

スカートからのびている色の白い脚は、艶めかしく月明かりに反射している。 コイツ…新手の嫌がらせか？

そんなことを思いながらも、足は勝手に彼女の元へと向かって。

…どうかしているのなら、自分だって同じだ。

あの時の夕夜の表情を、最高に可愛いと思ってしまったんだから。

ギシッ

手をついたベッドのスプリングがきしむ。

まだ乾いていない髪の毛、水滴がぽつぽつと伝い落ちるのも厭わない。

吐息がかかるくらいの近い距離で、穂高は囁く。

「風呂なんて 1番無防備になる瞬間だろ」

だから家になんて、帰せなかった。

なのに、おまえは。

「…今この瞬間も、無防備すぎる」

ベッドについた手のひらが、一層深く沈み。

2人の距離は、ゼロになった。

これが、始まり。

非日常的な日常の幕開け、その前兆だったとは…まだ、誰も。

本人達でさえ、気づいていない。

## 第五話 前夜の記憶

朝起きて、まず驚いたこと。

第一に、穂高のベッドに寝てたこと。第二に、寝た記憶自体がないこと。第三に、…穂高がリビングのソファで寝ていたこと。

…なにゆえ？

起き抜けのボーッとした頭で、夕夜は必死に昨夜のことを巡らした。

風呂に入って、穂高の部屋に行つて。それで…それで？

「ギャーーーーー!!!!!!」

思い出して恥ずかしくなったのか叫び声をあげる。穂高の部屋から出てきて今はリビングにいるわけだが、どうにもこうにも穂高の顔が見れない。

ちら、と横目でみるも、起きる気配がない穂高に夕夜は忍び寄る。

「あんたさあ…どうして昨日あんなことしたの？」

答える声があるはずもなく。夕夜はふう…とため息をつく。

ソファの横に跪き、穂高の顔を覗きこむ。

憎たらしいほど美形。

朝陽に反射する漆黒の髪。閉じられたまぶた。その奥にある瞳。

思わず触つてみたくなる。

手をのばしかけ。

なっ何やってんの自分！それはさすがにキモイから!!!!!!

「ん…」

穂高の小さな呻き声にもビクツと反応してしまう。

家、戻ろっかな。

学校あるし…。

「ベッド、占領しちゃって悪かったわね。それから…」

ありがとう。

蚊の鳴くような声でも、静かな部屋では大きくて。いたたまれ

なくなった夕夜は、逃げるようにリビングから出ていった。

「ツンデレかよ……」

実は初めから起きていた穂高は、夕夜が消えた戸口見つめて。

「あんなことって……手えついで苛たこと？それとも……」

いや、なわけないか。

自分が昨日夕夜にキスをしたことは、多分バレてはいない。それは、向こうの反応を見れば分かる。長年のたまものだ。

……昨夜は、なんとなく落ち着かなくて寝つけなかった。うとうとしかけて浅い眠りに入ろうとしたところで……夕夜が入って来たのだ。起きるのが面倒だったので、動かずにいたら。

「あれだもんな」

くっ、と喉から笑いが漏れる。

起き上がり、片付けるために部屋に向かった。

ベッドはぐしゃぐしゃになっていて、夕夜の寝相の悪さを伺わせ

た。

「……………」

しかめっ面でこめかみに指。

どーしてあいつはこう……

昨夜の夕夜の寝顔が思い出される。

横たわる夕夜はとても綺麗で。

普段の姿からは想像もでき

ない。

あいつだってちゃんとすればそれなりに可愛いのに……

穂高は疑問に思う。

どーしてあそこまで身なりに無頓着なんだ？

そう。夕夜は、全くと言って言いほど自分の容姿に関心がない。

不思議なことだが、事実そうなのだ。

穂高としては、もう少しなんとかして欲しいところだが……

手早くシーツを直し、布団をかけ直す。ふいに、ふわっ……と夕夜の香がした。心臓がひとつ大きく跳ねる。

昨日の映像がいやに鮮明に呼び起こされて。



そういえば昨日は満月だった。

満月は…人を狂わせる。それもあながち間違いではないのかも  
しれない。

そうでなければ自分があの夕夜に、キスなんて…するワケがない。  
…恐るべし月明かりマジック。

そうして穂高は、自分が学校へ行くための準備を始めたのだった。

「ちょっと…」

一方帰宅した夕夜に待ち構えていたのは。

「ん…もうできませーん…」

玄関先で寝ている母の姿だった。

「お母さん！寝るなら布団で寝てよ！風邪引くでしょ！？」

ゆさゆさと揺らしてみるのが起きる気配がない様子に、夕夜は諦め  
て自分の準備を始めることにした。

20分して戻ると…まだ寝ていた。

「はあ……………」

仕事で疲れているのは分かる。ただでさえ今は、父親が海外勤務  
しているのだから、母がこんなに頑張るのも無理はない。だからこ  
そ…布団で寝てもらいたいのに。

「ん…ッ！！！」

引つ張ってみるが到底無理な話だ。

「…何やってんの？」

「あ、穂高」

開け放していた扉から、穂高が姿を現した。今から学校へ行くと  
ころだったのを、前を通ったら夕夜がこんな状態だったというわけ  
だ。

「ああ…」

状況を一目見て理解したらしく、

「絵里さん、運べばいいわけね」

「えっあ…うん」

ひょいっと軽々持ち上げて、穂高は寝室に消えた。 … あいつも成長してんのね。

夕夜が思ったのは、そんなことだった。

その頃絵里をベッドに寝かせ終えた穂高は、ふとなりの夕夜の部屋が目についた。

なぜだか一瞬、ヒヤリとする。

普段夕夜の部屋は、ものすごく汚い。そりゃあもう、足の踏み場もないほどに。 … それが今は。

「なんでこんな…片付けられてるんだ？」

大掃除をした、と言われればそれまでかもしれない。けれど…そうではないと思わせる何かが、あった。「ん…穂高くん？」

「絵里さん…起こしました？すいません」

ふりかえり謝る。

「いいのよ…それより…」

「？」

あの子をよろしくね。

夕夜そつくりの笑みを残して、彼女はまた眠りに落ちた。

「…寝言？」

…にしては意味深な発言だ。

「穂高!!」

ハッとして穂高は玄関に向かう。

「あ、ああ。今行く」

一度寝ている絵里を見つめ。

パタン。

部屋を後にした。

2人して玄関からでると、すぐ右隣の部屋の前が、何だか騒がしい。

「あの…誰か引つ越してくるんですか？」

近くにいた業者さんに尋ねると「ええ」とだけ返ってきた。  
今までずっと空き部屋だったのが、やっと埋まるんだ。  
この時夕夜は、それくらいにしか考えていなかった。

「おはよ」

教室にはすでに栄理がいて、夕夜は …… 昨日のことを話そうかどうか迷った。

「おはよ夕夜。… またなんかあったの」

「…………… なぜ分かる？」

「べべつになんもないよいつもどーりちようふつ」 …… 素晴らしく棒読みである。

「いやいやいやいや！ あきらかに何かあったでしょうが！！」

「… 夕夜ってさあ…」

目をすがめて。

自分が隠し事下手だって自覚ないワケ？

「ん？ なに栄理！」

「…………… なんでもない」

愚問でしたねそーでした。

自分から話してくれるまで待つか、と栄理は決めて、違う話題をふる。

「そついえば穂高くんに言った？」

「… 何のこと」

「この子はまったく…」

「もー… いつまで意地はってんの」

「… 別に意地とかじゃなくて… ただ本当に… 決定したわけじゃないし」

「そつやってさあ… タイミング逃したら大変なことになるんだからね」

「……………」

この時の栄理の忠告を、あたしは後になって正しかったと…  
思い知る。

授業中、意識は昨日のことへと飛ぶ。

『本当は…恥ずかしかったんでしょ…?』

そう耳元で囁いた穂高。 穂高の声ってあんなだった?

穂高の声ってあんなに低かった?

穂高の声って…あんなに優しかった?

あんなの、今まで16年間一緒に育ってきた…同じ穂高とは思えない。

いつも、意地悪ばっかされてる記憶しかないから、尚更。

あれだって…穂高にとっては、きっと、単なるイタズラに過ぎない。

でも、だけど。

そう思うと…なぜだか哀しくなるのはどうしてなんだろう。

「……うー……」

考えても答えは出ない。 ぐしゃぐしゃっ、と頭をかき回し、ふと外を見ると…穂高のクラスが体育をしていた。

100m走だ。

順番待ちをしている穂高なんて…1発で見つけられる。

気づかないで欲しい。

自分がこうして穂高を見ていることなんて。

気づいて欲しい。 自分がこうして穂高を見ていることに  
なに…これ?

2つの相反する気持ちが混ざり合い、夕夜を分からなくさせる。

涙が、出そうで。 ふいに、穂高が振り向いた。

2人の視線は絡み合う。 ……なんで?

どうして気づくのよ。

心臓が…またうるさくなるじゃない。

ドキドキとうるさい心臓をおさめたくて、ただその一心で…夕夜は前を向き直した。

## 第六話 トンチンカンな男

ああ… やつと帰れる。

なぜだか精神的にとても疲れた1日だった気がする。思えば今日は、あいつの……穂高のことしか考えてなかったような。

… 夕夜は自分にひいた。

SHRが始まり、担任が姿を現した。

「え… 皆が早く帰りたいのは分かる。先生も早く帰りたい… はい？」

「だがな… 人生そううまくはいかないんだ。木原、入れ。」

担任が戸口に視線を流す。

教室が一気に沸き立ち。

「え… 転校生らしい」

らしいってあんた…

「名前… なんだっけ？」

呼んでただろ、さっき。「木原だつてば、先生」

答えたのは転校生本人だった。彼も少し疲れて見える。きつと…ここまで来るうちに何度も、この担任と今のような会話を繰り返してきたのだろう。

「そうそう木原！自己紹介しなさいテキトーに」

テキトーってね…

「えーと… 木原朔真・サクマ…です！事情があつてこっちに引越してきました…皆よろしくねッ。あっちなみに彼女募集中だからいつでもどうぞ！」

………はあ？

何このトンチンカン男。夕夜は心の底から思った。ウザイ。

「えーじゃああたし立候補しよっかな」

「いいぞ木原」

「朔真くんカッコイー」

クラスの皆さん方にはウケているご様子。

…確かに顔は良いかもしれないけど。

「穂高の方が何千何万倍もカッコイイわよ」

…無意識の言葉だった。

「え…」

ちよつと待て自分。

本気で焦る。

ショックで打ちひしがれ、夕夜は机に突っ伏した。

だから、気づかなかった。

転校生が、夕夜を見つめていたなんてこと。

「まあ、そーゆーワケだ。本当は今朝着く予定だったんだが、渋滞でさつき着いたそーだ。皆、仲良くなれとは言わない。顔と名前だけは覚えとけ。以上」

……………えええええ。それだけ言

うと担任はさつさと教室をでていった。

…教師を選んだのは選択ミスなんじゃ、と夕夜は思う。

「夕夜」

「え…？穂高」

いつの間にか穂高が教室の出入口に立っている。

いつもより迎えに来る時間が速い。

「……なにあいつ」

…え？あいつ？

「ああ 担任ね。マジないわあれ。やっぱり穂高もそう思う？」

同意を求め顔をあげる。

しかし夕夜の目に映ったのは、とてつもなく冷たい蔑みの眼差しであつた。

「……」

違つた？

「…あそこで女子どもとくつちゃべつてる奴」

言われて穂高の視線を追う。そこにいたのは先ほどの転校生だっ

た。

「ああ…木原ナントカ」

「…おまえな…名前は覚えろってあのものすごい担任も言ってただろ」

そして再度蔑みの眼差し。

ぐっ……………！

「あんた一体いつから居たのよ！」

「いつからって…最初から？」

「何で！他のクラスの！SHRに！最初からいんのよ！アンタは！」

「何でってそりゃ…」

言おうとして口を開きかけ、数回パクパクと開閉させた後

……………。

「…やっぱいい」

言っのを辞めた。

「はあ？なんでよ！そこまで言っただなら言えはいーじゃない！」

ほら！と夕夜は催促する。それでも穂高は口を割らない。

しぶといわね！！

…にらみ合いが続くかと思われた、その時。

「高良さんっ」

……………はい？

場違いな明るい声。

「誰アンタ」

「誰って…ひどいなあ。ついさっき自己紹介したばかりじゃん」

自己しよ……………ああ！

「木原…木原…木原…」

「…木原朔真！！！！」

そうそう転校生！…てか

「なんで穂高まで怒鳴ってんのよ！」

「…おまえがあまりにも馬鹿だから」

キーーーーーッ！！



「あんたねえ！いい加減あたしを馬鹿あつかいすんの辞めてくんない！？」

「それは無理だろ」

「どーしてよ！理由を述べなさいよ！！」

「だっっておまえ馬鹿だし」

「キーーーーーッッッ！」「……キーキーキー……おまえ猿か？」

「ああ言えばこう言う。」「つとに性格悪いよねあんたって！！ム力つくー！」

「誉め言葉をどーも」

「くッ……！」

「……………あのー……」

そこで割って入る小さな声。

「何！？今は邪魔しな……………あ」

忘れていた。

「俺の話聞いてくれる？」

転校生の存在。

「ごっ、ごめん！何？」

「あははー……まあいいけど。あのさ俺、さっき彼女募集中って言ったよね？」

にこつと笑って夕夜に問いかける。

「ああ……はあ」

だけどソレが何か？

「俺、高良さんになってもらいたいんだけど」

「……なにに？」

「彼女に」

「……誰の？」

「だから、俺の」

「……………はあ？」

『え——————ッッッ！？』 ……反応したのは、実はずっと聞き耳をたてていたクラスの女子だった。

『朔眞くん、高良さんみたいなのが好みなのッ！？』

いやー、だとか悲しいー、だとか好き勝手な言葉を並べ立てる彼女たちは、まるで蛙の大合唱だ。

ていうか…あたしに失礼じゃない？高良さん『みたいなの』って。ちよつと皆！高良さんに失礼だよ」

反論したのは木原朔眞。

「確かにそこまで“極上に可愛い”ってワケじゃないけど、上の下くらいには可愛いよッ」

……………。

オイ。

木原。

失礼なのはおまえも同じだ。

「帰るぞ夕夜」

「えっ、ちよつ…穂高！？」

唐突に穂高が夕夜の手首を掴み、教室から引つ張りだした。

「あれ？逃げるの？」

後を追うように朔眞がひよこつと顔を覗かせた。

「でもね、逃がさないよ？…結城穂高くん？」

今までの邪気のない笑顔とは打って変わって口の端を上げる笑い方。

なんでこいつ、俺の名前を…。

視線はそのままつい、と夕夜へ移される。

「高良さんもね。無駄な抵抗だからッ」

いや…。そんなこと、明るく言われても。

「さすが、トンチンカンなだけあるわね」

「えっ？何か言った？」

あらら…声に出してた？ 答えるのも面倒だったので、そのままスルーした。「うわ無視？悲しー」

悲しさの欠片も見せない朔眞を一瞥して、夕夜たちは教室を後にした。

徒歩10分のマンションへの道を、終始無言で歩き通す。

ただ黙って手を引かれる夕夜にとって、この時間は辛かった。

穂高…何か怒ってる？

怒られるようなことなんて、した記憶がない。

…歩き方が乱暴なのだ。背中を見つめることしかできない。

ねえ穂高、顔を見せてよ。 どうして、怒ってるの……………？

のどまで出てきた言葉を飲み込んで、夕夜はうつむいた。

ドンッ。

「ふぎゃっ」

穂高がいきなり立ち止まったものだから、背中に鼻をぶつけてし

まった。

「ほだ…あ」

顔をあげて気づいた。

「時計塔の下だ…」

いつの間にかマンションについていたらしい。

「夕夜」

「……………ッ、なに？」

いつになく真剣な表情で名前を呼ぶものだから、一瞬ドキッとす

る。

「昼間のあれ、どうしたんだよ」

「昼間のあれ…？」

「て、何？」

「……………泣いてただろ」

「あ……。もしかしてさっき言いかけて辞めたのってソレ？」  
「……………」

穂高は黙って頷いた。

え？何？じゃあ穂高が今日いつもより早く迎えに来たのって…

「あたしが泣いてたから…………？」

「…そうだけど」

なぜだろう。物凄く、嬉しい。同時に…ちょっとむず痒い。

「…気づいてないとも思ってた？」

「…ッ」

はい。思っていました…。だってあんな…、一瞬、目が合っただけで。

「違って…あれは、その…。目にゴミが入って」

穂高に泣いてた理由なんて聞かれたら、一巻の終わりだ。夕夜は必死に言い訳をする。

「……………」

ですよねー。穂高が騙されるわけないですよねー。「どうして「え」

「どうしておまえってそう意地はるワケ？」

そう言った穂高の顔はとても苦しそうで。

「べ、別に意地なんか」

「はってるだろ。現に今だって」

「…ッ」

「おまえのそういうトコ…可愛いけど、ムカつく」

かつ、可愛！？

夕夜の顔は瞬時に赤くなる。

けれどそれはすぐ戻り。「…っ、何がムカつくの」「……………」

……………」

なんなの？どーしてそこで黙るワケ？

何か頭にきてることがあるんじゃないの？

「言わないと分かんないじゃん」

「…………… 分かんなくて、いいよ」

… もっと頼ってほしいだなんて。

「…………… あ、そ」

じゃああたしもう行くから、と夕夜は玄関に向かって歩きだす。  
穂高はこうなるとどこでも話さない。

「夕夜」

「… 今度は何？」

動きだしていた足は止まり、穂高を振りかえる。      けれど穂高は、またもや何かを言いかけて辞める。代わりに発せられたのは、全く違う言葉。

「… 何か、嫌な予感がする。 おまえも気をつけろ」

実際これも嘘ではなかった。

「げ… マジ？ 穂高の“嫌な予感”で100発100中だから怖いんだよね」

今度は何があるのだろう。

「じゃ… あたしマンション入ってるから」

「俺は少しここにいる」

「… そう？ じゃーね」

後ろ手にひらひらと手を振って夕夜は消えた。

昨日から… 昨日のあの夜からだ。

いや、本当は      もっと前からなのかもしれない。      ずっと、気づいていなかっただけで。

ことあるごとに夕夜が可愛く見えてしまう自分は、きっと何かが変わったんだろう。

頭を冷やすためにここに残ったのに、考えるのはやはり夕夜のこ  
とばかり。

「ギャーッッ！！」

「！？」

すると、どこからか突然の叫び声。

俺が間違えるわけがない。

「夕夜に何かあった…!?!」

そう、あれは夕夜の声だった。

すぐさま夕夜の後を追ひ、穂高はマンションの階段を駆け上がる。

「夕夜どーし…」

穂高は思わず固まった。

自分たちの家の扉の前で目にした光景は。

「っほだか…」

夕夜が、あの転校生…木原朔眞に、抱きつかれている光景だった。

「……………」

穂高はズカズカと近寄ると、無言で2人を引き離す。

…その時の穂高の目は、有無を言わせない迫力があつた。

「…なんでおまえがここにいんの」

「ああ…結城くん」

質問に対して、朔眞は何も不思議なことなどない、とでも言うように穂高の名前を呟く。

「なんでここにいんのかって聞いてんだけど」

そして、どうして夕夜に抱きついていたのかも。

「なんだそんなこと?だって俺…」

朔眞はにかつ、と笑ってこともなげに言った。

「ここに引越して来たから」

……………。

『はあ—————!?!?!?!?』

「だから逃げられないよ、って言ったでしょ?」

…木原朔眞は、にこりと笑って言ったものだった。

第七話 704、705、706の前で はたから見れば井戸端会議

まさに百発百中だった。

「ほらね……やっぱり当たった」

目の前にいる朔眞を目をすかめながら見て、夕夜は言う。これだから穂高の“嫌な予感”はシャレにならない。

「穂高といるとホント困る」

「……悪かったな」

「じゃー一緒にいなきゃいいじゃん」

朔眞が横から口を出し、穂高はぎくりとする。

実際、自分と夕夜が一緒にいなきゃならない理由はない。恋人であるわけでもなし、何か約束があるわけでもなし。

もしここで夕夜が「それもそうだ」と納得してしまったら、自分たちの関係はそれまでなのだ。

ただ 幼なじみというだけで。

「それはないわね」

ところが夕夜は否、と即答してみせた。

「あたしと穂高が一緒じゃないなんてありえない。そんなの、選択肢の内にも入ってない。論外。問題外」

「……そこまで言うんだ。じゃあ聞くけどどうして？」

「どうして？」

夕夜は大きく息を吸うと、びしっと指を突き付けてここぞとばかりに言い張った。

「幼なじみだからよ！」

「……………」

…………… えっそれだけ？」

「それだけよ」

「あとはないの？」

「あと何があるっていうの」

「……結城くんを好きだから、とか？」

「すっ………！？」

夕夜は瞬時に赤くなる。 お？

まんざらでもない反応だ。

「ふざけたこと言わないで！とっ、とにかく…生まれた時から一緒だったんだから、今さら離れるとか無理！そーゆーことだからじゃあ！」

そのまま玄関に入ろうとした夕夜を引き止めたのは ……穂高だった。

ぱしっ、と手をつながれて。

「おまえ、本気でそう思ってる？」

「え…」

「俺と離れることはありえないって、思ってる？」

真剣に問いかける穂高に、夕夜は息がつまる。

一瞬戸惑いはしたが、確信を持って静かに、けれどつよく夕夜は答えた。

「…思ってる」

譲れない、答えだった。 沈黙。

次の瞬間、穂高がふわりと微笑んだ。

「なら、いい」

…夕夜は言葉を返せない。

反則でしょ、そんなの。

初めて目にした穂高の柔らかい笑顔に、夕夜は目を奪われた。心音は早くなるし脈は揃わないしうまく呼吸ができないし。紅潮した頬を押さえ、夕夜は穂高からパッと目を逸らした。あっ、またやつちやった…。

この前もコレで隠し事があることがバレたのに。

そしてその“隠し事”も、夕夜はまだ穂高に告げていない。

「…ねえ」

ハッ。



「君らさあ…何回俺の存在無視したら満足するわけ？」

につこり笑って朔眞は言う。…笑顔なのに恐いのはあえて気づかないフリをした。

「ご、ごめん…」

「ま、いいけどさ。諦めないし」

「え、何が」

「あれれーまたそのパターン？」

さっきも言ったよね、君を彼女にするって。

これまたさらりと言つてのけた朔眞に穂高は力チンとする。

「…教室の時から黙って聞いてれば。何？おまえ」

「…何が？」

「何がじゃない」

朔眞をにらみつける。

「勝手に夕夜彼女にするとか言つて「じゃあ君に許可取ればいいわけ？」

穂高の言葉を遮って、いやにはつきりとした声で朔眞は言った。

「そんな必要ないよね？だって君彼氏でもなんでもないし」

「……………」

穂高は何も言い返せない。

だって事実、そのとおりだ。

「ほらね、言い返せない」

そしてまたあの笑顔で笑う。

「夕夜ちゃん、そーゆーことだから覚悟してて？」

「……………はあ？」

目の前で繰り広げられている光景に啞然としながらも悪態はつく。  
「はっ、何を覚悟しろって？てゆーかなに勝手にファーストネーム呼んでんの？あんたホント気に障る奴ね」

言つなりびしつと扉を指差して。

「帰れ！」

…まるで飼い犬に『ハウス！』とでも言うように。

「…そこまで？じゃあ仕方ないから今は家に入るけど」  
また後でねっ。

またもや嫌な予感のする言葉を残して、朔眞は704のプレートのついた扉の向こうに消えるのだった。

「……………穂高？」

さっきからずっと黙ったままの穂高を覗きこむ。

すると、制服のそでをきゅっとなつかまれた。

子供みたいだ。

「穂高どーし「確かに」

「…え」

「確かに俺にあいつ止める権利なんかない。けど、俺は」

…まただ。

ほら、穂高が真剣な顔すると…あたしの体は不整脈をおこす。

「な、に…？」

「俺」

「あれっ、アンタたち何してんの家の前で」

場にそぐわない明るい声。

「お母さん…」

「絵里さん」

夕夜の母親、絵里が仕事から帰って来たところだった。

「なによ…まさか逢引き！？あらっ邪魔してごめんなさい」

1人で盛り上がっている母をよそに夕夜は着々と絵里の手から買い物袋を奪っていく。

「……………違うから。ほら、袋よこして。今日はコロッケ？」

スーパーのビニール袋を覗きこみ今夜の晩ご飯を当てる。

「そーよっ。もちろん穂高くんも来るわよね」

につこりと、有無を言わせぬ笑顔で絵里。

「あ、はい…いただきます」

この笑顔を前にしてどう断れというのか。

妙な脱力感が穂高と夕夜を襲う中、しかしその一方で穂高は安心

もしていた。(危なかった。絵里さんが来なかったら俺…なに口走ったか分からない)

さっきの自分の言動を思い出して、ほっと胸を撫で下ろす。

「穂高、何してんの。早くうち入ったら？」

すでに入っていた家の中から夕夜がこいこい、と手招きする。

そんなちよつとした動作も、今の穂高には可愛く見える。

ああ、もう…。

「駄目だな、俺」

眩きながら夕夜の横をすりぬける。

「……………」

…夕夜の不整脈は、まだ納まっていない。

## 第八話 差し入れ - 1 -

「さあどーぞっ」

「いただきますあーす」

「いただきます」

3人が家に入って1時間が過ぎた頃だろうか。

食卓にはできたてホクホクのクロツケがのっかっていた。

あつ、とか言いながら一生懸命類はる夕夜を横目に穂高も食が進む。やっぱり誰かが一緒だと、ご飯はおいしい。

「そーいえば穂高くん、最近麗ちゃんどお？」

「あ、母さんですか？」 麗ちゃんとは、穂高の母親麗子のこと

だ。2人は仲が良く、互いに麗ちゃん絵里ちゃんと呼びあっている。

「相変わらずうるさいくらい元気ですよ。今朝もポストカード届いてました」 「あらー良かったじゃない」

「今度はどこにいるんだったつけ、穂高」

「…おまえなあ、それこの間も教えた」

「…あれ？」

「あれじゃない」

2人のほほえましい光景を見守りながら絵里は、麗子のことを考える。今は遠い地にいる穂高の母親。

ねえ麗ちゃん。穂高くん、こんな大っきくなったのよ。仕事の合間にも帰ってらっしゃいよ。

穂高の両親は2人1組のメイクアップアーティストで、いつも世界中を飛び回っている。

だからこうして晩ご飯も一緒に食べることが多かったりするのだ。

「ふふ。穂高くん、私麗ちゃん今どこで仕事してるか知らないわ。

教えてちょうだい」

「…何笑ってるんですか？」

「いーからいーから」

「？母さんたち今シンガポールです」  
シンガポール！！

「くーっ仕事とはいえずるいわねっ。皆して海外行つて！！」

「あそつか。今お父さんもロスだしね」

「そーよ。でもまあ、いいわ。こうして娘の成長そばで見られるんだし」

「…お母さん、恥ずかしいから」

「あらーなんでよっ」

そう言つて絵里は夕夜に抱きついた。

仲の良い親子の、普通にありふれた光景。その光景を、穂高は少しだけ羨ましく思う。

「それから、穂高くんもね」

「え…」

心を読まれたかのように。

「今少しだけ、恋しくなつたでしょう」

…バレていたのか。

「大丈夫よ。麗ちゃんがない間は私があなたの母親だから。いつも見てるわ。あなたも私の大事な子供。それに何より……」

「えっ、ちょ、お母さん！？」

最後の言葉とともに意味ありげにウィンクしてみせて。

穂高は、ただこくん、と頷くことしか… できなかった。

この時…涙が出そうだったなんてことは、穂高以外は誰も知らない。

「… あ、そういえばね。今日転校生が来たの！」  
ものすつごくウザイ。

…と、いうのは言わないでおいた。

「木原朔眞つていうんだけど」

その瞬間、絵里がぶふー、と食べていたものを吐いた。

「ちょ、何？汚い」

「きはらさくま…」

自身にしか聞こえない程度の音量で絵里は呟く。  
ついに来たのね、彼が…。

「まさか麗ちゃん、本気でやるなんて…」

「え？何？穂高ママがどうかしたの」

ハッ、と我に返ったように夕夜と穂高に向き直る。

「うつん、何でもないわ」

「…そう？でね、そいつが 引っ越してきたの！隣に！」

ねっ、穂高、と話を振るが途端に穂高はぶすつとしだして「ああ」としか答えなかった。

「な、何よ、なにいきなり不機嫌になってんの」

「別に…」

「…意味分かんない」

「…分かんなくていいよ」

出た。またこの台詞だ。

2人を見ながら絵里は大きな大きなため息をつく。 うちの娘はどこまで鈍感なのかしら…。 しかも穂高くんはアレ無自覚だし。

いまだ言い合う2人を見ながら。

ねえ、麗ちゃん？

「さーで、吉と出るか凶と出るか」

遠い地にいる麗子に語りかけるのだった。

「ごちそうさまでした」

「いーえ。また来てね」

玄関口で別れの挨拶をしている穂高と母を見て夕夜は思う。

「淋しいわ…穂高くんがいなくなっちゃうと」

2歩か3歩かそこの距離だろうが！  
それに。

…淋しいのはあたしだって同じなのに。

そしてハツとする。

なんなのだ。最近の自分が嫌になる。

もう16年間一緒にいるんだからそろそろ飽きてたっていい頃なのに。

飽きるどころかどんどん深みにハマっていつてる気がする。

もう、嫌だ。

「あああああああ」

行き場のない恥ずかしさを壁にぶつける。「なに夜中に壁たたいてんの、近所迷惑でしょ」とあっさり止められた。

「うゝゝ……あれ？穂高は」

「あんたが変なことやってる内にとくに帰ったわよ」

「……ああ、そう」

一気に熱が冷めた。

「ところで！」

「…なに？」

依然テンションが高い絵里を据わった目で夕夜は聞き返す。

「その、さ、朔眞くんだっけ。隣に引っ越して来たっていう」

「…そうだけど」

何どぎまぎしてんの？

「やーね気のせいよ」

ホホ、と絵里は笑う。

「その子、一人暮らしなんでしょう？」

絵里の態度が少々気にかかったが、とりあえず夕夜は答えた。

「…そうだけど」

「じゃあ、はい」

につこり笑って差し出されたものはコロッケ。

嫌な予感。

「夕飯の差し入れ、いつてらっしゃい」

「ええー……」

「ええー…じゃない！ほら行った行った！」

「も…」

なんであたしが、と言いながらも渋々ではあるが夕夜は玄関の扉を開けた。

振り返ると満面の笑みの絵里。

「めんどくさいなあ、もう」

呟きながら704に向かうのだった。



## 第九話 差し入れ - 2 -

玄関を出て穂高の居る706とは逆隣に向かつて歩く。

1歩歩いては振り返り、1歩歩いてはまた振り返り。同じことの繰り返しだった。

自分でも何がしたくてこんなことをしてるのかなんて、分からない。ただ、体が勝手に動くだけ。

ピンポン。

「はい」

「……………」

扉から出てきた朔眞に夕夜は無言でズイツと皿を突き出した。

「…差し入れ？ありがとうございます」

につこり笑って受け取る朔眞。

今日出会ったばかりの夕夜にだって分かる。こいつの笑顔は信用ならない。裏に絶対何かある。「まあ、そう警戒しないでまたね、の意味分かったでしょ」

「そんなもん分かりたくもなかった」

「即答？うわひどい」

ひどいなんて、微塵も思っていないくせに。

「帰る」

「え！？まあまあまあ！帰るのは早いでしょ！」

「どこが？むしろアンタといなきやならない理由のほうがどこをどう探しても見つからないっつーの」

「そんなこと言わずにさっ。これから、毎晩こうなるわけだし」

「はあ！？」

毎晩！？

「いつ誰が毎晩アンタにご飯のおかず届けるなんて言ったのよ！」

「さっき君のお母さんが毎晩僕にご飯のおかず届けてくれるって言うってたね」

「お母さん!？」

「そう。偶然、スーパーで会っちゃって」

朔眞が言うには、こうらしい。

買い物をしていた朔眞に、学校の制服が同じなのが気になった絵里が声をかけた。一人暮らしだということを言ったら偶然同じマンションで、男の子が学校の後毎日毎日ご飯を作るのは大変だと言って、自分が毎晩おかずのおすそ分けすることを約束した。

「ちっ……」

絵里め。余計なことを。

こればかりは夕夜は絵里を恨んだ。

よりにもよって、どうして木原朔眞の家に。 自ら敵の陣地にの

りこんでいつてるようなものではないか。

「届けるもんは届けたから。じゃ」

「もうちよつと待とうよ! ……………え、そんなあからさまに嫌そうな顔しないで。ちえー、これが穂高くんなら夕夜ちゃん喜んでいくせに」

「はっ!？穂高!？なんでここで穂高が出てくんのよ!？」

「それ、本気で言ってる?」

朔眞が夕夜の手首を掴んだ。

「ちよつ……」

「なんでここで穂高くんの名前が出てくるか?                      そんなの、君が1番分かってるくせに」

「は……」

何言ってるの、と問いかける言葉は最後まで言えずに。

バタンツ。

「ちよつ、辞めッ……」

「やーだ。逃がさない」

夕夜は扉の内側に閉じ込められてしまった。

「なにすんのよ?てか、この手なに?」

ギッ、と睨んだ視線の先、朔眞の腕は扉に手について、夕夜を逃

げられないようにしていた。

このシチュエーションは。

あの日の夜を思い出す。

穂高に　そう、“イタズラ”をされた日。

「どうしよっかな？」

「…何の真似」

「夕夜ちゃんもう逃げられないよね」

「話を聞けっ」

いかにも何か企んでます、的な雰囲気を漂わせる朔眞に、夕夜は一刻も早くここを立ち去ろうと決意する。

「どいて」

「やーだ」

「ウザイ」

「ありがとう」

…この男…

もう、本ツツ気でウザイ！！

「ふざけんなって……………言ってんのよ！！！」

最後の『よ』と同時に、思い切り朔眞を突飛ばす。

ガシャン！！

大きな音をたて、花瓶を薙ぎ倒し、朔眞は床に倒れこんだ。

あ、あれ…？

そんなに強く突飛ばしたつもりなかったのに。

だがそれ以降ピクリともしない朔眞を見てれば、さすがの夕夜も焦る。

「ちょ、ちよつと、まさか死んだんじゃないでしょ」　ゆさゆさと体を揺すってはみるが、返事がない。

明日の朝刊、『悲劇！！16歳少女がクラスメート殺害！？』

「

ないわ」

それだけは避けなければ！！

夕夜は耳元で名前を呼ぶ。

「…っ、き、木原朔眞ー！」

「なーに？」

以外にもあつさりと返事をし起き上がった彼に、啞然とする夕夜。

「…な…」

「やっと、呼んでくれた」 朔眞はふわっと笑って。

「は…え？」

「名前。出会ってから今まで、ずっとアンタだったでしょ？」

「…………… そうだった？」

「そうだよ。だから、どうしても名前呼んでほしくて」

一芝居、打たせてもらいました。

一芝居打たせてもらいましたア…？

「…ふっ、ふざけんなーッ！ー！」

「…ふざけてないよ」

「え…わっ」

不意に、朔眞が腕を掴んで顔を近付けてきた。

ダンッ、と音を鳴らして壁に押しつけられる。

「…それこそ、ふざけてあそこまでやると思う？」

「…あんたなら」

「ははっ、信用ない」

「会って1日のやつ信用しろっつー方が無理なんじゃない？」

現に今だって2人きりでこんな状態だ。

「…正論だね」

「じゃあ、手え離して」

「それはできないかな」

「…………… はあ」

もう怒るのも飽きた、とでもいうように夕夜は深いため息をついた。

「なんなの？何がしたいの？…何を企んでるの？」

「…それを知るのは」

君と穂高くんが 。 「…え？穂高がなに…」 瞬間、朔眞

が頭をおさえて丸くなった。

「いた…」

「え、何！？」

「頭、痛い」

「頭痛いい！？」

ちよつと見せて！と夕夜は後ろに回り込む。押さえている場所が、後頭部だったからだ。

そつと離れた朔眞の手のひらには、少しの血。

「あつ、あんたケガしてたんじゃない！」

「みたいだね…」

「みたいだねじゃなくてっ。もお！」

言うなり、夕夜は玄関の扉を勢い良く開けて、走り去った。

突然の行動に、朔眞は口を開けてぽかんとしているのだった。

## 第十話 寝坊と追及

「ふう……もういいよ」

あの後　　夕夜が玄関から飛び出して戻ってきた後　　、夕夜は家から持ってきたらしい救急箱で、それは素早く、てきぱきと朔眞に応急措置をしていた。随分と手慣れた感じで、朔眞はちょっとだけ尋ねてみたくなった。

「……ありがとう。でも、どうして？」

「……何が？」

使った器具を片付けながら、夕夜は声だけで答えた。

「なんで手当てしてくれたの？……あのまま家に帰っちゃえば良かったのに」

そうすれば、あんなに嫌がっていた自分から逃げられたはずなのに。

「そつか……そうよね！ああー！！」

気づかなかったあ！！

あたしのバカあ！！

本当に、悔しそうに頭を抱えて夕夜は唸った。

「……………」

そこまで悔しがられると、逆にむかつかない。

「でも」

「？」

「ケガしてる人ほっとくなんて、人として間違ってる」

そうでしょ？

何も不思議なことなどない、とうように朔眞を見据えて言った。

「……………それが理由？」

「そうよ」

他に何かある？

「……うん、いや……そうだね……。うん、そうだ」

妙に納得したようにひとつコクン、とうなずくと、「後もう一つ聞きたいことがあるんだけど」と、おもむろに話を切り出した。

「いーよ。何？」

この際、何にでも答えてやる。

「うん、あのさあ……」

「ん？」

「どうして手当てあんなに手慣れてるわけ」

「てなれ……ああ」

一瞬視線をずらして、何のことか分かったのだろう。

「なんだ、そんなこと。それは……」

穂高が暴れん坊將軍だったからよ。

「暴れん坊將軍!？」

朔眞は耳を疑った。

「そう。小さい頃のあいつは、本当に元気な風の子でさ。ケガするたびあたしが手当てしてあげてたの。だから自然にこうなっちゃったんだと思う」

そう言っただけかしむように薄く微笑む夕夜。

まあ……驚くのも無理はないだろう。

暴れん坊將軍なんて、今の穂高には全く似つかわしくないのだから。

「だってあんなスカして……ゴホン、違った。……クールな穂高くんが？」

「スカ……!! ブフッ」

口を押さえて夕夜は思い切り吹いた。

「穂高のこと、スカしてるなんてはつきり言っただ奴初めて見た!! そっそう、クールぶってんだよねえ穂高! いいよ遠慮しないでスカしてるって言って!! あははッ」

そう言っと思ひ切り腹を抱えて笑う。

……ついでに、バンバンと朔眞の背中を叩くものだから、彼は痛くて仕方ない。

けれど、そんなことよりも朔眞は思う。

「なんか…いいね」

「…っ、えっ？」

まだ笑いの余韻があるのか、目尻に溜まった涙を拭きながら夕夜は聞き返した。

「君の笑顔、初めて見たけど…いいね」

「っ、はあ!？」

「今まで怒った顔しか見たことなかったから」

そう言つとまじまじと夕夜の顔を覗き込んでくる。「そっ、それはあんたがいつも怒らせるようなことしかないからでしょ!？」

「朔眞」

「…くっ。…さ、朔眞が怒らせるようなことしかないからでしょ!？」

「そうかなあ」

「そうよ」

「じゃあ、今度からもっと笑顔が見れるように努力してみようかな?」

「…しなくていいわよ、そんなこと」

「…なんでだろう。」

あんなに、嫌だ嫌だと思っていた奴が。

今は、そんなに嫌じゃない?」

悪い奴でもないのかな…と夕夜は思った。

「じゃ、そろそろ本当に行くから」

「うん…また明日ね。ケガの手当てありがと」

今度はあっさりと夕夜が帰ることを承諾し、ひらひらと手を振る。明日もこなきやいけないのか…。

これから毎晩こんなやりとりが行われるのかと思うと、気が遠くなる。

夕夜は深い深いため息をつきながら、朔眞宅を後にするのだった。



次の日、いつものように学校へ行くため、これもいつものように穂高の家を訪ねた。

「おはよう」

「……………ん」

「…おはよう？」

「ああ」

「お・は・よ・う！」

「　　耳を引っ張るな耳を！」

ベッドから上体を起こして穂高は叫んだ。

現在地、穂高の家。

夕夜は穂高を起こしにきていた。

「あんたが返事しないからでしょ。うん、とかああ、は挨拶返したうちに入らない！」

そう言う人と人差し指をびしっ、と突き付けた。

「…はいはい」

「じゃなくて、挨拶！ほら返す！」

「……………おはよう」

「ん、おはよう」

夕夜は満足げににこつと笑って。

「ていうか、どうしたの？穂高が寝坊なんて珍しい。あたし、穂高のこと起こしに来たのなんて小学生以来じゃない？」

「俺がお前のこと起こしにいくのはしょっちゅうだけだな」

「…だまらっしゃい。それより、なんで寝坊したのさ」

あ、こいつ今話逸らしたな。

そう思いながらもあえて指摘はせず、ベッドからおりて身仕度しながら穂高は答えた。

「別に…理由なんて」

そう言って目を逸らしたのを夕夜は見逃さなかった。

「うそ。穂高うそついてるでしょ」

「は？…何を根拠に」

「根拠？…あんた、幼なじみなめてんじゃないわよ。自分で気づいてないならあたしが言っただけあげるわ！」 ふふん、してやったり。というような表情を浮かべて穂高を見下す。

「あんたはねえ、都合悪い時とかうそついてる時とかは右に視線そらすくせがあんのよ！」

「……………それほんと？」

大抵無表情な穂高が珍しく驚いた顔をする。

「ほんとともほんと！」

偉そうに腰に手を当て仁王立ちする夕夜だが、穂高はそれを相手にしない。

「…そーですか。 部屋出てってくれない？」

「なっ…」

噛みつくこうとした夕夜にずばりと穂高。

「着替え見たいの？」

「出ていきます」

即答である。

「でもねえ。後で曝くから」

「は？なにを」

「あんたの嘘をよ！」

全く諦めの悪い奴…。

蔑みの目で見えるが夕夜はそれに気づいていない。

「んつとにアホ…」

「何か言った!？」

「いいや何も。それより…」

ワイシャツのボタンをかける手を止めて。

「ふ、わッ!？」

夕夜をどんつ、とベッドの上へ押しやった。

「なななな何すッ…うわ!!あんた何で上に乗ってんのよーッッ」

体が硬直する。頭がパニックになる。

「…別にさあ…何で珍しくこの俺が寝坊したのかなんて、理由くらいいくらでも教えてやるよ?」

はだけたワイシャツから見えるその体が、艶めかしい。

「けどな…、だったら俺も教えてもらおうじゃないか」

「な、何を…」

夕夜の顔の横に肘をつき。

やだ、やだ、それ以上寄ってこないで。

「何を? …… おまえの隠しことをだよ」

「……………」

「目、逸らすな。おまえが言ったんだろ」

何で? 何でばれてんのよ。

穂高に隠してることがあるって。

「夕夜」

ぐいつ、と顎をつかまれる。

視線を合わされる。

「夕夜」

穂高がもう一度名前を呼んだ。

もう、目なんて合わせてられない。

鼻と鼻とが触れてしまいそうなのこの距離で。

どんな顔したらいいの?

胸が苦しくて泣きたくて。

「いってえ!!」

気づけば夕夜は逃げ出していた。

「で? 穂高くんの金たま蹴って逃げてきたってわけ」

「きつ… もうちょっと包んだ言い方を」

「じゃー股間?」

「……………なんでもない」

所変わり、学校。

夕夜は栄理に今朝起こったことを全て　　と言っても押し倒されて隠し事をはけ、と言われたただけなのだが　　話した。

夕夜にとつちやあそれだけでも一大事だ。

しかも相手はあの穂高。

……………あの穂高？

たかが穂高よ！　　自分に言い聞かせるように、強く言い直した。

というわけで芋づる式にずるずると、今まであったことも話した夕夜である。もちろん以前穂高にされた“イタズラ”のことだってそうだ。

…栄理には、「なんでその時に言わなかったのよ！！」とはたかれたが。

あの時の夕夜には、まだ人に話す余裕などなかったのだ。

「…そんなことより栄理！今あたしに差し迫ってる問題は、違うことなの！」

「そんなことってあんた」「…ま、まず目先の問題でしょう！」

「目先の…って？」

「今日の帰り！」

「帰り…どうかした」

「…穂高が迎えにくるじゃん」

「そんなのいつものこと…」

「じゃないの今回は！」

パンツ、と机に思い切り平手打ちをする。

それぞれの机に点在するクラスメートたちが、何人が振り返った。

「あ…。つまり」

少し控えめに耳打ちするように顔を寄せる。

「今日の朝、穂高置いてきちゃったじゃん？それだけでもヤバいの…さらに」

「金たま蹴っちゃったから？」

「…はははーそう金たま蹴っちゃったから  
もうどうでもよくなっている夕夜である。

「だから？」

「か、帰りの制裁が怖くて……！！」

ガタガタと擬音が聞こえてきそうなほどの勢いで震えている。

「大丈夫でしょー？穂高くん夕夜には優しいんだから」

「何？何だって栄理？」

「穂高くん夕夜には優しいから」

「…はいー??？」

「穂高くん夕夜には優しい」

「ストーップ！！！」

「なによ」

「栄理…なんか勘違いしてない？」

「どこが」

「全てよ全て！穂高があたしには優しい？むしろ逆でしょ。穂高は  
ねえ…あたしには厳しいのよ！！」

…駄目だこの娘は…

分かつちやいない。

栄理は額に手を当てて天を仰ぐ。

穂高がどれだけ、夕夜のことを思ってるか。

穂高がどれほど、他の女子には冷たいか。

…夕夜は、気づいてない。

それこそ、私だってただ単に夕夜と仲が良いから話してく  
れるだけ。お情けのようなものなのに。「じゃあ…そこまで言うな  
ら確かめにいこうか？」

「え」

すつとんきょうな声をあげる夕夜に構わず栄理は話を続ける。

「本当に、穂高くんが“夕夜にだけ厳しい”のか」

「……………」

「そうだって言ったのは夕夜でしょ？」

「そうだけど……、確かめにいくつてどうやって」

「そんなの簡単よ！昼休み穂高くん偵察に行けば一発！！」

高らかに拳を突き上げて、栄理は宣言したものだっ

## 第十一話 おまえは別

と、いうわけで昼休み。

「なあーんでわざわざあたしが…」

口をブスツ、ととんがらかして夕夜は悪態をついた。

朝、栄理が言ったとおり2人は穂高のクラスへ来ていた。

栄理いわく、『偵察』。

「まあ…昼休みにまで穂高の顔なんて見たくない」

そんなこと言いながら視線が追うのは他の誰でもない、結城穂高。夕夜の幼なじみ。

…だってだって、これは無意識にっというかクセっというか。

『無意識に』姿を追うことが、どういう『意味』をもっているのか、どういうことを表しているのか。

夕夜は気づいてない。

2人は扉の影に隠れて穂高の様子を伺っていた。

すると、

「ほーだかッ。またおまえに客だよーん」

「…ほっとけよ」

ダルそうに机に腰かける穂高に、明るい髪の色をした男子生徒が近寄った。

「あ、あれ確かあれだ」

「…あれってどれよ」

「うーんと、うーんと…」

名前が喉まで出かかっているのに分らない。

話しかけんなオーラにもめげず崩れた態度で言葉を投げ掛けるあの勇者。

「…あ！」

思い出した、ような気がした。けれど。

「結城くんッ」

その思考は、背後から聞こえる可愛らしい少女達の声によって打ち碎かれる。  
は？結城くん？…誰よアンタら。

ぐるっと後ろを振り返る。

「夕夜、眉間にしわ」

「……………フンッ」

とりあえずこの女の子達が穂高に來た客ならば、穂高はこちらに來るはずだ。

依然目つきが悪いままの夕夜を半ば引きずるようにして、栄理は穂高から隠れるように教室の扉から離れた。

「なあ穂高あー、せっかく教室まで来てくれたから行っただけよー。5・6歩の距離だろー？」

「…やだ。めんどい。俺が行く義理なんて無い。つか、なんならおまえが行ってやれば？」

「俺が行ったって意味ないだろー！！あのコ達はおまえに用があつて」

「ちっ、うるさいな。分かったよ…行けばいいんだろ行けば」

ガタン、と相変わらずダルそおーに嫌そおーに、穂高は立ち上がると、入り口に立って今か今かと待っている女子達に近づいた。

「…なに？」

「キヤーッ！ほらっあんたから行きなさいよっ」

「やだあキミちゃんいきなよあ」

「え！？何で私ッ」

ひそひそ声で彼女達は誰が先に行くか、トップバッターのなすりつけ合いをしていた。

夕夜と栄理はその様子を息を潜めて見つめている。…キヤーキヤーキヤーキヤーうるさいわね。アンタらそれしか脳がないわけ？大体穂高もそんなに嫌そうにしているくらいなら最初からこっちにくんнатての。あっ！！あいつらお菓子なんか渡してる！！！！

「穂高！！！！！！」



あーあ…バカ夕夜。

傍観者に徹することに決めて、栄理は遠巻きにその様子を見ていた。

本音はこうだ。

巻き込まれたくない。

「え？夕夜？…なんでここに」

無論、穂高はここにいないはずのない人物の登場に目を丸くする。

「…っ、あんたがお菓子なんか渡されてるからッ」

「は？お菓子？」

いきなり出てきて何を言ってるの、こいつは…。

「えー、てかこの子誰え？邪魔なんだけどお」

…は？邪魔なのはどっちよ。

「しかも結城くんのこと呼び捨てだし」

当たり前でしょ。幼なじみなんだから。

「つか、消えて？」

消えるのはてめえらだ。　そう言おうとして。

「はあ」

「ひゃっ!？」

気がつけばぽすん、と穂高の胸に背中を預けさせられていた。

つまり、穂高が後ろから抱きしめているような格好に近い。

う、わ……ッ。

近い。

振り向くこともできず、硬直したままの夕夜の肩に手を置いて。

「あのさあ…まだよく分かってないみたいだから言うけど」

穂高　？

「俺そういうのいらないうって前から言ってる。…消えるのはどっちだよ」

「……………ッッ」

彼女たちの顔が歪んだ。

夕夜の顔は驚きに満ちていた。

ひえー穂高くんキッツ…ッ。

心中栄理は思った。

「ほらー、私の言ったとおりだった…」

あの穂高くんがみんなにまともに接するわけがない。

「そういうわけだからこれもいらない」

そう言つと淡々と彼女たちが調理実習で作ったであろう、可愛くラッピングされた（おそらく）クッキーを、トンと胸に突き返す。

「そんな…」

ひどい…！

泣きそうな顔をして、彼女たち3人は走り去っていった。

「

……………

……穂高」

「ん？」

くるつと体ごと振り返つて、夕夜は何を思ったのか無言でズイツ、と拳を突き出した。

「なに…」

「手…！」

「は」

「手…！」

「???」

ゆつくりと差し出した手のひらにポトンと落とされたのは。

「あめ…？」

「そーよ。あげる」

「いきなり何…」

「いいから…！」

「?…ありがとう」

戸惑いながらも穂高は飴を受け取った。

そう、『受け取った』のだ。

「何よ…受け取るんじゃない」

夕夜は、笑った。

心底嬉しそうな顔で。

安心したような顔で。

…少し、泣きそうな顔で。

「っ」

それを見たとき、穂高はなぜか無性に夕夜が愛しく思えて、思わず抱きしめたくなった。

けどそれは、公衆の面前だし、何より抑えられなくなりそうなのでやめた。

「当たり前だろ…おまえは別。あんなどーでもいいやつらなんかと同じだとも思ったわけ？」

「……………穂高……………？別ってどーゆう」

「そ、それは……………」

空気が、止まった気がした。

穂高　？

「はいーそこまで！道の真ん中で2人の世界作らないでねー」

「高橋さん……」

「2人の世界なんか作ってない！！！」

顔を赤くして叫んでも説得力ないってば。

「とにかく昼休みもう終わるから。穂高くんバイバイ。ほら、夕夜いくよ」

ぐいぐい引つ張って廊下に行く。

「あ、ああ。また後で」

「はい。ほら、夕夜っ」

自分たちの教室に向かいながら栄理は本当に呆れ半分にため息をついた。

「はぁ……………」

分からない…ほんとに分からない。

ここまでお互い分かりやすく、どうしてくっつかないの！？  
今世紀最大の謎である。　もう！もう！！もう……………！！！！

「…栄理？何怒ってるの？」

「何怒ってるの！？そんなの決まってるでしょ！！アンタたちがあんまりにも……！！」

くつつくのが遅いから！  
そう、言おうとして。

結局、栄理は言うのをやめた。

「な、なに？」

「……いい。なんでもない」

どうしたってこれは当人同士の問題だ。部外者が首を突っ込んでよけいややこしくなるのは避けたいし、何より栄理は夕夜と穂高には、自分たちだけの力でうまくいってほしかった。

そうこうしているうちに教室について、2人はそれぞれ席に着く。  
て、ゆうか？

「穂高って、本当に知らない子には冷たかったんだ……」  
衝撃の事実……！

しかも、『あたしは別』って。

「……………へへ」

な、なんか顔がゆるむ。穂高が実は他の女子には冷たくて、あたしのこと『おまえは別』って。

そんなことが、異常に嬉しい。

どうしようもなくにやけてしまう顔を抑えて、ふと気が付けば、斜め前から視線を感じた。

そこにいたのは、木原朔真。彼は目が合うと、ニコツと笑ってひらひらと手を振ってきた。

うわ……。いやな奴と目え合っちゃった。

せっかくいい気分だったのに。

手を振り返すことなく視線を逸らした夕夜だが、あれ？と思う。

今日のあいついやに静かじゃない？

昨日は、あんなに絡まれたのに……。

そしてまた、悪寒が背中を走る。

嵐の前の静けさ……？

「ま、まさかね」

気のせい気のせい、と自身に言い聞かせて、夕夜は5時間目の授業を受けるための準備を始めるのだった。

## 第十二話 運命？～単純確率問題～

嫌な予感を感じた夕夜だったが、とりあえず帰りのHRが終わった時点ではまだ何も起こっていないかった。

少なくとも、夕夜の嫌な予感は、穂高の言う嫌な予感よりは確実に的中率は低かったはずだ。昔から。

「ほらHR終わったからさっさと散れ」

例のはちゃめちゃんな担任が挨拶するなりそう言った。

またあの馬鹿教師……。散れって！せめて帰れって言えいいのに。まっ、とりあえず穂高との帰り道はもう心配ないしッ」

夕夜はにんまりと笑う。

昼休みのやりとりで、朝の出来事なんて薄れてしまっている。

だから、朝恐れていた『置いてきたこと』への制裁と、『金〇〇を蹴ったこと』への報復は、ほぼ100%ないと考えていいだろう。穂高はそういう性格だ。

夕夜をいじめるのは好きだが、ネチネチと根に持って困らせるようなことはしない。

結局は、優しいのだ。

「夕夜」

「ん？」

そんなことを考えながら鞆にものを詰めて帰り支度していると、  
「分かったでしょ？」

栄理が得意げにそんなことを言う。

「な、何が……？」

ちよっといつもと違う感じの栄理を察して、微妙にたじろぐ。

2人はもう、いつでも帰れる状態で会話していた。

「だからあ、穂高くんは夕夜にだけは優しいってコト！」

「それは……まあ」

他の女子とは会話すらしたくなさそうだったし。

曖昧に頷き返す。

「それって、すごいことなんだからね！？分かってる！？」

「うん…」

夕夜には、それがすごいことかどうなのかよく分からない。

だって夕夜にとって穂高は、今も昔も変わらないあの穂高だ。

いつだって、さっきと何ら変わらない態度で、会話だってするし普通に遊ぶ。

でも。

…あの直後は、それが嬉しくて、すごくくべつなことのようを感じただけれど。

「…仮にそれが凄いことだとしても…結局はそれってあたしが幼なじみだからじゃない？」

よく考えればそうなのだ。

「…たとえば、穂高の隣の家に生まれたのが栄理だったら？…きっと、あたしだって昼休みに穂高に冷たく突き放された、あの人たちと同じ扱いなんだよ…」

自分で言ってて、落ち込んだ。

穂高があたしに優しいのは、『たまたま』隣の家に、『たまたま』同じ年で生まれたから。

そう消えそうなくらい小さな声で呟いてうつむいた。

「夕夜…あんたって」

「おまえってホント馬鹿」

「なっ…!!」

振り返れば、穂高。

「んであんたがここにいんのよッ」

いつの間に、来たのだろう。

穂高は夕夜の後ろに立っていた。

「いちゃ悪い？…いつまで待っても廊下に出てこない幼なじみを心配してわざわざ迎えに来てやったのに」

「うっ…。今の聞いてた？」

「ああ。ばつちり」

何故か怒った表情で言うと、そのまま夕夜の腕を引いて教室を出る。

「おまえ、全然分かってない」

「…な、なにをッ」

「………、高橋さん。コイツ、連れ帰る」

「あ、もうどーぞどーぞお好きなように」

栄理は両手を差し出す仕草までして、あっさりと夕夜を引き渡した。

穂高の微妙に不機嫌な気配を感じて、このまま帰りたくない！と本能が訴える。だから今の夕夜にしてみれば、

「ちよっ、なんっ…栄理の裏切りものー！！」

こうなるのである。

「裏切り？むしろ感謝してほしい位なんだけどね、夕夜？」

「…無駄な抵抗。行くぞ」

「…っ！！ちよ、まっ…！！栄理！！」

「なーに？」

「ほ、ほら、さっきいかけたことあったでしょ！？あれの続き！続き聞きたいなっ。長くなってもいいからさ！！」夕夜：あんたっ  
て」の次！！」

「ああ…あれ」

うんうん！！と目を輝かせて次の言葉を待つ。

「もういいわ」

につこりと、それはもう極上の笑顔で。

「ええ！？」

「あの続きは、きっと穂高くんがたっぷり教えてくれるから」

ひらひら、と手を振る栄理の姿はどんどん小さくなっていき。

夕夜はもう、観念するしかないのだった。

そんなこんなで微妙に不機嫌な穂高と一緒に帰りはするのだが、やっぱり会話なんてほとんどない。



最近このパターン多くない!?

時計塔が見えたときは、心の底からほっとした。

「あの、ほだ」

「…ホント理解できない」

時計塔の下ベンチの前で立ち止まり、夕夜に振り返り穂高は呟いた。

「…なに、が?」

「何で分かんないの?                    おまえさ、本気であんなこと考えてたの?」

「あ、あんなことって」

「…俺がおまえに優しいのは…『たまたま』隣の家に、『たまたま』同じ年で生まれた、から?」

睨むような目付きで夕夜に問いかける。

「…っ」

なぜかは分からないけど、夕夜は責められたように感じた。

「だって! 実際そうじゃん! もしここにいたのがあたしじゃなくて、違う子だったら!? その子が幼なじみだったとしたら!? …そしたら、やっぱり穂高はその子にだけ優しいんでしょ!?」

「……………」

穂高が黙っているものだから、夕夜の言葉はとまらない。

「だったら、素直に喜べるわけない! ……結局、基準になるのは『幼なじみであること』の、ポジションなんだから! …!」

ずっと、考えていた。

夕夜にだけ優しい、その理由。

…昼休みが終わってからいくらかは、他の女子には冷たかったという事実が、ただ単純に嬉しかった。

けれど、時間が経つほどに大きさを増す、この胸のモヤモヤ感。なんでなんだろう、と考えて行き着いたのはこの答えで。一度溢れた想いは止まらなくて。

「こ、こんなこと                    、言つつもりじゃ、なかつ、たのに…!」

気づけば、泣いていた。

…言った。言って、しまった。

あたしは、今の自分自身の立場さえ、否定してしまったんだ……。もう、そばにはいられない？

次に穂高が何と言うか、怖くて顔が上げられない。

夕夜の肩は、かすかに震えていた。

しばらく沈黙が続いたかと思えば、ハア…、と息をつく音が耳に届いた。

ビク、と肩が動く。

「…言いたいことは、それだけ？」

声を出せば涙声になりそうで、夕夜は黙ったまんまだ。

「…それは、確かにその通りだな」

「…っ」

やっぱり、そうなの？

気分が落ち込んで、また目頭が熱くなる。

「でも、だから分かってないっていうんだよ」

次の瞬間、ふわっと穂高の香りがしたかと思えば、抱きすくめられていた。

「ほ、ほだか…？」

突然のことに、夕夜は頭が回らない。

すぐ耳元で、穂高の声がする。

「夕夜、確かにそれはおまえの言うとおりかもしれない。だけど、もっと単純に考えてみな」

もっと、単純に…？

「偶然同じ病院で、偶然同じ日に、偶然家が隣同士の子供が産まれるのって何分の何の確率だと思う？」

夕夜は目を見開いた。

「それって、すごいことだろ。偶然通り越して奇跡じゃん」

そう思わない？と少し体を離して夕夜の顔を覗きこむ。

「…うん。お、思う…」

ぐずつと鼻を鳴らしながら夕夜は答えた。

「だろ？じゃあおまえと俺が出会ったのはもう、運命なんじゃない」

「…運命？…あは、そうかも」

泣き笑いの表情で夕夜は顔を上げた。

…いつの間にか涙は止まっていて。

「…なんか穂高、らしくない」

「はあ？…おまえが泣くから」

誰のせいだよ、と少し耳を赤くして言っ

て。夕夜はなんだか、今までにないくらい穂高のことを愛しく感じていた。

「…ていうかおまえって、本当バカなのな。…バカだバカだとは思ってたけどまさかここまでバカだとは」

「…ちよつと、バカバカ言い過ぎじゃない」

せつかくちよつと、いい雰囲気だったのに。

「…ありもしないこと想像してあそこまで鬱になんて、普通なんねえよ」

蔑むような目つきで見られれば、そりゃあ夕夜だってカチンと来る。

「仕方ないでしょ！？…本当に、本当に不安になっちゃったんだから！！」

「…へえ…」

不安にね…

意味ありげな視線を送ってくる穂高に、夕夜はといえば。

「…なによ」

「別に？」

「はあー！？」

あんたほんつとム力つくー！！

「知らない！」

噛み付くように大きな声で叫んで、夕夜はマンションの玄関口に

向かって歩きだした。

「…やっと、いつもの調子が戻ったな」

先を歩く夕夜には聞こえないように、そっと呟く。

夕夜

は、知らない。

さっきまでの穂高の言葉は、落ち込んでいた夕夜にいつもの元気を取り戻させるためのものだったということ。。

### 第十三話 回りはじめた齒車

その後穂高は、先を歩く夕夜に追いつき、二人そろって8階までエレベーターで昇った。

どちらも何も言わないけれど、今はその空気はあたたかいものだった。

チン！と鳴って扉がひらく。

「あーっ夕夜ちゃん！」

「…げ」

そこにいたのは。

THE・空気の読めない男…木原朔眞だった。

夕夜は一気にテンションが下がるのを感じていた。

「遅かったじゃーん、だいぶ待ったよ？」

…穂高の眉が、ピクツと上がる。

まつ…また穂高の機嫌悪くなるじゃない！

「…やめてよね！誰も待つててなんて言っでないでしょ！？それより、あんた早く家に入りなさいよ！！」

「えー？ひどいなあ。てゆうか夕夜ちゃん、あんた…？」

につこりと黒い笑顔で微笑まれば。

「~~~~ツツ！！早く家に入りなさいよ、“朔眞”ッ」

そう言わざるをえなかった。

「は？朔眞？」

…反応したのは、穂高。

怒られる！？

なぜか反射的にそう思った。

「そうだよ、俺らそういう仲なの。ね、夕夜ちゃん？」

「そ、そういう仲って何！たかが呼び捨てしただけじゃない！勝手なこと言わないで！」

「そんな照れないで」

「気持ち悪いし照れてない!!」

いつもならこういう時、夕夜ならば『あんた何言ってるの？寝言は寝て言え』くらい、言うのだろう。

だけど今回は、その夕夜が、必死になって否定している。

穂高にとっては、逆効果だった。

むしろ、変に勘ぐる。

「…夜のお楽しみもあるしね？」

覗きこむようにして、朔眞が夕夜に言った。

「…夜のお楽しみ？」

静かな、ドスの効いた声。怖いくらいの無表情。

「ちがつ…！これは」

ただの晩飯の差し入れのことでしょー！？

「誤解を招くようなこと言っな…！」

「だって、ホントのことだし」

焦る夕夜をよそに、朔眞はあっけらかんと言う。

「穂高、ホントに違うの！朔眞が勝手に言ってるだけで。それに、もとはといえばおか…」

お母さんが。

そう、言おうとしたのに。

「もとはといえば、何？」

穂高の冷たい目に、何も言えなくなってしまった。

「…っ」

木原朔眞が言うほどではないにしろ、何か俺には言えないやりとりがおまえらの間であつたのは事実なんだろ？

そう口に出すことはかろうじて抑えた穂高だが、自分には分からない会話が朔眞と夕夜、二人の間で成り立っている。

それだけでもう、穂高が怒ってしまう分には充分なのだ。

夕夜だって、木原朔眞のことは嫌っていたはずなのに。

「俺もう、おまえの考えてること分らない」

「穂高！」

「俺が家に入る。おまえらは…二人で話してな」

「ほんとー？嬉しいなあ、ありがとう」

「そんな…。穂高？」

「待ってよ！」

引き止めようと伸ばした手は避けられて。

「じゃあな」

玄関の扉は、重い音を出して閉ざされた。

「…ただいま…。…どうしたの、夕夜」

たった今仕事から帰ってきた絵里は、家に入ってすぐとてつもなく暗い夕夜に気づいた。

「やめてよまあー、家の雰囲気まで暗くなるじゃない」  
うるさいなあ。

そう返ってくるのを予想しての言葉だったのだが。

「……………どうせあたしなんか」

そう言っただけ、夕夜はリビングのソファの上から動かない。  
しかも、常時体育座りだ。

この子がここまで落ち込むなんて！

…穂高君絡み？

何ていったらまた地雷を踏むだろう。

あえてノータッチで絵里は晩ご飯の支度を始めるのだった。

「ご飯も食べ終わって、来たるはお隣への差し入れの時間。

「いきたくない…」

「だめ、餓死したらどーすんの。あんたのせいになんのよ？」

嫌がる夕夜の背中を押して、絵里は外へと送り出す。

とぼとぼとした足取りではあるが、夕夜はちゃんと朔眞の家に向かっていた。

「朔眞、来たよ。開けて」

「はい。いらっしゃい」

その様子を、偶然外に出てきていた穂高に見られていたことも、知らないままに。

「…なんで、夕夜が？」

風が、ビュウ、と強く吹いた。

「んーっ、ごちそうさま。おいしかった。夕夜ちゃんのお母さん、本当料理うまいね」

「…そお？別に普通じゃない…」

「いや、充分おいしいよ！！」

やけに力を込めて、朔眞は一言一句噛み締めるように言った。  
「これ、すごく大事なことだと思う！」

握りこぶしまで作って、高々とあげている。

空になった容器をまとめながら、夕夜は若干気圧された。

「あ、あそう…。良かったね」

…何か過去に、相当まずい料理でも食べたんだろうか。

ひと通り片付けが終わって、手が空いた。

そうになると、知らぬ内に考えごとをしてしまう。

…考えるのはもちろん、穂高のこと。

「…どうしたの？なーんか上の空だね」

…どうしたのって…あんたのせいじゃない。

「さては、穂高くん嫌われちゃったから？」

…別にまだ嫌われたとは決まってません。

「て、僕がいらないところで出てきたせいか。ごめんね？」

だから…本当に悪いなんて思ってもないくせに。



「悪いと思っ てんなら、もうあたしに関わ ないでよ」

今は、誰に何を言われても、つっ けんどんにしか返せない。

… 本当は、分かつてる。

別に、朔眞ひとりのせいじゃない って。自分にも責任はあるんだ から。

そう、思いはしても。

「あははー、楽しいなあ。夕夜 ちゃんと穂高くんがケンカして、 し かも君がここにいる」

朔眞のこの態度に、素直にやつ あたりだと到底認められるわけが ない。

「何で穂高くんあんなに怒った んだろうね？」

何それ、いやみ？

でも… 確かにそうだ、と夕夜は 思う。

ただ、穂高にこの差し入れのこ とを言っ てなかったというだけ に しては、怒りすぎな気もしないで もない。

「… 夕夜ちゃん、僕の家毎日差 し入れに来てるってこと、穂高 くん に言っ てなかったんだね」

「それは…」

確かにその通り。

夕夜は軽く口ごもる。

「なんか、すごく意外。君と 穂高くんて、お互いのこと何でも 知っ てるんだと思っ てた」

「… そんなこと全然ない」

成長すればするほど、知らない ことが多くなっ て。

… 少しでもそれがドキドキして、 少しでもそれが淋しい。そうして また俯きがちになる夕夜を見て、朔眞は 呟いた。

「 僕にすればいいのに」

それはホントに小さな声で。

「え？」

夕夜は聞き返してしまっ た。

「だから」

言葉を切つて、彼はご飯を食べるために座っていた椅子から立ち上がると、斜め向かいにいた夕夜へと近づく。

「僕にしなよ。君がうん、とさえ言えばいいんだよ。…穂高くんより優しいし？ ちょーうお買い得じゃん」

ねっ？と笑顔を向けられる。

「…どうしてこんな時にそんな冗談言えんの」

「やだな、こんな時だからこそだよ。君が弱つてるとき、狙い目じゃん。それに…冗談じゃないし？」

相変わらず、ヘラヘラと笑ったままで言う。

「……………やめてよ」

それを夕夜はギ、と睨みつけて。

「ヘラヘラしてる内は、あんたの言葉なんか信用できない。朔眞は、簡単に自分に懐かないあたしが珍しいだけなのよ」

きつぱりと言うと、夕夜は空の容器を掴んで逃げるように家を出ていった。

「…キツいこというなあ夕夜ちゃんは」

残された朔眞は、ただ静かに笑ってそう言った。

### 次の日の昼頃。

朝から気分の上がらなかつた夕夜は、だんだんと片付けられてきた自分の部屋を眺めていた。

整然としている部屋は、なんだか自分らしくない。

「…穂高が見たら、なんて言うかなこの部屋」

常時ものだらけだった自分の部屋だ。きつと、ビククリするだろう。「明日、地震でもおきるんじゃないの？」くらい言うのだろうか。

「あは…なんか想像つく」 床に置かれた段ボールの上に頬をのせ

て、小さく小さく呟いた。

「どうしよう…そろそろ、言わなきゃ駄目だよね」

何日も、何日も前から言えなかった隠しごと。

おまえは嘘つくの下手。

何を隠してるのか教えろ、と二度三度言われても言えなかったこと。

それが、これだ。

「ロサンゼルスか…」

夕夜は、引っ越しを2週間後に控えていた。

## 第十四話 穂高のきもち

ケンカしてから、5日が過ぎた。未だに二人は、仲直りしていない。

「…また今日も一人で登校？ほ・だ・か・く・んッ」

「…大野。ほつとけよ」

朝、時間もまだ早く人のいない玄関。

穂高の（自称）友達、大野智也は一人で靴をはきかえていた穂高に声をかけた。

ちなみに、前に夕夜が昼休み穂高の教室を覗きに行ったとき、穂高に話しかけていたのも大野智也である。…結局夕夜は彼の名前を思い出せなかったのだが。

「なーんか違和感あるんだよなあ。穂高と高良さんが一緒じゃないと」

揃って教室に向かっているとき、智也が独り言のように言った。

「…違和感？」

「ああ。ちょこまか動いてる高良さんを、穂高が問答無用に連れてくる。くーっ、これなんだよなあ俺的朝の風景は！それ見ると、ああ…今日も1日始まるんだなあって思うよ」

.....。

聞き返さなきゃよかったと、穂高は心底後悔した。

智也を置いてきばりにしてスタスタと先を歩く。

「無視！？無視ですか、へー。じゃあその登校のときに、教室では絶対見せないようなふにやふにやした表情するの、どこのどいつだろうな？」

「は！？」

これには穂高も黙っていられなかった。

「ふにやふにやって何だよ？」

「ふにやふにやしてんじゃねーか！」

おまえ自分鏡で見てみるよ！！と智也は叫ぶ。

…登校途中に自分を鏡で見るなんてふつつしない。してたら、余程のナルシストだと穂高は思う。

「見るわけないだろアホ」

言うだけ言って穂高は自分の席に着いた。

アホ扱いかよ？

意気消沈の智也だが。

「後から俺の言ってることがホントだったって、よく分かるよ」  
穂高には聞こえないように、確信を持った声でそう言った。

数学の時間。

窓から見える校庭で、夕夜のクラスが体育をしていた。

…そういえばこの時間、体育だったな夕夜。

目線だけで走る夕夜を追う。

「あいつとこんなに長いあいだ話さなかったの、初めてかもしれな  
いな…」

小さな小さな声で呟く。

…そう、夕夜と話さなかった日なんて一度もない。

どんなに会話が少ない日でも、最低2回以上は絶対話す。全く話  
さないのは…今日で6日目。

…話さないようにしてるのは自分なのだけれども。

それなのに、何か物足りないような、淋しいようなこの感じ。

「俺も、大抵バカか…」

人のこと言えないな、と穂高は自嘲気味に笑った。

そうして今日もまた一日が過ぎ。

穂高は、家路についていた。もちろん、一人きりでだ。

マンションに着いて、ガチャツと扉を開ける。今日は途中寄り道をしてきたものだから、もうとくに晩ご飯の時間になっていた。

「ひとりで飯、か」

静まり返ったリビングで、誰に向けるでもなく呟く。

夕夜とは今、距離を置いている。

…夕食に呼ばれないなんて、当たり前のことなのに。

…一人でご飯を食べるのも、そう珍しいことでもないのに。

「…っ！」

穂高は、二人掛けのソファーにドカツと身を沈めた。

「何なんだよ、この苛々…っ」

そう。…思えば、このモヤモヤとしていて、苛々する感情がはつきりと自分の目に見えて表れるようになったのは、あいつが現われてからだ。

あの、転校生。

「木原朔眞…」

何かといえば、夕夜に近づいて。

何かといえば、夕夜にベタベタする。

いきなり現れて簡単に夕夜と打ち解けて。

「は……。今じゃもう、家に行く仲だもんな」

穂高は、昨日偶然目撃した夕夜の姿を思い出していた。

別に、見たくて見たわけじゃなかった。

…ただ偶然、コンビニに行った帰りに見てしまっただけで。

「朔眞来たよ、開けて、って…初めて行く奴の台詞か？」

泣き笑いのような表情で穂高は言った。

「…ふざけんな」

じゃあ、俺のこの16年間は何だったんだ？

会って一週間ちよつとの奴に、あっさり取って代わられるような、そんな薄くて、簡単なものだったのか？

考えれば考えるほど、苛々は募るばかりで。

どうしてこんなに悩んでしまうのかなんで、さすがにここまでくれば見当もつく。

「…俺は、夕夜が好きだ」

そんなことは、とくに気づいてた。

ただ、認めていなかったただけ。

…いつからだったかなんてわからない。

中学生の頃から？

小学生の頃から？

幼稚園の頃から？

…もしかしたら、生まれたその瞬間からかもしれない。

夕夜のことを想うきもちは、きつとずっと、昔からあって。

ただそれは、自分にとっては当たり前すぎる感情で…だから、この16年間気づけなかったんだと穂高は思う。

だけど、あの日。

あの、夕夜が自分の家に泊まったあの夜。

あの時から、自分の中の夕夜に対する感情に火がついた、と穂高は思う。

「そもそも、あいつが人のベッドで寝るのが悪いんだ」

頬杖をつきながら、あの時の夕夜の姿を思い出す。

脚なんか出して寝てんじゃねーよ、と少し赤い顔で呟いた。

…ふと、脳裏に最期自分を引き止めたときの夕夜の顔が浮かんだ。

弱々しく伸ばされた手に、か細い声。今にも泣きそうなくらい瞳いっぱい涙を溜めて。

…「穂高」と夕夜は呼んだのに。朔眞じゃなくて自分呼んだのに。

「ごめん、夕夜」

拳を握り締めて穂高は決意する。

もう、木原朔眞なんか関係ない。

自分は、夕夜が好き。

…大切なのは、それだけだ。

穂高は勢いよく立ち上がると、玄関をくぐり、隣にいるはずの夕夜の元へと向かった。

インターホンを鳴らすと、出てきたのは夕夜ではなく絵里だった。

「あの、夕夜は」

「あら、穂高くん。えーと…夕夜？」

「はい。…いますか？」

「あ、えーとねえ…」

一瞬、ちらつと視線をずらしたあと、絵里はためらいがちに言葉を続ける。

「夕夜、今いないの」

「いない？」

「じゃあ、どこに…」

穂高の疑問に対して、絵里はふわりと笑うと。

「木原、朔真くんだったけ？…この時間はあの子のところに、  
つ  
まり隣に行ってるわ」

穂高はガツン、と頭を殴られたような気がした。

木原：また？

しかもこの時間は、って言い回しを聞いたかぎり、毎晩行っているふうな口ぶりだ。

…一体、いつから？

穂高は自分の表情が険しくなるのを感じていた。

「すみません、また来ます」

再び自分の家に入って、穂高は重いため息をつく。「…んで、いないんだよ」

せっかく、謝ろうとしたのに。

しかも、行き先は。



「木原かよ……」

それでも。

夕夜を突き放す気になんてなれない自分はすでに、重症なのだろう。

このきもちを知らなかった頃の自分にはもう、戻れない。

戻りたくもない。

…少し変化が起きた今の自分も、嫌いじゃないな。

穂高は不思議と、静かなきもちだった。

ガキの頃から一緒だった夕夜を、いつのまにか「女」として見た。

「…それもそれで面白いしな」

たとえば夕夜がどんな理由で木原朔眞の家に行ったかとして  
も…今度はちゃんと、最後まであいつの話を聞こう。

そして、夕夜にこのきもちも伝える。

そう心に決めて、その夜穂高は眠りについたのだった。

## 第十五話 夕夜のきもち

「そういえば昨日の夜ね、穂高くん来てたわよ」

「ぶっ!!」

一夜明けて朝。

夕夜は母と共に朝食をとっていたとき、何でもないことのように絵里にそう告げられた。

…実際、絵里にとっては何でもないことなのだが。

「ちよつと、何吐いてるのよー。汚いでしょ!」

「……………」

「夕夜、聞してる?」

「……………」

「夕夜!」

「お母さん!!!!!」

「え!?!」

黙っていると思ったら次の瞬間には叫び返す。

な、なんなのこの子!

びつくりするのも無理はない。

「穂高、いつ来たって?…てか、ホントに来たの?」

ありえないことを聞くように、夕夜はゆっくりと確かめるように聞いた。

「…ホントよ。来たのは…昨日の夜ね、さっきも言ったけど。…なんで疑ってんのか知らないけど…、これは本当よ?」

うそ…。穂高が来た?

あたしのこと、避けてた穂高が?

「なんでその時に言ってくれなかったの!」

「だってあんた、朔真くんちに行ってたじゃない」

「だから言えなかったのよ、と絵里は言った。

その瞬間、夕夜はサーツと青ざめた。

「穂高が、穂高が来てくれたのは本当に嬉しい。けど、じゃあ。」

あたしまた、やつちゃった!?

「なんで差し入れ行つてるときに来るのよー!!あたしも穂高も、タイミング悪すぎ!」

これでまた、穂高が誤解を深めちゃうかもしれないじゃない!意味もなくぶんぶん頭を振って夕夜は唸る。

「…あんたたち、なんかあったの?」

そのようすに絵里は当然の疑問をぶつける。

「そついえば最近学校の行き帰り別だし、あんた穂高くん晩ご飯に呼ばないし?」

「~~~~~ツツ!!」

誰の所為だと思つてんの!!元はといえば、お母さんがよけいな親切を朔眞に申し出たせいでしょ!?

なんて言えるはずもなく。

「もー学校行く!」

夕夜はそのままの勢いで、家を出ていった。

「ふゝん?面白くなってきたじゃない」

意味深に笑つて絵里は夕夜が出ていった方向を見つめていた。

「でもそれつて別にお母さんだけのせいじゃなくない?」

「分かつてるよそなの!」

学校に着いて栄理に今朝あったことを話した夕夜だが、返つてきた返事は実に正論だった。

だからよけいに頭にくる。

「分かつてるけどーすればいいの!?お母さんのせいじゃない、朔眞のせいでもない。でもかと言って」

「夕夜だけのせいでもないしね」

「……もう、分かんない」

難しいことを考えるのに自分の頭は向いてない、と夕夜はぼやく。  
「難しいこと、ねえ……」

そんな夕夜を見て栄理はため息をつく。

「しょうがないな、というように。」

「ね、夕夜」

「……なに」

「それってホントにそんな難しいことなのかな？」

「……どういうこと？」

「初めから順を追って考えてみようか」

「順を追って……」

「そ。はい、《高良夕夜と結城穂高の愛の劇場》始まり始まりー」

「……………」

「あいのげきじょう……」

突っ込みどころは満載だったが、とりあえず黙って聞いてみることにした。

「あるところに、幼なじみの夕夜ちゃんと穂高くんがいました。二人は小さい頃からずっと一緒に片時も離れたことはありません」

「……別に四六時中一緒にいるわけじゃないんだけど。」

「ある時、夕夜ちゃんのお母さんが仕事で帰ってこれないと言うので、夕夜ちゃんはお隣の穂高くん家に泊まることにします。さてその夜、いつものようにじゃれあっていたところ」

「じゃれあって……そんな風に見えるの!？」

「なんだかいつもの悪ふざけと様子が違います。穂高くんは色気たっぷり声で夕夜ちゃんの耳元で話すのです」

「……なんかその言い方、やだ。」

「何よその目。ホントのことじゃない」

「そうだけど」

「続けるわよ」

「……いいえと言える空気ではない。」

「ひと晩明けるとあら不思議。今までふつうだった穂高くん  
のことが、なんだかカッコよく見えちゃいます」

何でそれを……！！

「悲しいくらいに彼の一挙手一投足に惑わされるのです」

……ホントにそうだよ。

「前まで平気だった穂高くんの周りの女の子たちの存在にも、  
なか腹がたちます」

……栄理って超能力者？

言っていないことまで、読まれてる。

「そんなある日、夕夜ちゃんのことを彼女にしたいという転校生が  
やってきます。夕夜ちゃんは、お母さんの親切な気づかいにより、  
その転校生に毎晩晩ご飯のおかずをおすそ分けすることになったの  
です」

……やっぱりお母さん結構いらないことしてるよ。

「けれど、何ででしょう。夕夜ちゃんは、なんとなく穂高くんにこ  
のことを言えません」

だって、なぜかまずいと思ったんだもん。

「黙っておすそ分けを続けて数日。ことあるごとに夕夜ちゃんに迫  
ってくる転校生ですが、ある時夕夜ちゃんに名前で呼んでほしいと  
言います」

……確かに言われた。

「バカな夕夜ちゃんは、素直に転校生のことを呼び捨てにします」

「バカって何！？あれは騙されて……ッ」

「言い訳しない」

「く……ッ」

「ひょんなことからそれらを知った穂高くんは、めっちゃめっちゃ不機  
嫌になってその日から夕夜ちゃんのことを避け始めました」

「……………うん」

「さてここで問題です。穂高くんは、何に対して怒っているのです  
よっっ」

…何に対して…？

「…あたしが朔眞の家に行ってたこと？」

「うーん…惜しいけど違います」

「ええー…」

じゃあ何？と夕夜は頭をひねる。

「そこを自分で考えなきゃね」

そんな…。

「あ、先生来た。じゃあ夕夜、それ課題ね。今日一日たっぷり考えて」

自分の席に行きかけて、「あ、あとさ」と栄理は振り返った。

「穂高くんのこと考えるのも大事だけど、夕夜自身のこともきちんと考えてみれば？」

「あたし自身？」

「そう。…なんで夕夜は今、そんなにも悩んでるのか。なんでこの間、“幼なじみだから優しいだけ”なのがあんなに嫌だと感じたのか。…何より、なんでそんなに穂高くんのこと頭が一杯なのか」

「答えは、ひとつだと思うけど？」

綺麗に笑って栄理はいなくなった。

答えは、ひとつ…。

繰り返し呟いて、夕夜にとってはとても長い一日が始まった。

## 第十六話 手がかかる

夕夜は考えた。

今日一日考えて考えて考えて…思い出したことがある。

「で、どう？答え出た？」

HRは終わっていて、夕夜も帰りの準備は終えていた。

「答え…は、まだ分からない。でも、思い出したことがあるの」

「…思い出したこと？」

何？と興味津々の顔で栄理は夕夜に続きをせまる。

どうして今まで忘れていられたんだろう？

「あたしね…この間、穂高といるとき…なんでかな。『ああ…愛し  
いなあ』って思ったんだよね」

「……………え？」

「だからあ…愛しいなって、思ったの」

「それ、いつどんな状況で？」

「え」

いやに食い付きが良い。…なんというか、迫力がある。

「いつ？…は、ケンカする前。あたしが、幼なじみだからってだけ  
で優しくされるのは嫌だ、って騒いだときあったでしょ？」

「ああ…うん」

ていうかそれだけでもう栄理が言う『答え』は、出ているも同然  
なのだが。

「その時に、穂高なぐさめてくれたの」

「…どんな風に」

「え…言うの？」

「うん」

夕夜は一瞬躊躇する。

「…いい言いたくない」

「なんで」

「…、なんでって…」

…あの時の、少し照れながら…それでも自分を抱きしめて、『出会ったのは運命』だと言ってくれた穂高を…、らしくないことを自分のためにしてくれた穂高を。

自分以外の誰かに知ってほしくない。

夕夜は、直感というか本能で、そう思ったのだ。 「…夕夜顔あかい」

「えっ」

…思い出し照れ？

「ふーん…もういいよ、分かった分かった。つまり夕夜は」

優しい穂高くんは、自分だけの胸にしまっておきたいってことね。榮理は、呆れたようにそう言った。

「えっ、違っ…！」

「違うくなーい」

ツン、と夕夜のおでこをつつく。

「なんかもう…無駄みたい」

「え？」

意味が分からずに夕夜はきよとんとする。

「考えるなんて言ったあたしが悪かった。夕夜、あんた…」  
ちゃんと分かっているじゃない。

「…え？」

「愛しい、って思ったり、独り占めしたいって思ったり。そーゆーの、感じるならもう答えは出てるも当然よ」

「そう、なの？」

夕夜にはよく、分からない。

腑に落ちないような顔をしている夕夜に向かって柔らかく笑う。

「…夕夜はさ。本能とか直感で動けば、それが正解になるの」

「…本能とか、直感？」

「そう。今もそうだったじゃない。『穂高くんのこと話したくない』って思ったこと。直感だったでしょ？」



インスピレーション、ってやつ？と栄理はこめかみあたりに人差し指を当てる。

「…た、確かに」

「ふふん。でしょ？じゃあ、もういいじゃないそれでっ。 本

能のままに行くのよ、夕夜！

あの夕日に向かって！と、言いかねないくらいに栄理は力を込めて言った。

「わ、分かった」

なんだか知らないが妙な説得力がある。

知らぬ間に夕夜はすっかりその気になっていた。

「さて。ひとつ結論が出たところで、もうひとつの課題、いってみようかしら」

いたずらっ子のような笑みを浮かべて、栄理は夕夜に向き直る。

「もうひとつの課題？」

そんなのあったらどうか。

夕夜は本気で分からなかった。

「もう忘れたの！？あのねえ、」

と、そのもうひとつの課題とやらにとりかかろうとして、栄理は

「あつ！！」と大きな声を上げた。

「…今度はなに」

じとっ、と栄理の顔を見た。

「穂高くん！！」

「えっ！？！？！？」

思いがけない人物の名前に夕夜は思い切り体の向きを出入り口の方へ向ける。

「…いないじゃない！」

「うん。…一瞬で行っちゃった」

「あ、あ、あ、あたしも帰るッ」

ものすごい勢いで鞆をひっ掴むと、夕夜は穂高の後を追おうと教室の外へと飛び出た。

「待つて!!」

「ぐはっ」

襟首をわしづかみされた。

「あ、ごめん」

「うゝえゝゝ…かはっ!し、しぬ」

たった今本気で生命の危険を感じた。

「あの、ほんとごめん。でも、これだけは言っとこうと思って」

「、ゴホッ、何？」

「その、さっきのもうひとつの課題。あれ、『穂高くんが何に対して怒ってるのか』っていうのだったんだけど」

「あ、ああー!!」

そうだ、そうだった!

「一応、思い出したみたいね」

「うん、今。で、それが？」

「あれね、どうしても分からないなら、自分と穂高くんの立場を置き換えて考えてみて」

ガシッ、と夕夜の肩を掴みながらいつになく真剣な顔で栄理は言った。

「立場を、置き換えて？」

「うん。夕夜が、穂高くんに対してしたこと。立場を置き換えてもう一度考えてみるの」

分かった!?

鬼気迫るようすで同意を求められれば、うんと言うしか他はない。

「きつとすぐく、大事なことから」

夕夜と穂高くんにとっては…。

ようやく肩から手を離して、今度は落ち着いた声音で言う。

「…分かった」

「ところで、引っ越し、いつだったっけ!？」

「え」

いきなりの話題転換である。

「い、一週間後」

一週間…、と栄理は一人呟く。

「穂高くんに言っただんでしょね」

「え…。えーと…」

不自然に視線を逸らした夕夜に栄理は激昂した。

「信じらんない！！……………~~~~~~~~ッッ、今日こそ言って！」

「は、はい」

栄理、いつからそんなキャラに。

呆気にとられる夕夜にまた一言。

「早く後追いなさいよ！」

「は、はいいいッ」

よく考えれば、引き止めたのも栄理であれば話し続けたのも栄理だ。

非常に理不尽な怒りなのだが、栄理の迫力に気圧されている夕夜にそんなに物事をよく考える暇などなかった。

それに自分としても、早く穂高に追い付きたかった。

夕夜は一生懸命、走りに走った。

「手がかかるわよ、全く…」

残された栄理は、ぎゅっと自分の拳を握る。

一週間、か…。

「…寂しいのは、穂高くんだけじゃないんだからね」

時はほんの少し戻り20分前。

自分のクラスのHRが終わって、穂高は夕夜の元へ行こうと教室を後にする。だが、

「穂高！」

智也に呼び止められて、穂高はしぶしぶ足を止めた。

「…なに？」

「高良さん、迎えに行くの？」

「そうけど……」

とたん、智也はぱあっと顔を明るくした。

「仲直りしたのか!!」

「してない」

無表情で即否定。

「……………おい。じゃあ何しに行くんだよ？」

「だから……これから仲直りしようかと思って。まず迎えに行こうと思っただよ」

ぶっきらぼうに言う。

「あ、そういうこと……」

「まあ……」

一緒に帰ってくれるか分かんないけどな。

悲しさを混じえた表情で、穂高にしてはやけに弱気発言だった。

そんな穂高を見て、『やつぱり……』と智也は思う。

「おまえのポーカーフェイス崩れさすことできるのって、この世で高良さん一人だけだよ」

「はあ？」

「……もう分かってんだろ？自分にとってあの子がどういう存在かにやりとしながら、智也は穂高の背中を叩いてみせる。

「いつて……」

否定しないところを見ると、どうやらやっと自覚したみたいだ。

「頑張れよ」

「……ああ」

そして智也は、夕夜のクラスへ向かう穂高の背を見送った。

「つたく、手がかかる……」

自分と夕夜が、それぞれの友達に同じことを言われているなど、穂高は予想もつかないだろう。

教室に着いたが、中を覗くとなにやら栄理と夕夜が話しこんでいる様子だ。

夕夜がこつちに気づく気配なんて、全くない。

と、栄理がこちらに気づいた。

「あ、」

穂高が声を上げる前に、栄理がそれ以上にばかでかい声で、

「穂高くん！！」

と叫んだ。

と、次の瞬間、穂高の体はくるりと踵を返し、スタスタと玄関に向かつて歩いていった。

何やってんだ、俺。

そうは思いながらも足は止まらない。

後ろでなにやら栄理と夕夜がすったもんだしてる声が聞こえるが、そんなのお構い無しに穂高は着々と歩を進めていた。

は、と気がついて顔を上げるともう時計塔の下だった。

「…仲直りはどうしたんだよ」

それに、きもちを伝えるっていう決心は。

情けない。

でも、なんか駄目だった。

夕夜と目が合う、と思ったら。

次の瞬間にはもう歩きだしていたのだ。

「あー…」

その場に思わずうずくまる。

俺はいつからこんなに臆病になったんだろう。

それも、夕夜限定。

悲しいくらい、夕夜しか頭がない。

じゃり…、と小さな足音が聞こえた。

立ち上がり、ゆっくりと後ろを振り返る。

「穂高…っ」

「夕夜」

そこには 自分に追いつこうと必死で走ったんだろう  
肩で息をしている夕夜の姿があった。

…やけに朱い、不気味なくらい大きな夕陽を背にして。

## 第十七話 悪あがき 決定打

血で染められたみたいに真っ赤だな。

夕陽に彩られた夕夜を見ながら、穂高はぼんやりとそう思った。

「っ、逃げてんじゃないわよ」

言いながら、夕夜は一步一步穂高との距離を縮める。

「避けないでよっ」

また一步。

「…いつもの俺様なアンタはどこ行つたのよっ？」

もう手が届くような近い距離で、夕夜は穂高をしっかりと見つめて言つた。

「夕夜…」

小刻みに震えている。

強気な言葉とは裏腹に、瞳からは今にも涙が零れ落ちそうだ。

それでも、大きく目を見開いたまま一生懸命、涙が零れないように気張っている。

こいつは昔からそうだ。

なんでかは知らないが、泣いたら負けだと思つてる。

「ねえ、穂高。あたし、あとちょっとで分かりそうなの」

「え…？」

「栄理が言つてたこと」

なんのことだ、と問う前に夕夜の言葉で思考を遮られる。

「だから、愛想尽かさないで。もう少し待ってて。…お願いだから

…。それにまだあたし、」

言っていないことがあるの…。

そう小さく呟いたつきり、夕夜はうつむいたまま動かなくなつてしまつた。

「ゆっ…」

「それは黙つてみてられないなあ」

「……………木原」

いきなりの第三者の介入に、穂高は一気に眉間にしわが寄る。

「あ、なんだ。穂高くんすっかり名前覚えてんじゃん」

「……………」

相変わらずのむかつく笑顔をむだにきらめかせながら、朔眞は穂高と夕夜の間割って入った。

纏うオーラは黒い。

ごく自然な手つきで、すいっと自分の後ろに夕夜を隠してしまった。

間髪入れずに、それは自分がするはずの行動なのに、と思った。  
でも言えない。

「今の君が夕夜ちゃんに『何か言う』資格があるのかな」

朔眞は、ものの見事に穂高の心のなかの声を代弁した。

こいつ…気づいてる？

俺が夕夜に　告白しようとしてること。

「穂高…何で？何で黙ったままなの」

「そりゃあねえ。凶星だからね」

「あんたに聞いてない」

「夕夜ちゃん、まだ穂高くんのことかばうんだ？…穂高くん、君に  
対してひどいことしたのに」

びく、と穂高は反応する。

「ひどいことなんか…！」

「してないって言うの？」

一瞬ちら、と穂高へ視線を向ける。

「夕夜ちゃん。君が夜中に僕の家に来てる理由も聞かずに一方的に  
怒ったのは、穂高くんだよな？…その後理由を言おうとした君の言  
葉を聞こうとしなかったのも穂高くんだ」

「それはっ、…そうだけど」

「まだあるよ。それからまあ軽く一週間は、穂高くんは君の存在を  
無視してた。…やっぱりこれも一方的に」



「……………」

なまじあれが本当にショックだっただけに、夕夜は何も言えない。そしてそれは穂高も同じだった。

忌々しいが、朔眞の言っていることは全部事実で、反論のしようがない。さっき彼が言ったように、穂高はこのことで『自分には夕夜にきもちを伝える資格があるんだろうか』。…そう迷っていた。そして朔眞はそれをはっきり指摘した。

…凶星以外の、何者でもなかった。

「君って形成悪くなるとすぐだんまりだね。」

情けない」

「ツツ！！ふざけないで！！！」

「ちょ、夕夜ちゃん」

夕夜はめちやくちゃにすぐ目の前の朔眞の背中を力任せにぶっ叩く。

「穂高のことバカにすんな！！！！」

自分のことはいくらバカにされたっていい。でも、穂高のことをバカにするのだけは許せない。

「いた、まっ…、痛いって」

「るっさい！！」

「ああもう…」

振り向いて、朔眞は振り下ろされた夕夜の拳をパシッと掴む。

「離せ！！~~~~ツツ」

「…落ち着きなって」

「やだ！！穂高っ、穂高！！」

痛切な夕夜の叫びに、穂高は激しく揺さぶられた。

「なんでもいいから反応して！！あたしは…またこの大事な時に、あんたと離れたくない！！」

「……………」

大事なとき？

ちよつと待て…なんだ、この感じ。

ここでまた穂高は妙な焦燥感を感じた。

まるでフラッシュバックのようにその一瞬、脳裏に映ったのは。  
…あの朝見た、妙に綺麗に片付けられた夕夜の部屋だった。  
頭痛がする。

っ、なんでこんな時に、こんな映像が。

嫌なものを追い払うようにぶんぶん、と頭を振って、穂高は夕夜を自分の腕のなかに取り戻そうと足を一步ふみ出した。

だが、ほぼ同時。今の今まで暴れていた夕夜が、朔眞に両手を掴まれたままびくりとも動かなくなった。こちらから見るかぎり、朔眞が夕夜に何かを言っているようだが……。 「？夕夜？」  
みるみる内に、夕夜は顔面蒼白になっていく。  
明らかに様子がおかしい。

「夕夜」

すぐに近づいて、後ろから朔眞の肩を力任せにガシッと掴んだ。

「おまえ、こいつに何言った？」

「痛いなあ。穂高くん、無駄に力強いよ」

「何言ったんだよ!？」

「っ、僕は別に大したことは言っていないって」

「嘘っ…」

「穂高!?!」

…穂高の言葉を遮ったのは、他の誰でもない夕夜自身だった。

おおよそ予想もしていなかった人物に止められ、穂高は少なからず当惑した。

「…なんで」

「っ、もう、いいから…」

そう言う彼女の表情は、どう見たって「もういい」と思っている表情じゃない。でも頑としてそれを譲らない。

穂高に理解できることは、夕夜が朔眞に何か言われたことで相当のダメージを受けたことと、少なくともそのことで穂高に助けは求めているということだ。

ものすごい大きさの虚無感が、穂高を襲った。

「…行こ？夕夜ちゃん」

「…………ッ」

嫌そうな顔はしたものの抵抗らしい抵抗は見せず、夕夜はされるがままに腕を引かれて時計塔の下に位置する広場から、エレベーターのある方へと連れていかれた。

残された穂高には、何もできなかった。

追っていった夕夜の名前を呼んでも、また拒絶されるような気がしたからだ。

エレベーターで七階まで昇ってそこから降りて、二人は自分たちの家に向かって共同通路を歩く。

「……………卑怯者」

今までずっと黙ったままだった夕夜が、ふいにぽつりと呟いた。

「卑怯者、卑怯者、卑怯者…！！」

狂ったように何度も繰り返す。

「人聞き悪いこと言わないで欲しいなあ」

「実際悪いじゃない！！…何であんたがあのこと知ってるのよ？」

「……………何のこと？」

「とぼけないでよッ」

荒い呼吸を繰り返しながら、夕夜はさっきの出来事を思い出す。

あの時。

暴れる夕夜の耳元で、朔眞はこうささやいた。

『…ロサンゼルス』

『……………！！！！』

『君、今週末に引っ越すんだってね。…穂高くんには言っていないみたいだけど』

『……………ッ』

『バラしてもいいの？』

『！やめてっ。…分かった、から…』

夕夜はもう、黙るしかなかった。

これだけは、どうしても自分の口から言わなければ。…そう、思うから。

「あんた…最初からあの広場にいたでしょう」

自分の家の扉の前についても、両者ともに中に入ろうとはしなかった。

「あれ、気づいてたんだ。別に隠れてたわけじゃないよ？」

「…見てれば分かるわよ、そんなの。ただ」

「どうしてあのタイミングで邪魔したのか、って？」

「……………」

沈黙。肯定だと朔眞は受け取る。

「そりゃあ、君が気づきはじめてるからだよ」

自分のきもちを、自覚しはじめてるから。

「え？…最後の方、声小さくて聞こえなかったんだけど」

すると朔眞はにこりと笑う。

「それでいーよ。夕夜ちゃんさ、この前『朔眞があたしに構うのは、なつかないのが珍しいだけだ』って言ったでしょ？」

「…それが？」

「あれ、…やっぱり違うんだよね」

「え…」

朔眞が至近距離まで近づいた。

…夕夜の勘が働く。

朔眞のこの雰囲気、ヤバイ気がする。

今まで危ない目にあったとき、こいつはいつもこういう空気を出していた。

後ろ手でガチャ、と扉を開ける。…いつでも逃げ込めるように。

「ねえ夕夜ちゃん。君、穂高くんに『あと少しで分かりそうだ』って言ったよね」

「…だから？」

決定打を与えてあげる。

「え……」

決定打？

考えている間に朔眞はもともと近かった距離を、さらに詰めた。

「……！寄らないで」

「夕夜ちゃん、忘れたの？」

僕が君のこと彼女にしたいって言うてること」

次の瞬間、朔眞は夕夜の腕をぐいっと引っ張ると、自然な動作で夕夜の唇に自分の唇を重ねた。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

それくらい朔眞の動きは自然だった。

ほんの数秒、ホントに重ね合わせるだけのものだったけれど。

キスしたことに変わりはない。

「夕夜ちゃん？」

反応がない。

一発くらい、殴られる覚悟でしたのだが。

その彼女は、正面で突っ立ったまま目を見開いている。

不思議に思い、顔を覗き込んだと同時に。

夕夜の瞳から、大粒の涙がぼろっと零れおちた。

「……………！！」

殴られるよりも大きな衝撃が朔眞を襲う。

「ゆ、夕夜ちゃん！？」

自分でキスしたくせに、あたふたとみつともないあわてようだ。

そのまま声もなく泣いたと思えば、彼女は無言のまま自分の家の

なかに入って行った。

「夕夜ちゃん！」

一度閉められた扉を開け、後を追おうとした瞬間。中からものす

ごいスピードでフライパンが飛んできた。

「……………！！！！！！」

危機一髪扉を閉めて回避する。

扉のすぐ向こうで、フライパンがぶち当たってすごい音を立てて床に落ちた。

ビリビリとした衝撃が、扉を通じてこちらまではっきりと伝わった。

心臓が早鐘を打っている。

「あー…死ぬかと思った。今日はもう、会ってくれないだろうな」

扉からそっと離れる。

そこへちようど、下から上がってきた穂高が現われた。

「あ、穂高くん」

「……………」

「そんな怖い顔しないでよ。あのさ」

穂高は嫌々返事をする。

ホント言うなら、今ここで一発殴りたいくらいだ。

…結局は最終的に夕夜を連れていかれたことへの嫉妬なのだけだ。

「夕夜ちゃん、きっと明日は様子がおかしいと思うんだけど」

「は？」

「僕がここまでやったんだから、どうにかなってくんなくや困るよ？」

そうして無邪気に笑う。

「最後の悪あがきだよ。…攻撃力が最も強い、ね」

まるで何かひとつ物事を達成したときのような、そんな笑顔だった。

感じてしまった嫌な予感。

今度は何だ…？

当たらないで欲しい、夕夜お墨付きの百発百中の自分の勘。

夕夜に何があった？

…夕夜に、何をした？

「じゃ。」

…あとは君次第、だからね」

穂高の返事を待たずに、朔眞は意味深な言葉を残して自分の家へと消えた。

まぶしいほどに赤かった夕陽はもう落ちて、あたりは何も見えないくらいに真っ暗だった。

## 第十八話 最後の夜、最初の朝

夕夜は、泣いていた。

もうほとんど物が無い、ベッドだけの淋しい景觀の部屋で、毛布にくるまってぐしゃぐしゃになるまで泣いていた。

上も下も右も左も、分らない。

ただ自分の声だけが、やけに大きく耳に響いていた。

「…夕夜―？」

いつもより帰るのが遅くなって、絵里は申し訳なく思いながら玄関の扉を開けた。もう十時も近くなっていたものだから、てっきり勝手にご飯を食べて、いつものようにテレビを見ているんだろうと思った。

だから扉を開けて驚いた。

電気ひとつ点いていなくて、家のなかは真っ暗闇だったのだ。

「え…何で！？夕夜、いるんでしょ？」

まさか、何かの事件事故に巻き込まれたんじゃないかと一気に血の気が引く。

「夕夜！？」

バタバタとあわただしくリビング、トイレ、バスルーム…と玄関に近い順から探した。

すると。

…どこからか、すすり泣きのような音が聞こえた。「！！」

ビクーツと体が硬直する。

泣き声は止む気配がない。

「…ゆ、夕夜ちゃん？」 音源は、おそらく夕夜の部屋だ。恐る恐る近づいて、部屋のドアを開ける。



一見して何もないように見えた。

「……………」

目を凝らしてよく見ると。

「あ…」

いた。しっかりと。

毛布にくるまっていて顔は見えないが、確かにいる。…とんでもなく暗い雰囲気醸し出して。

とても話しかけられる空気ではなく、絵里は困惑した。

この落ち込み方は、『ソファーで体育座り』の遙かに上をいつている。

とにかくもう大泣きで、手がつけられない。

絵里がいることに気づいているだろうに、なんの反応も示さないのだ。きつとそんな気力もないのだろう。

そんな夕夜が泣きながら繰り返す言葉の中で、聞き取れる単語がいくつかあった。泣きながら幾度も、「穂高」と名前を呼び。…それから「ごめん」と繰り返していたのだ。

そんな娘が痛々しくて見てられなくて。

絵里は静かにドアを閉めて部屋を後にした。

「そろそろ、かしらね…。これが、最後の夜かしら」

絵里は呟いて、天井を振り仰いだ。

翌朝。いつもの時間になっても起きてこない夕夜を心配して、絵

里は部屋にノックして入った。

夕夜は制服に着替えかけた状態の中途半端な格好で、ベッドに上半身をもたれて倒れていた。

「ちよつとあんた大丈夫!？」

駆け寄って抱き起こしてみると、体が熱い。

「夕夜…熱あるじゃない!」

「んー…」

「んー…、じゃなくて！今日は学校休みなさい」

「や、やだ！…今日は、行かなきゃ！」

穂高に会って、昨日のことを謝らなければ、と夕夜は思っている。ぐったりしているくせにそこだけは目一杯反論する夕夜に、絵里は呆れ半分で言う。

「バカ言わないでちょうだい。…休みなさい」

「…っ」

こういう時は母強し。

夕夜は勝てずに学校を休むことになったのだった。

それから30分後。

絵里も仕事に行ってしまい、夕夜は家にひとりきりになった。

風邪の時一人というのは、本当に寂しい。

枕元には絵里が用意していったお粥、薬、水、それから果物と、一通りの食べ物揃っていた。

夕夜はベッドに入った状態で、首だけを巡らしてそれらを眺める。ものすごくありがたいのに、食欲が湧かない。

それに、昨日泣きすぎたせいで目が痛い。…鏡で自分の顔を見るのが怖いな、と思った。

寝るに寝付けなくて、部屋の天井をぼーっと眺める。ふと頭に浮かんだのは、栄理の言葉だった。

「あ…課題」

…『立場を置き換えて考える』だっけ？

夕夜は朦朧とした頭で精一杯逆の立場として回想をする。

…もし、穂高があたしの知らないところで、あたしがあまり好きじゃない女の子の家に、黙って毎晩行ってたとしたら…？

…そんなの考えるまでもない。

「やだ…」

絶対、やだ。

何がイヤだって、家に行ってること自体よりも…自分に黙って行

かれることがいやなんだ。

だって、穂高のことは 何でも知ってたい。

「そっか…」

栄理が言ってた『朔眞の家に行ってたこと自体に怒ってるのではない。じゃあ何に対して怒ってるのか？』…この質問の答えはこれだったんだ。

そのうえ、親しげに呼び捨てなんかしていれば、腹がたって仕方ないだろう。

「そういうこと…」

分かってしまえば簡単なことだった。

それなのに。

手のひらで顔を覆う。

「せつかく分かっててももう、意味なくなっちゃったよ」

じわりと涙が浮かんだ。

「あんな奴にキスされたなんて知られたら…穂高に嫌われるに決まってる」

ようやく頭にかかったたもやみたいなものが晴れたのに、こんなんじゃ意味がない、と夕夜は声もなく泣く。

涙が幾筋も頬を伝って布団へ落ちた。

しゃくりあげがまた止まらなくなる。

「うくツ…、どうすればいいの？」

引っ越しまであと6日。それさえもまだ言えてないのに。

昨日の夕方、仲直りできると思った。でも、結局また心が離れただけ。

…それに朔眞。

何を考えているのか夕夜には全く分からない。なにしろ朔眞はちぐはぐで、言ってることとやってることが違うのだ。

あいつは本当に、何をしたいんだろう。…あれ？前にこれと同じこと、朔眞に聞かなかったっけ…？

聞いた。いや、聞かない…？

だめだ、今は頭が回らない。

意識朦朧としながら、夕夜は止まることを知らない涙を、乱暴にパジャマの袖でぐいっと拭った。

首だけで見渡せば、相変わらず部屋は静かで、夕夜は再びもの淋しさを感じる。インテリアがないせいもあるのだろう。でもそれ以上はこの感情に拍車をかけているのは、やっぱり昨日、朔真にキスされたことが常に意識の片隅にあるせいだ。

泣き疲れ、頭も体もずいぶんな疲労感を感じる。

あたし最近、穂高のことしか考えてないなあ…。

そんなことをふと思いながら、夕夜はそのまま眠りに落ちていった。

「なんでだよおおおお」

朝会うと開口一番、智也はそう叫んだ。

「また俺の一日がはじまらないじゃないかあああああッ」  
まだ続く。

「高良さんと仲直りしたんじゃないかったのかよー」  
「うるさい」

冷ややかに切り捨てて、穂高はそんなこと俺だって同じだよ、とイラついた。

どこか八つ当たり気味に言っ、机に思い切り突っ伏し完全にふて寝態勢に入る。

「なーんーでーだーよー」

なあ穂高あ、と智也は激しく両手で穂高の体を揺さ振った。

穂高はそれを完全無視。

…昨日のことは、鮮明に記憶に残ってる。

自分を拒否して朔真の後を静かに着いていった夕夜。小さく震えていた背中が眼裏に思い浮かぶ。

…何か事情があったはずだ。

事実、夕夜は朔眞に何か言われてそれから大人しくなったではないか。

「…何か問題があるのか？」

いつものケンカにしては様子が違うのを察して智也は控えめにそう問いかけた。

「ある。大有り」

間髪入れずに穂高は断言する。

「ありえないくらい邪魔な奴がいる。正直消えてほしい」

「…へえ？」

穂高のそういう発言は珍しかったから、智也は好奇心丸出しで聞きたいことを聞いてみる。

「男？」

「あたりまえだアホ」

女だったらどんなにいいか。

「ふーん…そっか」

そんな会話をしているときだった。

「穂高くん」

教室の外から名前を呼ばれ視線をやれば、そこにはどこか見覚えのある女が一人立っていた。

誰だったかな、と近寄りながら考えを巡らせる。

そば近くに

立ってみると、いつも夕夜と一緒にの女友達だった。

「ごめん。えーと…」

「高橋です。高橋栄理」

「そっ、高橋さん」

…この前は名前覚えてたくせにもう忘れてるの？と栄理は心中呆れた。

「…本当にどこまでも夕夜中心よね」

「え？」

「うつん、何でもないわ」

につこり笑ってやり過ごす。

「それより、夕夜は？」

「は？」

予想外な質問に穂高は間抜けな声を出す。

夕夜は？って…。

「教室にいるんじゃないの」

いないはずがない、と穂高は不思議そうに答えた。

けれど次に栄理の口から出た言葉は。

「いないわよ。てゆうか、来てないの」

夕夜の不在を知らせるものだった。

「え…」

「もう少してHR始まるのに来ないでしょ？…穂高くんなら知ってるかなって思ってたんだけど…その様子じゃそっちも知らないみたいね」

どうしたのかしら、と栄理は頬に手をあて考えこんでいる様子だ。どういうことだ？…まだ家にいるのだろうか？

穂高も考えられる理由をいくらか推察してみる。

「学校をサボるなんてあいつの性格からは考えられない。だとしたら、やっぱり家にいるのかもしれない」

「家に？」

栄理がおうむ返しに聞く。

「ああ…」

夕夜に、何かあつて。

だから家から動けない？

最終的にたどり着いたのはこんな結果だった。

「…高橋さん」

「ん？」

「俺、夕夜の家に行ってみるから。…いる気がする。教えてくれてどーも」

お礼の言葉を述べるなり、穂高は自分の席にある鞆を持って教室

から出ていった。

「…行動はやッ」

穂高の背中をただ見送ることしかできずに、残された栄理は感嘆の声をあげた。

「高良さんのことになると、あいつ人が変わるからなあ」

「はい？」

いきなり後ろから声をかけられて振りかえれば、それは穂高の友達だった。

「あら、大野くん。いたの？」

「…穂高も相当ひどいけど君も相当ひどいね」  
肩を落として大野智也は隣に並ぶ。

「ふっ、嘘よ嘘。ちゃんと気づいてた。…お互い、世話が焼ける友達持ったわよね」

「ほーんと、二人して鈍すぎ」

穂高が消えていった廊下の向こうを眺めながら、それぞれのこれまでの自分の働きを思い出しているのか疲れたような顔になる。

「…そろそろうまく収まって欲しいわね？」

「収まるよ、たぶん」

そう言う智也の表情は、やけに自信満々だった。

「…そうかもね」

H Rの始まりを告げる鐘が鳴って、穂高と夕夜がうまくいくことを祈りつつ、二人は自分の教室に戻っていった。

そのあと、お互いのクラスで穂高と夕夜の不在をごまかすのに苦労したのは、言うまでもない。

## 第十九話 告白

学校から家まで、歩いて15分。走って10分。その距離を、穂高はこれまでの最高記録を打ち出して7分で完走した。

エレベーターを待つのもどかしい。

やっとの思いで夕夜のいる704の扉の前にたどり着くと、急いで靴から合鍵を探す。

「あつた」

以前、『何かあつたときの為に』と絵里に渡されたものだ。

穂高はそれを取り出すと、鍵穴に差した。

ガチャン、と音がして玄関の扉は開いた。

夢を、見ていた。

（俺もうおまえに付き合ってらんない）

穂高？

（意地張ってばっかのおまえより、こいつのほうが素直で可愛いよ）  
なに、言ってるの？

（行こう）

問いかける夕夜を無視して、穂高は隣にいる女の子の肩を抱く。

それは、いつか見た穂高に調理実習のクッキーをあげに来ていた、女の子の中のひとりだった。

そんな、待ってよ。…あたしはどうなるの？

（木原朔眞と仲良くな）

穂高……！！

「置いてかないでよ、穂高      ……！！」

「…ここにいる」



えっ…？

「置いてってなんかない」

寢言だったはずの叫びに対して、返事があった。

置いていけないでと上に伸ばした手が、誰かにそっと握られている。

…すごくすごく、温かい手。

あたしはこの手を、知っている。

ゆっくりと瞼を開ける。

そこにいたのは、予想していたとおりの人物で。

「穂高…」

「…ん？」

いつになく優しく笑うから、夕夜は胸がきゅうつと締めつけられる。

「なにおまえ。泣いてたの」

言葉と共に、空いている方の手で目尻に溜まっていた涙を親指で優しく拭う。

「……………」

ドキドキして、心地よい緊張感とあまい空気が流れた。

けれどすぐに、昨日朔眞にされたことが脳裏をかすめて、夕夜は反射的に繋がれた手を振り払っていた。

「…夕夜？」

穂高は驚いた顔をしている。

「…ごめん」

でも。どうしてもそばに来られると唇が気になって仕方なくて、後ろ暗い。

…実は穂高に気づかれてるんじゃないだろうか？とか、いろんな思いが頭を巡る。

ベッドから上半身だけを起こして、夕夜は無意識に袖口でゴシゴシと唇を拭っていた。

「な、何でもないから」

「あのな。何でもなくはないだろ。…風邪引いてたんだな」

そう言つと穂高はゆっくり夕夜の頬に手を寄せて、優しく触れる。

「あつい」

「……ッ」

息が止まるかと思う。

そのまま撫でられるものだから、硬直して動けない。

「夕夜」

名前を呼ばただけで動悸がおきて、胸が締めつけられて、泣き  
たくなつた。

ああ、やっぱりあたしは…。

対穂高限定の…病に陥ってしまったんだな。

「っ」

ふいに、さっきの夢を思い出す。

あんなふう to 他の女の子と一緒に穂高は見たくない。こんなふう  
に優しいのはあたしにだけでいい。

そばにいて。

「うつ…」

止まっていた涙がまたあふれだした。

「ふえゝ」

最近涙腺が弱いと思う。

「は！？夕夜！？」

突然泣き出す夕夜に穂高は訳が分からなかった。

「どうしたんだよ？」

「苦しいゝ」

子どものように泣きじゃくりながら夕夜は言った。

「は？」

「苦しいんだよー」

「苦しい？熱のせいじゃないくて？」

「違うバカ…そんな簡単なもんじゃない。あ、あんたのせいなんだ  
からねッ」

夕夜は泣きながらもキツ、と強気に顔を上げた。

「あんたがっ…あんたがああ夜あたしに変なことするからッ！あの時からあたしおかしいの…」

ベッドから降りて穂高の目の前に座り込む。

「なんなの？…あんたの顔見ただけで脈拍そろわないんだからっ！い、息だつてうまくできないしッ。そ、それに、あんたのとなりにあたし以外の女の子がいるのがすごいや」

握りこぶしを作つてドン、と穂高の胸をたたく。

ボロボロと零れる涙が穂高の膝のうえに落ちて、ズボンにいくつも丸い染みを作つていった。

穂高は何も言わない。

ただ。

驚きに見開いているだけだった目を一瞬だけ和ませて、

「せ、責任とれっ」

そう言つた夕夜をやわらかく、それでいてつよく抱きしめた。

「え、何っ、ちょ…ッ」

事態を飲み込めない夕夜はひとりあたふたとする。

涙なんか今のきれいさっぱり引っこんだ。

そんな夕夜に穂高はゆっくりと顔をちかづけた。

至近距離すぎて、軽く上目遣いでないと夕夜に視線を合わせられない。

「ひえ！？」

間近で見る穂高の整った顔に、夕夜は胸の高鳴りを押さえられない。

「あ、あの、穂高？」

「なんだ…。俺もおまえも同じじゃん」

「へっ？」

なあ夕夜、と穂高は名前を呼ぶと、

「キスしてもいい？」

小さい声でそう言つて、「え」

夕夜が返事をする前に、その唇を自分の唇でふさいだ。

「ん…っ」

触れるだけのキス。それなのに、なんでかそれはすごくあまかった。

角度を変えて、何度も、何度も口づける。

「ふぁ…」

夕夜が苦しそうに声を上げて、やめることをしなかった。

「……っ」

とけてしまいそうだと夕夜は思う。

不思議。

…朔真相手だとあんなに気持ち悪くて、いやだったのに。

穂高だと全然いやじゃない。むしろ、その逆。

もつとしてほしいとさえ思う。

…完全に力が抜けてしまった夕夜を見て、穂高はやつと彼女を解放する。

「悪い。やりすぎた」

熱があることを忘れていた。

「…謝るくらいなら最初からしないですよ」

ぐつたりと穂高の胸に完全にもたれた状態で、夕夜は言い返す。

つつけんどんな物言いは、恥ずかしさから。

「はは。こんなことならもつと前に言えばよかった」

珍しく声を上げて笑って、穂高は明るく言った。

「何を？」

きょとんとしている夕夜の頬をつまんで引つ張る。

「なにすんのよいたいじゃない」

「…一度しか言わないからちゃんと聞けよ？」

「はい？」

まだとろんとした目の夕夜の耳に口を寄せると、穂高はとびつきり色気のある優しい声音で、たった一言。

「好きだ」

そう、  
眩  
いた。

## 第二十話 Sour-sweet time〈初キス相手?〉

聞き間違いだと思った。

ぽかーんと口を開けたまま、夕夜は穴があくほど穂高の顔を見つめていた。

「…アホづら」

「ひよつと、いひゃい」

再度頬をひっぱられ、ろれつが回らなくなる。

ほっぺは少し痛いけど、耳にはたしかにあまい感覚が残っていた。

「ねえ今…あたしのこと好きって言った?」

「一度しか言わないって言っただろ」

…それはつまり、やっぱり自分に好きだと言ったということだ。

「…穂高」

「なに」

「あたし…ッ」

「だから何? てか、また泣くの」

おかしそくに目を細めながら、穂高は夕夜を見つめた。

「な、泣きたくなるでしょそりゃあ」

「なんで?」

「な、なんでって」

その先を言わせる気?

悔しかつたから、言葉の続きはぐくんと飲み込んだ。

てゆーか、と夕夜は穂高を見やる。

「あたし、いいよって言うてないよね? それなのにあんな…」

思い返して夕夜は耳まで真っ赤になった。

こいつ、返事するまえに口ふさいだよね?

「あんなキスして、って言いたい」

「…そうだよ。もしあたしがすごく嫌がったらどうすんのよ」

「そんなの…」

穂高はくいつと夕夜の顎を持ち上げて。

「嫌がらない確信があったからな？」

勝ち誇った笑みで、色気のあるまなざしを穂高は夕夜に向けた。

「…っ、むかつく…」

ばくばくとうるさい心臓を頑張って無視して、真っ赤な顔で唇を噛みしめる。。恋愛超初心者の夕夜に、穂高のこの動作は、きわどいものがある。

「だっておまえ、『顔見ると不正脈で息がうまくできなくて、そのうえ自分以外の女がとなりにいるのはいやだ』って…完全な告白じゃん」

こ、告白？

すると穂高は呆けている夕夜の頬に、ちゅっとキスをした。

「あっ」

「俺のこと好きなんだろ？」

「…っ」

覗き込まれて夕夜は思う。

そうか…このきもちは、穂高のことが好きってことなんだ…。

言葉にされて、妙に納得した。

どつりで、穂高がかっこ良く見えちゃったりしたわけだ。

「うん…好き」

あたしも、穂高のことがすごく好き。

ごく近くにある穂高の顔を、自然と上目遣いで見つめた。

穂高の広い胸板に手について、幾度も「穂高」と名前を呼ぶ。

そのたびに穂高はしっかりと返事をしてくれた。

離れていた時間が長かったから余計に愛しく、胸が締めつけられる。

なんとなく胸がいっぱいで、言葉もつげなくなった。

沈黙のなかで、穂高はまた口づけようと、ゆっくりと顔を近づける。

夕夜も目を閉じて。

けれど次の瞬間。

『決定打を、与えてあげる』

そう言った朔眞の声がやけにはっきりと耳に蘇った。

そうだ自分は、朔眞に一度キスされている。

「だ、だめ……!!」

ついていた両手でそのまま穂高を押し返した。両手で口元をおおう。

あいつのあとに、穂高に触れてほしくない      !穂高までが汚

れてしまう気がする。

「夕夜？」

訝しんで夕夜の様子をうかがった。

拒まれたことはそれなりにショックだが、それよりも夕夜の様子が気にかかる。

せつかく泣き止んで笑顔が戻り始めていたのに、また涙目でうつむいていた。

押し返された手前、再び抱きしめることもできずに宙に浮いた手を、握りこぶしに変えて。

…そういえば最初家に来たときから、しきりに袖で唇をぬぐっていたことを思い出す。

夕夜の行動。

朔眞の言葉。

二つのヒントが繋がって、穂高は固く握られていたその手をひらいて、ガシッと夕夜の肩をつかんだ。

「おまえ…あいつにキスされた？」

「……………ッッ!!」

夕夜が息を呑むのが分かった。

「な、なんで？穂高なに言ってるの」

バカにするように笑って顔を上げた、…つもりだった。

「アホ。全然笑えてない」

「…っ、そんなこと」



ない、と言おうとした。けれど穂高にぐいっと引き寄せられて二の句を次げなくなる。

「夕夜」

「…はい」

「もう嘘つくな。…これ以上、俺に隠しごととして何になる？」

そう言う穂高もつらそうで、黒い瞳が揺れていた。

「頼むから…、ほんとのこと言ってくれ」

今にも泣きそうに顔が歪む。

そんな穂高を見るのは夕夜だって、つらい。

でも。

「だって、言っただうなるの？あたしだってなかったことにできるならそうしたいよお…っ」

また大粒の涙が零れ落ちた。

「さっ、朔眞にキスされたなんて、どうして穂高に言えるのっ？言ったら嫌われるかもしれないのに…ッ」

夕夜は大声で泣きじゃくった。

「あっ、あたしだって、最初のキスがあいつだなんてやだよ…ッ」

昨日の出来事を消してしまいたい。でもどうしたって、自分のフアーストキスはもう戻ってこない。

「あんたがよかった。穂高じゃなきゃ意味ないのに…！」

唇を噛みしめてばたばた涙を零す夕夜を見て。

「ふ…ッ」

なぜか穂高は笑った。

「…！なんて笑うの！？」

自分は真剣なのにひどい！と夕夜は眉を吊り上げる。

「あ、ごめん。そうだよな。…つか、俺だって本気であいつにムカついてるよ？」

「…ほんと？」

「ほんと。正直、今すぐ学校戻って授業受けてるあいつぶん殴りたいくらい」

「…じゃあなんで」

笑ったのよ。以前眉を吊り上げて夕夜は問うた。

「…本当に、殴りたいくらい悔しいしム力つくけどさ。俺、あいつより夕夜に思われてる自信あるし、第一ファーストキス…」

「え？」

「おまえのファーストキスの相手、俺だから」

たっぷり20秒。

「はあああああああ！？」

押し黙って夕夜は叫んだ。

「なっ、なっ、なっ、なんで？そんなわけなッ…だって記憶ないし、キスした覚えもない！どっ、どーせあんたの嘘ッ」

「じゃないから言っとくけど」

半眼で睨んでから、穂高は話し始めた。

「まあ、おまえは覚えてるわけないな。だって寝てたんだから」

「…はい？」

寝てた？

「前におまえがうちに泊まりに来たとき。…おまえ俺のベッドで寝てたよな」

「あ、ああうん…」

あの時は、穂高に例の、夕夜曰く『イタズラ』をされて、火照ったからだのままほとんどふて寝状態でベッドに潜り込んだのではなかったか。

「それがどうか…って、まさかその時に！？」

ピンときて目の前の穂高を指差した。

「夕夜にしては鋭い。…そうだけどだめだったか？」

…色気たっぷりに流し目で問われても。

「べ、べつに今さらそんな。…だめじゃ、ないけどオ…。…あれ、

でも待つて？じゃあ穂高つて…その時からあたしのこと好きだったの？」

夕夜の直球すぎる質問に穂高は面食らった。

「…さあね」

「なんでよ、教えてよ」

「…だって自分でも分からないから」

「えっ？」

それも驚きだ。

「分からないって…」

「追求していけば、多分、物心ついたときにはもう好きだったのかもしれないな？…俺にとつてのおまえは、それくらい、初めからずっとくべつな人間だったから…」

遠い昔を慈しむような眼差しで笑い、夕夜の手を握った。

「そ、そうなんだ…。あ、でも！」

でも、寝込み襲うのはひどくない？と、最後の方は、照れが入ってか声が尻すぼみになっていた。

だってそれだと、穂高の記憶には残るけど、自分の記憶には残らない。

「…べつに襲ったわけじゃないんだけど」

「お、同じことでしょ」

夜這い疑惑に異を唱える穂高だが、夕夜にとっちゃどっちだって一緒らしい。

そんな夕夜に穂高は呟く。

バカ夕夜。

「襲うつていうのはな、こーいうこと言うんだよ」

「へ…はうッ!？」

次の瞬間、夕夜は穂高に床に押し倒されていた。

「な、な、な、穂高!？」

「…なに？」

「なにじゃなくてえ。はっ、離しなさいよ」

「やだ」

狼狽して赤くなったり青くなったりしている夕夜を無視し、穂高は夕夜の鼻の頭にちゅっ、とわざと音を立ててキスをした。

「ふにゃ！？…穂高あ」

「なんだよふにやって」

「はは、と声を上げて笑う。」

「うつつうるさいっ。ねえ、離して…」

下から穂高を見上げる。「だから…いやだっって言ってるだろ？」

その無駄にフェロモン出すの、やめてほしい。

夕夜の願いも虚しく、穂高は押さえ付けていた片方の手はずすと、床に広がる夕夜の髪の毛を梳いた。

びくっ、と一瞬体が震える。

「…このまま時間が止まればいいのに」

「…え」

穂高の口から漏れでた本音を、夕夜は聞き逃さなかった。

穂高…？

「…夕夜」

「は、はいっ」

「…なんで敬語？」

「…とつさに」

「ふはっ。バカなおまえらしい」

「き、聞き捨てならないなもう！この期に及んでバカ呼ばわり？」

穂高の下でぶう、と頬を膨らませる。

さっきのあまい空気はどこへやら。

「余韻とかないの、もー…」

すると。

「へえ？じゃあ…続けていいんだ」

「へっ」

びっくり顔の夕夜の唇に、指を這わす。

親指で、それはもうゆっくりと。

「んっ…」

ピクン、と夕夜が体全体で反応した。  
それを見た穂高が間を置かずに、今度は唇で唇をふさぐ。

「あ…」

最初は触れるだけだった口づけが、どんどん深くなる。

「んうっ…」

角度を変えては口づけて。

気づけば夕夜は抵抗できなくなっていた。

抗えない。それに、抗う理由もない。

されるがままの夕夜に、穂高は好きなだけキスをする。そのうち、夕夜もそれに答えはじめた。

すぐ傍にはベッド。

腕の中にはとろんとした夕夜。しかも、パジャマ一枚。胸元が熱のあるあつさからか、大きめに開かれていた。

あ、やばい。

抑えられないかも。

「…ほだか？」

いきなり動きが止まった穂高を不思議に思い、首をかしげて夕夜は上目遣いに穂高を見やった。

その動作がまたそそる。

「…っ」

耐えろ、耐えるんだ俺。

かつてないほどの強靱な意志で穂高は夕夜を起こすと、「ね、寝ろ」とベッドに導いた。

…なんで？

夕夜はひたすらはてなマークだ。

なぜこのタイミングで就寝を言い渡されなければいけないのか。

「あたし、なんかした？」

ベッドの上から疑問をぶつける。

したよ、しまくりだ。おまえって実は悪女か？

そう言いたいところをぐつとこらえて穂高は口からでまかせを言った。

「床って痛いし、…風邪悪くなるといけない、から」

「あ、そう…。ふーん…」

どこか腑に落ちない顔で、それでも夕夜はおとなしく布団に潜り込んだ。

「でも、良かった」

「…何が？」

胸元まで引き上げたかけ布団をふわつとかぶる。

「あたしの初キスの相手、穂高で」

「ああ…」

「それに、朔眞のこと言っても嫌われなかった」

へへっ、と本当に嬉しそうに笑う。

…なんだこいつ、可愛いな。

「…あたりまえだろ。確かにショックではあるけど、それで嫌いになれるなら、俺おまえのことでこんなに苦労してないと思う」

「…苦労してたの？」

突っ込むところかよ、と穂高は呆れた。

「まあ、ありえないくらいには」

「ぶっ、どんくらいよ」

アバウトすぎ、と夕夜は吹き出した。

「いいから、寝ろ」

「やだ。寝ない」

寝ちやうなんてもつたいない、と夕夜は抗議する。

…強情だよな、ほんとに。

呆れながら穂高は思い出したように一周部屋をぐるりと見回すと、つと真剣な表情になって夕夜を見つめた。

「なあ夕夜…俺、まだおまえに聞いて欲しいことがある」

「なに？」

「それも言っ。おまえが聞きたいことにだって何にでも答えるし。」

でもそしたら、おまえも俺に教えるよ？」

心臓が早鐘を打ち始めた。

「何を？」

もしかして穂高は。

「俺が忘れてると思った？」

もう知ってるんじゃないだろうか？

「おまえが、兼ねてからずっと俺にひた隠しにしてた」

…あたしがここから。

「隠しごとを、だよ」

いなくなってしまう、ってことを。

第二十話 Sour-sweet time〈初キス相手?〉(後書き)

バカップルですね、はい(笑) Sour-sweetとは“甘酸っぱい”という意味です。あともし少しお付き合い下さいね(^ ^)(^ ^)



## 第二十一話 隠しことを告げるとき

穂高が曇りのないまっすぐな目で、夕夜を見つめていた。  
もう逃げられない、言わなければと夕夜は思う。

どうせごまかしていてごまかせてないも同然の隠しことなのだ。  
穂高だって、部屋に入った瞬間にこの部屋の変わりように気づいたはずだ。

でも…どうすれば？『あたし、ロサンゼルスに引越すんだー、あはは。もう簡単には会えないね』って明るく言えがいい？泣きながら『行きたくない』と駄々をこねればいい？

分かならず夕夜は口を開けない。

だって、どんな言い方をしたって、最後にはお互い悲しむのが目に見えているのだから。

「……………」

眉間にしわを寄せたまま黙り込む夕夜に穂高はため息をつくど、

「じゃあ、分かった。…俺から言いたいこと言うから、とりあえずこつちの話聞け」

そう言っ夕夜の注意を引いた。

そうして何を言うのかと思えば。

「…ごめん」

「えっ、何が？」

いきなり謝罪の言葉を口にした穂高に、何が『ごめん』なのか、夕夜は心底不思議に思っ尋ねた。

「俺、ずっと謝りたかった。あの時…おまえの話、最後まで聞いてやらなかったこと」

「あの時…？」

それは、朔眞が差し入れのことを『夜のお楽しみ』と言ったときのことだろうか。そういえば、ケンカの発端はそんなことだったよな。

「あんなの…気にしてないよ」

てゆうかもう、忘れかけてたし、と夕夜はベッドの中からあっけらかんとした笑顔を穂高に向けた。

ほんとは気にしまくりだったのだけれど、これは言わないでおうと密かに決める。

だって穂高ってば、こうでもしないといつまでも気にしてそう。

「…今なら、理由聞ける。話してよ？」

ていうか聞きたい、と興味津々な顔で穂高は夕夜ににじり寄った。

「…聞きたい？」

「ああ」

少しだけ意地悪なきもちになって、焦らしてみようかとも思う。

「…どうしようかな」

「言えッ」

穂高が夕夜のおでこに軽くデコピンをした。

「い、痛いじゃない」

「うるさい。早く言え」

あれ？いつの間にか、いつもの俺様な穂高に戻ってるじゃない、と夕夜は嬉しさ半分、悲しさ半分でひとりごちた。

「昨日のしおらしい穂高はどこに…」

「は？」

「いえ、なんでも」

またデコピンされるのはいやだから、素直に夕夜は朔眞の言葉の真意を説明した。

「…あたし、朔眞とは何もないよ？お母さんに頼まれてね、毎晩ご飯のおかず分けに行ってただけ。それをあいつが勝手に、“夜のお楽しみ”だなんて変な言い方したの。…安心した？」

熱のせいであんなとした目を穂高に向けて、夕夜はふわりと笑う。

「…そういうこと、な」

内心かなりほっとしながら、穂高はふうっと息をついた。

「ねえ、聞きたいこと何でも聞いていいって言ったよね」

目をきらきらさせながら、夕夜は上半身を起こす。

「…おまえほんとに熱あるの…。まあ、言っただけ？」

呆れ顔の穂高にもめげず、夕夜は今朝穂高と会ってから、ずっと疑問に思っていたことを聞いた。

「質問。…どうしてここにいるの？」

「…は？」

「だ、だって穂高あたしが風邪ひいて学校休んだなんて知らないはずじゃん。なのになんで」

穂高とも仲直りできず、絵里も仕事に行ってしまった。…ひとり寂しく寝ていた夕夜にとっては、風邪をひいたことを知るはずもない穂高が部屋にあらわれたことは、これ以上ない『不思議』だったはずだ。

そのことに思い立った穂高は、ここにくるまでのいきさつを話すことにした。

「…高橋さんが、朝俺の教室まで来たんだ」

「栄理が？」

夕夜と栄理のクラスは1組。穂高と智也のクラスは6組。あの離れた距離を、わざわざ移動してくれたということだろうか？

「うん、おまえ学校来てないって教えてくれた。…消去法で、サボりなんてすると思えないしじゃあまだ家か？って」

それで来てみたら、こうして赤い顔でぶっ倒れてたわけで。

「…なるほど。なんか、手間かけさせたみたいで…」

「別に？まあ、それはいいとして。…夕夜の番だけど？」

この話はコレで終わり、とばかりに次はおまえだ早く言え、と、目線で促されてしまった。

聞かれているのはもちろん、あの隠しごとのことだろう。

「……………っ。分かつ、てるけど」

そうは言いながらやっぱり歯切れの悪い夕夜に、穂高は渋面をつくる。

「…まさか、ここまで来てまだ言わないなんてこと、ないよな？」

「！！あ、あたしだって…さらつと言えるもんなら言いたいよ！なのになんな責めるような言い方しないで！！」

とっさに叫び返してしまった。

ああ…これじゃ逆ギレじゃん。

はつとするが、一度溢れだした感情はそう簡単には止まらない。

ましてや、この1ヶ月はゆうに黙っていた隠しごとで、しかもそれが今後の自分たちに大きく関わってくることもなんだと思えば、不安になるのも無理はない。感情論になってしまいが、今の夕夜に冷静に事情を話すことなど到底無理な話だった。

「責めてるつもりなんかない。…話してほしい、それだけだ」

そんな夕夜の頬に手をあて、めったに感情に揺れることのない漆黒の瞳で、夕夜の少しだけ茶色がかっている瞳を覗きこむ。

その瞳には自分だけしか映っていないくて。

…真摯なきもちが全身から伝わってくる。

…うん、ちゃんと言おう。

「今まで黙ってて、ゴメン。…あたし」

穂高はゴク、と息を呑む。

「引っ越すんだ。…ロサンゼルスに」

足を着いている地面がいきなり抜け落ちて、奈落の底につき落とされたような感覚だった。

…ロサンゼルス…？

声になっていない呟きを、唇の動きだけで繰り返す。焼けるように喉が渴いている気がして、喋ろうとしてもひりついて声が出ない。「嘘だろ、そんな…」

かすれた声で、それだけをぼつり、と。  
ズキンと夕夜の胸が痛んだ。

「…一番初めに、時計塔の下で。穂高があたしに『何か隠してんだろ。俺にも言えないこと？』って言ったの覚えてる？」

その問いに穂高はコクツ、と頷きだけでYESと答えを返した。

「…あの時ね、まだ引っ越し本決まりじゃなかったの。それに、た

と言ったとして、自体がいい方向に向かうとは思えなかった」  
だから、と夕夜は続ける。

「言わなかったんじゃないの。“言えなかった”んだ…ッ」  
膝の上のかけ布団に顔を伏せ、うずめた。

「分かって…ッ！分かってよッ…！“穂高だから”言えなかったんじゃない…！！」

穂高は黙って聞いている。

ただその目からは…絶望の色が伺えた。

「だからって…なんで今なんだよ？」

「…え？」

「なんで、今…！！！」

…もう、知ってしまったのに。

ふたりでいることの喜び。きもちが通じ合うことの愛しさ。

そっぴいのを、たとえこの短時間であっても経験してしまったから。

だからもう、ひとりだった頃には戻れない。

「やっと…やっと、ここまで来たのに！！ロサンゼルスなんて海の向こうじゃねえか！…どうしてもっと早く言ってくれなかったんだよ…」

穂高の頬を、ほんの一筋だけ、すうっと涙が伝った。

「『俺と離れることはありえない』って言ってただろうが…」

あれは嘘だったのか？

最後にそう呟いて、穂高もまたベッドの淵に肘をついてくずれた。

16年間一緒にいて、穂高が泣いたのを目にしたのは初めてだった。

あたしは…なんてバカだったんだろう。

いつだったか、栄理に『そうやってさあ…タイミング逃したら大変なことになるんだからね』と言われたことがあった。

どうしてあの時忠告を聞かなかったのか。

…穂高をここまで苦しめることになるのなら、朔眞の存在やケン

力なんて関係なく、もつと早くに言っ飛ばせばよかった。

ただひたすらに、後悔の念が夕夜を襲った。

「穂高…」

ベッドの淵に顔を伏せたまま動こうとしない穂高のさらさらした髪の毛に、おそろおそろ手を置く。

穂高の肩がビク、と震えた。

「ごめん。本当にごめん。…お父さんがさ、一緒に暮らさないかって」

「…圭吾さんが？」

反応があつた。

「うん。お父さん、もう3年は向こうに単身赴任してるでしょ？…この前ね、お母さんが訪ねて行ったときに、言われたんだって」

家族がこんなにも長い間離れているのはやっぱり耐えられない。…ここを離れて日本に戻るのには、いつか分からないんだ。悩んだけど…こっちで一緒に暮らさないか？

夕夜はしばしのあいだ黙然して、だいぶ前に絵里に告げられた言葉を思い出していた。

「いやだ、って言うわけじゃない…。たった17歳のあたしに何ができたっていうの？…それに」

夕夜は穂高の頭に置いていた手を思い切り振りかぶると、グーにして勢いよく急転直下。…真下に振り下ろした。

ゴッソッ。

「！？いつ…」

「穂高のバカ！！」

グーで殴られたうえにバカとは何事か。

穂高はもたげていた頭を上げた。

「何す」

「あんた、なんも分かってない！どうして嘘だったのなんていうの？…あたしが、どんなきもちで…ッ！！」

怒りに見開いた目から、またボロボロと涙が零れていた。夕夜は

そのことに、気づいているのかいないのか。かまわず、大口を開けてまくしたてる。

「あたしだって悲しいに決まってるじゃない！！自分だけが被害者みたいな顔するな！！」

はあ…、と荒い息を繰り返す。

「でっ、できることなら行きたくない。…でも、お父さんもたいせつなの…ッ」

手のひらで顔をおおって、夕夜は悔しそうに唇を噛みしめた。

そんな夕夜を見て、どうしてまだ自分が嘆けるだろうか？

穂高は、さつき自分が言った言葉を心底反省していた。

本当に夕夜が言うとおり、自分はバカだ。

あの時、『穂高と離れることはありえない』と言い切った夕夜の眼差しや態度は、それこそ真剣そのものだったのに。引越しのことを分かっているにもなお、離れたくない一心で願いを込めるように言っただろうあの言葉。

1ヶ月も前に母親に引越しのことを知らされて、一番ショックで長い間悩んでいたのは、きっと夕夜だっただろう。それなのにこっちは自分のことばかりで。

「…ごめん夕夜。今回だけは、ほんとバカって認める。おまえだって、苦しいんだもん…」

こんどは穂高が夕夜の頭をポンポン、とたたいた。謝罪と、ねぎらいのきもちを込めて。

「ほっ、ほんとだよ…」

「まあ、ロスに行っただって一生会えないわけじゃないし？」

ゆっくりと立ち上がると、ギシッと音を鳴らしてベッドの上にある。引きつけをおこしている夕夜を、壊れ物を扱うみたくやさしく抱きしめた。

「悪かった。…引越しは、いつ？」

耳元で、優しく穂高の声がする。いつもの穂高の声のトーンに夕夜はほっとして、いつの間にか引きつけは止まっていた。

「…こ、今週末」

「今週末っ？」

最初は驚いているだけだった顔が、みるみるうちに不機嫌な顔になっていく。

あ、あれ。何かマズった？

「おーまーえーなー」

「え、えっ？」

「いくらなんでもギリギリまで黙りすぎだ！確かにさっきは俺が悪かったけどなあ！今のは完全におまえが悪いっ」

ポコ、と頭を小突かれる。

「あと4日でどーしろと…」

「う、ごめん…」

なんだか今日はお互いに謝ってばかりだ。

「とりあえず、おまえは早く風邪治せ。そしたら…」

穂高が言いにくそうに視線をずらす。耳が赤くなっている。

なんだろう？

「そしたら、思い出たくさんつくろう。…俺とおまえで。高橋さんなんかも入れて」

「う、うん…！うん…！！」

目を潤ませて夕夜は大きく大きく頷いた。

穂高もそんな夕夜に笑顔で答える。

「約束」

「約束だよ！」

ふたりは笑顔でゆびきを交わした。

ロサンゼルスなんて認めたくなかった。考えたくなかった。でも今は、少しだけ前向き。それは全部全部、穂高のおかげで。

…引っ越しまであと4日。

今だけ、今だけは。引っ越しのことは忘れて、生涯忘れな  
い最高の思い出をつくろう。

時刻は昼前で、窓からは明るく眩しい、太陽の光がさし込



んでいた。

## 第二十二話 クラスメイトVer・朔眞

午後3時。

すぐ傍らで、すーすーと規則的な寝息をたてて夕夜は眠っていた。

（朝に比べれば楽そうだな…）

寝汗を少しだけかいていいて前髪が額に張りついていたらから、優しく起こさない程度によけてやる。

夕夜とあの約束をした後、やっぱり寝たくない在意地を張る彼女に、絵里お手製のお粥を食べさせ、薬を飲ませた。そうしたら眠気が来たようで、わりと静かに眠りについた。意識を完全に手放す前に、夕夜が残した言葉を思い出す。

『どこにも行かないでね、あたしが起きたときここにいて』

…やっぱり病人というものは寂しがるものなのだろうか？

『どこにも行かないから、寝ろ』

そう返すと安心したように微笑んで、眠った。

窓から差し込む日射しが暖かくてなんだか穂高までうつらうつらしてくる。

どうせ今日はもう学校にも行かないのだからと、30分だけ寝ることにする。

部屋の隅に寄ると壁に寄りかかって座り、寝る態勢をとった。不思議なもので座ったとたん眠気が襲ってきて、穂高もまたそう時間がかからない内に、規則的な寝息をたて始めた。

部屋はゆるやかな空気で満たされていた。

（つまんないなあ。…早く帰りたい）

木原朔眞は頬杖をつきながら大仰にため息をついた。今はもう帰

りのHRの時間で、担任が何か言っていたが朔眞は全部右から左、綺麗に聞き流していた。

斜め後ろの席をちらっと盗み見る。本来ならばいるはずの、高良夕夜の姿がなかった。

昨日自分がキスした少女。相当シヨックだったようだから、少し心配だった。けどそこは、大丈夫だろうと思う。だって彼が結城穂高がいるから。

朔眞は今朝、来た道を逆走する穂高とすれ違っていた。向こうは全く気がついていなかったけれど、あれは確かに穂高その人だった。学校に着いてみると夕夜がいない。そしてマンションへの道をひた走る穂高。

つまり、そういうことなのだろう。あの二人はもう、うまくいく確信を持ちながら朔眞はほんの一瞬、目を閉じた。（まあ…頑張ったよね、僕）

ポケットから生徒手帳を取り出して、挟んであった写真を取り出す。

そこに写っていたのは、一言で言うとお黒髪美人だった。目鼻立ちがきりつとしていて、でも柔和な笑顔で。髪がうっすらウェーブがかっていて長さは背中ぐらいまであるだろうか。30代後半の女のひとなのだけれど、その顔は      どこか、今朝すれ違った『彼』と似ていた。

（もう、やれることはやったよ。…一応は目標達成、かな？

麗子さん）

写真に心のなかで語りかける。

そう、課せられた使命を果たすために、夕夜に手を出してまで頑張った。

まさかあんなにボロ泣きされるとは思わなかったけれど…。

正直、あの反応は想定外だった。普段の彼女から想像すると、間髪入れずにビンタが来ると思っていたから、泣かれるとどうすれば良いのか全く見当もつかなくて。まあ、そのあとに人を殺しかねな

い勢いでフライパンが飛んできたから、やっぱりそこが夕夜が夕夜である由縁なのだろうけど。

くすつ、と笑いがもれる。

…僕には無理かな、あんな女の子。

「あつ、何笑ってるのー？朔眞くん」

「…ううん、なんでも？」  
名前も覚えていないクラスの女子だった。

知らぬ内にHRは終わっていたようで、皆が席を立てて帰り仕度をしている。

「ふーん、まあいいけどお。ね、今日こそは遊んでくれる？」

可愛らしく小首をかしげてそう尋ねる目の前の少女に、朔眞は笑顔を向けると  
夕夜いわく、胡散臭い笑顔で  
明るく。

「ごめんね、今日は無理」

全く悪びれない態度でそう答えた。…もちろん彼女はそれで納得するはずもなく。

「嘘つきいッ！昨日は遊んでくれるって言ったくせに」

「…ちよつと事情が変わっちゃってさ」

朔眞は以前笑顔のまま続ける。

「何よ事情つて。また高良さん絡みい？…『今日は』じゃなくて『今日も』遊べないくせに」

「あーまあ……」

痛いところくね、と苦笑した。

「ふんつ、そんなならどおして最初に『彼女募集中』って言ったのよ。…私、本気にしたんだよお」

「ごめんね、あれも夕夜ちゃ……高良さんの気が引ければ、良かったから」

ちよつと、口からでまかせ言ってみただけだったんだ。

そう言つて、朔眞は手に持っていた写真に目を落とした。

「バカみたい。…高良さんには、ずっと前から相手がいるのに」

黒髪の、綺麗な顔した幼なじみ。

彼女は唇を噛んで悔しそうに、スカートのひだをぎゅっと握り締めながら言った。

その表情は拗ねているようにも見える。

「それがそうじゃないんだよねえ。僕にとって大事なのは、高良さんを自分の彼女にすることじゃないんだー」

けれど朔眞は笑う。

大事なのはそこじゃなくて、全く違うことなのだ。

「意味分かんないよお。じゃあ何が大事なの？どーせ教えてくれないんだろーけどさあ……」

むくれる彼女だったが、だからと言って自分が教えるかといったら、やっぱりNoなのだ。

朔眞の役目は、いつまでもまごまごしている夕夜と穂高をくつつけることだった。それは、自分にとって何者にも代えがたい『彼女』のための仕事で。

朔眞は、持っていた写真を眺める。

「……このことを知っているのは、自分と、この役目を与えてくれた彼女だけでいいと思うから。誰にももちろん夕夜と穂高の二人にも。ことの真相を言うつもりはなかった。

この目の前のクラスメイトなんて、論外だ。

「あははー。その通り。言う気なんてこれっぽっちも？」

親指と人差し指でほんのちよつとすき間を作って見せて、底抜けに明るく笑い飛ばす。そんな彼を、彼女はじっと見つめた。

「……朔眞くんって、いつも笑ってるけど肝心なところで人に心許してない。……いつも一線引いてる感じっ」

のけ者にされてるみたいな感覚に、頬をぶくつと膨らまして彼女は言った。

朔眞の方はといえば。

正直、驚いていた。ただのクラスメイトにそこを突かれると思っていなかったからだ。

なるほど、ただ自分の外見だけに寄せられて色恋にハマっている

子だと思っていたけれど、案外洞察力はあるのかもしれない。

「ふーん、そうかもね？でもこれが僕だからさ。…それが嫌なら、君僕に近寄るのやめたら？」

…彼は笑顔のまま言っているはずなのに、彼女はなぜかぞっとした。

ハッとして、一泊遅れて言い返す。

「…やめれるなら朔眞くんが30代のおばさんの写真見てデレデレしてるの見たときにやめてるよっ」

彼女は一息で言い切った。

「……………」

朔眞は啞然。

「君すごいこと言うね…」

「君じゃなくて春田るみッ。朔眞くんホントは私の名前なんて覚えてないんでしょ？」

腰に手をあてて、仁王立ちでるみは問いつめた。

デレデレか…。

（そんなふうに見えるんだ）

新しい発見だ。

「あははゝごめん。…今覚えたから」

彼女の名前は、今日のインパクトが強く残るだろうからきつと覚えられる。

…それに、牽制のつもりで言ったさっきの言葉。

ひるむかと思いきや、るみはとんでもなくまっとうな理由で朔眞に言い返してきた。

この子面白いなあ、と思う。

こっちに来て初めて、夕夜と穂高以外に興味を持った人間だった。ほんとに覚えたあ？」

大きくて丸い目をくりくりさせながら、るみは朔眞を覗き込む。

「うん。春田さん」

「…やだっ。下の名前がいいー」

「…るみちゃん？」

「そおっ」

彼女は満足気ににこつと笑った。

「可愛い。なんか、こんな子もいいかもしれないー。」

ふとそんなことを思った自分にちよつとびっくりしながら、朔眞は席を立つ。

「じゃ、るみちゃん？僕帰るからね。バイバーイ」

手をひらひら振って帰ろうとしたのだけれど。

「あつ、待って」

「ん？なーに？」

制服の袖をくつと引つ張られ、るみに引き止められた。

「…ひとつ、聞いてもいいーい？」

「ん？どうぞ」

「…あの写真の女のひと、だあれ？」

「…ああ、あれ…」

見られていたのか。本当に、洞察力とか観察力は鋭いのかもしれない。

「すっごい黒髪美人だよねえ？…もしかして、朔眞くんのお母さん？」

その言葉に、朔眞は目を見開いた。

「…お母さん…」

お母さん。

るみには、朔眞が一瞬ピタツと止まったように見えた。

「あれえ、違った？」

朔眞は瞬時にいつもの笑顔に戻る。

「……………違うかな。よく考えてみなよー。色素が、全然違うでしょ。僕は凄く薄いし、写真のひとは真っ黒。漆黒ってくらいねー。…この人は」

すると、朔眞は今まで見たことのない、寂しそうな笑顔になって。

「僕、命の恩人なんだ」

静かな声で、そう告げた。

朔眞が帰った後の教室で、るみは一人彼のことを思ふけつていた。  
…すつごくいい顔して写真眺めてたから、親族だと思ったのになあ。

そんなことを思いながら顎に手をやる。

…自分が「お母さん？」と聞いたとき、彼は「違う」と断言したけれど。

でもね朔眞くん？…お母さん？って聞いたとき、「そうだったら良かったのに」って顔、してたよ。

もう見えなくなった背中を眼裏に浮かべ。…るみはなぜか、自分までが寂しいような、悲しいようなきもちになっていた。

「ああー遅くなっちゃった」

絵里は会社から家への帰り道を、かなり急いでいた。信号は守って安全運転。でも、できるだけ早く。

「夕夜大丈夫かしら」

熱が上がって苦しんだりしてなきやいーけど。

車内にかけているラジオから、8時の時報が流れる。

途中、果物と軽食を買うためにスーパーに寄った。すぐに再び車を発進させる。

マンションまでは、あと5分くらいで着くだろう。今朝の夕夜の様子を思い出して、ハンドルの握りしめる。

夕夜がいる家へとより一層急ぐため、絵里はいつもよりアクセルを少しだけ深く踏んだ。



## 第二十三話 報告

5分後、マンションに着いた絵里は夕夜の部屋へ向かった。昨日同様、また電気が点いていなくてそろそろとドアを開ける。部屋が薄暗かったから、電気を点けた。

「何がどーしてこーなったのかしら」

ところが、明るくなった部屋にいたのは夕夜ひとり…ではなく、朝にはいなかったはずの、穂高を含めた二人だった。しかもなぜだか部屋の隅に寄って、毛布一枚に二人でくるまって寝ている。

…意味が分からない。穂高の存在にも驚きだが、なぜ床で？

けれど同時に、二人が一緒にいるという事実、ほっとする。

穂高くん来たの、一週間ぶりくらいかしら？

「ん…」

ごそつと動いたのち、穂高の方がぱちつと目を開けた。

「…絵里さん…？なんで」

まだはつきり意識が覚醒していないのか、不思議そうに目をこすりながら穂高は口を開いた。

「おはよ、穂高くん。…夜だから仕事終わって帰ってきたのよ」

「あ、おはようございます…って、え？夜？」

穂高が慌てて立ち上がりかける。が、肩に重みを感じて振り返った。見ると、夕夜が自分に寄りかかって寝ているではないか。…これでは、立てない。

穂高はなるべく動かさないように、また元の位置に座った。

「…あの。すみません、いま何時なんですか？」

少し昼寝するつもりがいつの間にか窓から見える外は真っ暗で、穂高は焦って聞いた。これじゃ昼寝どころか、普通の睡眠だ。

「今？今はね、8時過ぎ」

「は、8時？じゃあ俺5時間は寝てたのか…」

驚きの事実の数秒黙る。その後ほっとして穂高はすぐ傍にある

夕夜の寝顔を見つめた。

そういえば、なんでこいつがここに？確かにベッドに寝ていたはずなのに。

黙考する穂高と、すーすーと寝息をたてて熟睡する夕夜。二人を数秒じいつと見つめて、絵里はおもむろに口を開いた。

「…ねえあんたたち、なんかあったでしょ。夕夜の寝顔がなんだか、すごく幸せそう」

それに穂高くんも、すっきりした顔してるわ。

真顔でそう言った。

「…幸せそう、ですか」

その言葉を聞いて、穂高はなんだか凄く嬉しくなった。むず痒いような、じんわりとした感覚。…母親の絵里がそう言うのだ。幸せなんだろうと、思う。いまこの時、幸せであればいいと、思う。

「…あの、絵里さん。話したいことがあるんです」

だから、意を決して穂高は目線を夕夜から絵里へ移した。

夕夜のことを本当にたいせつに思い、今まで育ててきた絵里。自分のことだって、本当の子どものように面倒を見てくれた。

そんな彼女だからこそ、話しておかなければならないと思うのだ。

「あら。なーに？」

絵里は夕夜そっくりの動作で首をかしげた。

「あの、俺」

「夕夜と付き合います、って？」

につこり笑いながら、絵里はかがんで座ったままの穂高と視線を合わせて言った。

「…超能力とか」

「ないわね」

「…母親のカンってやつですか…」

気が抜けた、という感じに穂高は無意識に正していた背中を、すぐ後ろの壁にとんと預けた。そんな穂高に絵里は笑いながら、うー

ん…と考える。

「なんていうかね、まず、昨日の夕夜の様子がおかしかったのよ。もう、涙で顔がぐしゃぐしゃで。無反応だしベッドから出ないし」

穂高はズキンと胸が痛む。…きっとそれは、木原朔眞にキスされてしまったからだ。

「…はい。分かってます」

けれどそこまでシヨックを受けていたとは思わず、穂高はその様子を思い浮かべて眉根を寄せる。

「じゃあ話が早いわね。…穂高くん。そんな状態でも夕夜、あなたの名前繰り返し呟いてたのよ？何度も何度もね」

「名前…」

「そうよ？あと“ごめん”だったわね。だから確実に穂高くん絡みだって直感したわ」

あんなたちその何日も前から一緒にいなかったじゃない？

と絵里は、あたかも事件の謎解きをするように。

「だから、そろそろなんかあるな—と思って。今日、帰ってきてみたら久しぶりに穂高くんがいるじゃない。私、嬉しくなっちゃって」

「絵里さん…」

「夕夜の寝顔も今朝と打って変わって幸せそうだし？このタイミングで話しておきたいことがあるだなんて、大体予想つくじゃない」

絵里は、ねっ？と首を傾げた。

穂高は絶句だ。

なんでもお見通しなのだろうか、この人には。

「その顔。私のカン、ばっちり当たったわね。…やっぱり昨日が最後の夜になった」

含み笑いをして、絵里は自分も夕夜を挟んだ左隣に座り込んだ。それから、まだ起きない夕夜の少し茶色があった髪を、愛しそうになでる。

「…最後の夜って？」

皆目見当がつかず不思議そうに尋ねる穂高に、絵里は夕夜をなで

る手を止めて。

「聞きたい？」

にやりと笑った。

…何だろうか。

答えに窮していると。

「聞きたいわよね」

「……………」

なぜだろう。

絵里のこの笑顔には、逆らえない迫力がある。

「き、聞きたい、です」

「でしょー。なんの最後の夜かっていうとね」

いたずらっ子みたいな目をして絵里はもったいつけた。

「いうと？」

「夕夜独身最後の夜ー！」

けらけらと笑いながら、絵里は手をパチパチと叩いた。

「…酔ってるんですか」

「やあね。大真面目よ」

「はあ…」

「もう。そんな変なもの見る目で見ないでよ穂高くん。…いい？」

突然真面目な声音になって絵里は言う。

「付き合うなら、絶対この子を悲しませるようなことしないで。それが、私達の間の約束よ。守れないなら」

簡単に付き合うなんて言わないでと、射るような眼差しで毅然と告げられた。

一瞬、吞まれそうになる。けれど穂高はぐっと体に力を込めて、きっぱりと言った。

「…それは約束できません」

「え？」

「…だってこいつ、相当な泣き虫なんですよ。知ってました？」  
穂高がふつと笑って相好を崩した。

「そ、そうだったかしら」

それじゃあ難しいかもしれないわね、と絵里は真面目に考える。

「そうですよ。…だからこそ、せめて。俺は…一緒にいたいと思えるような男になります。ずっと一緒に。どんなことがあっても、俺はもう」

目を閉じて、夕夜と離れていた昨日までの日々を思い出す。

あんな思いはもう沢山だから。

「夕夜を離さないと、約束します」

「ええ……」

絵里は、それはそれは嬉しそうに伏し目がちに頷いた。

「ん…」

絵里が部屋から出ていった2・3分後、ようやく夕夜が目覚めました。

「やっと起きた？…寝すぎ」

「んー？」

まだぼーっとしている頭と、半開きの目で夕夜は穂高の顔を見つめた。しばらくそうしていたのだが、いきなり何かに気づいたようにハッとして。

「あ、あたし…!!」

「ん？」

「その、ごめん！勝手に隣に座ってしかも爆睡っ」

あたふたと、離れようとしながら夕夜は謝った。離れかけたその手を、穂高はぱしっと掴む。

「いいよ」

「…ッ！」

一瞬顔を赤くして、夕夜はおとなしくまた隣に座り込んだ。どこか落ち着かなそうに、そわそわとしている。

「…で？なんでベッドから出たんだよ」

「その…。トイレに起きたら、本当に穂高がついててくれたから。嬉しくなって思わず隣に」

言いにくそうに目線を逸らして夕夜は言った。

…穂高は、一瞬言葉が出てこない。

「…やけに素直。熱が高いままだったり」

夕夜の額に訝しそうに手を当てて、体温を確かめる。そこまで熱くない。

「はあ？あんただんだけ失礼なのよ。穂高に移って治ったんじゃないのっ」

夕夜がいつもの調子で頬をぷくつとふくらました。

「げ…マジで？」

「げってなによ、穂高があたしに移るようなことしたんじゃない」

「…キスしたこと言ってるの？」

「うん」

「……………」

穂高は耳を赤くしてうつむいた。まさにその通り、言い返す言葉などない。

そんな穂高を見て、夕夜はおかしくなってしまう。

ほとんど冗談で言ったのに、なにこいつ。

「か、可愛いー」

夕夜は肩を震わせて笑いを我慢しようとしたが、しきれずに。

「…何笑ってるの」

ばつが悪そうに言う穂高を、後ろからふわっと抱きしめた。

「んーん、べつに？」

なんだか無性に愛しさがこみあげて、こうしたくなったのだ。

「…穂高…」

「…なに？」

「楽しいこと…たくさんしようね。いっぱい遊ぼうね」

「……………」

後ろから肩にこてんと頭をのせて、夕夜がとつとつと言った。ずっと鼻をすすするような音が聞こえて、部屋は静まりかえる。穂高には、夕夜が泣いているのかどうか分からなかった。

「ああ」

「それしか、答えることはできなかった。」

その日。穂高は、久しぶりに夕夜と絵里と三人でご飯を食べた。

買い物をしていなくて材料がなかったから家にある有り合わせものだったのだけれど、穂高にとっては、ここ数日の中ではダントツにおいしいご飯だった。

ただやっぱり夕夜のことと、どこかに黒いもやもやとしたものが頭をもたげていたのだけれど。

穂高が家に帰ったあと、絵里は夕夜をすぐ寝かせた。夕夜と穂高、二人を思い浮かべれば、自然と口の端があがる。

「やっとな。作戦大成功じゃない。」

「こうなればあとは、いつどうやってネタばらしをするかよね……」夕夜が聞けば「何それ、どーゆー意味!？」と食い付いてきそうな言葉を呟いて、絵里は自分の寝室の扉を開ける。

「ま、いつか。どうとでもなるでしょ」

扉の隙間から見えた彼女の部屋は、段ボールに荷物がまとめられた夕夜の部屋とは違って、いつもとんなら変わらなかった。

「おやすみ、夕夜」

その意味を知るのは、彼女ただ一人。扉は、パタンと閉められた。

明くる日、夕夜と穂高は久しぶりに二人で登校した。

学校に着くと、校門に入っすぐ、誰かが奇声をあげながらこちら側へくるのが目に入る。

「あ~~~~ッッ!!」

穂高の友人智也が、二人を見つけたとたん盛大に叫び声をあげて走り寄ってきたのだ。

「えっ!?!」

「…でた…」

夕夜はびつくり、穂高はげんなりとしたようすで彼を見る。智也は息も荒いまま穂高に近寄ると、いきなりぎゅっと抱きついた。

「はあ!?! 離れるよ気持ち悪い」

力いっぱい引き剥がそうとして両手で肩を押す。が、智也は離れない。夕夜は少し遠巻きに、啞然としながらその様子を見守っていた。しばらくそうした後、もがいている穂高に智也は小さな声で。

「良かったなあ…」

「え?」

穂高の動きはピタッと止まる。

「良かったなあ穂高…。仲直りできたんだな」

「あ…」

それで、これが。

合点がいつて頷く。そういえばこいつにも色々世話になったな、ととりあえずの謝罪。

「色々悪かった」

智也がやつと離れて、自分のことのように嬉しそうに笑った。

「べつに。…うまく行ったんだろ?それに、ごめんじゃなくてありがとうじゃん。…やつと俺の朝が始まるよっ」

晴れやかに言つと彼は、穂高の肩をポンと叩いて玄関へと入っていった。

最後にボソッと、「やっぱりおまえらは二人でいるのが自然だよ」と、言葉を残して。



「…あのひとなんだって？」

話が終わったのを見計らって、夕夜がひょっこりと顔を出した。

「いや…なんでもないよ」

そう言う穂高を覗き込むと、くつくつと笑っている。次にぽつりと、『さんきゅ』と漏らした。

「？」

夕夜は意味が分からずきよんとしている。

「気にしないでいーよ」

笑って言いながら、彼女の手をつないだ。

「穂高？」

「行きますか」

「え？え？」

「思い出づくり。するんだろ？」

にやつと笑いながら彼は言う。夕夜はあつ、と声を上げて、その後思い切りうん！と頷いた。

「よし、まずは学校でだな」

「そーだね」

教室に行ったら、まず栄理にこのことを報告しよう。そしてその後、めいっばい遊ぶんだ。

足取りも軽く、夕夜は校舎へと足を踏み出した。

隣には、穂高もいる。

自然と笑顔になる。

「何にやけてんの」

「何でもなあーい」

さあ。

やりたいことは、たくさんある。とびつきり楽しくて、一生忘れられないような、そんな。

最高の思い出を、つくろう

！

## 第二十三話 報告（後書き）

ここまでくるのに時間かかりすぎですねスイマセン（――；）

次回から夕夜は思い出づくりに励みます！なるべく

更新早くするのでよろしくお願いします…

## 第二十四話 思い出をつくらう！

「おめでとつ、夕夜」

「は？あたしまだなんも言っていないけど」

そんなわけで、教室。穂高と廊下で別れて意気揚々とこの2年1組に入ってきた夕夜に、朝のあいさつもそこそこに開口一番、栄理は気持ち悪いくらいの微笑みで言った。

自分の席からは決して立とうとはせず、夕夜が来るのを待ち構えている。

…せつかくこのウキウキ気分のまま報告しようとしていたのに、向こうがあんなにヤル気満々だと逆に言いたくなくなるのはなぜだろう。

…や、やだなあそこ行くの。

そんな夕夜の心中など知りもせず　いや、あるいは知ったうえでのことなのかもしれないが　栄理はすっかり夕夜が座る分の席までも確保して、今か今かと待っていた。

「何も獲って食おうってわけじゃないんだから」

説得力、ありません。

なお逃げ腰になりながら、それでも夕夜はじりじりとそばへ寄る。それしか道はなさそうだった。

「ほら座って」

「……………」

向かい合わせになるイスを引いて、仕方なく座る。

「昨日、熱出してたんだって？もう大丈夫なの？」

「えっ」

ところがつきり穂高とのことを根掘り葉掘り聞かれると思っていた夕夜は、目をまん丸くしてすっとんきょうな声を上げた。

栄理が言ってるのって、昨日のこと？

「熱のことは穂高くんからメールが来て知ったんだけど、…なにそ

の反応。確かにさっきのおめでとうはあんたたち二人に対するものだけだね。でも夕夜の体調だって大事なんだから。当たり前じゃない」

「栄理…」

「私もなかなか友達思いでしょう？」

元々大人っぽい彼女が、ふんわりと柔らかく笑う。

くっ…。あたしはいくらめまいがするような超絶美少女の笑顔だつて、騙されないから！！

「そんな簡単に納得するか！聞きたいことあんならズバツと来い。ほっ…。穂高、とのことだったのは充分わかってんだから」

「いつにも増して潔いわね」

「おーよ。さあ聞いて」

「…まあ穂高くんの名前を異常にどもつてたのはこの際見逃すとして。じゃ、お構い無く」

すると栄理は、すうっと一呼吸置く。

「どこまでしたの？」

「…はい？」

「だから、どこまでしたの？」

「…えーと…。したの、とは」

言葉の意味を理解できない夕夜は、しかめっ面と不思議そうな顔を足して÷2したような表情をする。

「やーねえ。野暮なコト聞かないでよつ。みなまで言わせる気？」

いしし、と彼女らしからぬ奇妙な笑い声を歯の隙間から漏らし、

栄理はその上夕夜の頭をベシツとはたく。

…なんなのだ、この扱いようは。

恨めしそうに目の前の美人顔の友を見上げる。

すると栄理は、答えない夕夜にとどめの一撃を繰り出した。

「聞かなくても分かっているのよ、あんたたちがくつついたことなんて。今朝ここに来るまでに、校門から手えつないできたでしょ？私が聞きたいのはそんな甘っちょろいことじゃないのよ！どこまでや

「っちゃったのかってことなの」

「なっ…」

「やっちゃったのかって、栄理!!」

夕夜は一気にボツと体温が上がるのを感じた。

「何でそーゆーこと平気で聞く!!! つーかどこまでもやってませんか!？」

反論しながら、夕夜は制服の袖でぐいつと口元を拭くような動作をした。残念ながら、無意識だった。

「…なるほど、キスはしたのね」

「っ!! しっ…」

ところが、栄理のこの発言にいち早く反応したのが、クラスの女子だった。

「い、いやぁーッ! 誰か嘘だと言って!!」

「結城くんはもう高良さんのものなんて信じたくない!」

「ああ… あたし達の氷のアイドル結城穂高くん…」

受け入れがたい事実を目の前に、彼女達は次々と床にくずおれていった。

「わーお…。死屍累々」

「栄理ッ!」

「そうか、分かった。」

栄理は今の今まで、このクラスの面々に聞かせるためにあたしにあんな質問してきたんだ! 穂高はもう、フリーじゃないってことを知らしめるために。

ピンとは来た。来たけれど、栄理のこの頭の回転の速さにはいつも驚かされる。夕夜は口をポカンと開けたまま、呆然とつつ立っていた。

「これで昼までには全校女子に広まるわ。良かったじゃない夕夜、敵が減って」

「…そうなのだ。」

穂高は、モテる。ただ本人が無愛想で無口で、騒がれるのを嫌っ

ているから表立って騒ぎ立てるような人がいないだけであって、密かに彼のことを好きな人は多いはずだ。

以前見かけた調理実習三人組だって、その内の一塊なのだろう。そしてその無愛想ぶりと、それでも綺麗な顔からついたあだ名が『氷のアイドル結城穂高』。…正直言って、笑える。初めて耳にしたとき馬鹿にしたら、「…俺だって好きでこんな名前つけられたんじゃない」とひどく真面目に反論されて。…その顔がまた面白かったものだから、夕夜は堪え切れずに爆笑したのだった。

そんなわけで朝からこつち、穂高と夕夜ふたりの動向に注目する者は多かったのだろう。いつもは『幼なじみ』として登校するふたりが、今朝は手をつないできたのだから。

真相を確かめるべく、クラス的女子達は始終夕夜と栄理の会話に耳を傾けていたのだ。だからお付き合い確定の内容になった途端、あんな反応が返ってきた。

とどのつまり…あたしと穂高がキスしたことも全校に広まるってわけ。

「…消えてなくなりたい」

どうしてこうも自分の恋愛事情を人様に知らなくてはならないのだろう。しかも、少数ではなく多数。

「べつにいいじゃない。穂高くんが悪い虫も寄らなくなるって」

「……………」

ほんとかよ、とりあえず先程まで屍と化していたクラスメイトを見てみたが、どうだろう。すでに立ち直ってなにやら密談ひそかをしている。かと思えば、いきなり全員晴れやかな、それでいて奸あざむな空気を孕んだ笑顔でこちらに歩み寄ってくる。

あまりの不気味さにピキ、と体が硬直する。ふと横目で見ると、さすがの栄理も動けないようだった。

「高良さん、おめでとう。私達あなたを応援する」

…は？て、いきなりそんなウラ有り有りの笑顔で言われても。

「今まで男ふたりを手玉にとる魔性の女なんて思ってたてごめんなさ

い。これからは…」

おーい。あたしってそんな悪女だったんかい。

「これからは私達心を入れ替えて、朔眞くん一筋になるわ！」

ってそっち！？入れ替える方向性まちがってますから！！

「朔眞くんは、任せてね。高良さんは穂高くんだけを見てればいいのよ。心配しないで」

ああ、ああ…。そういうことね。つまり『そっちはくれてやるからこっちにや手え出すな』って言いたいわけ。

「ハイハイ。どーぞ好きなように。大体…」

あんな野郎こっちから願ひ下げ。と、最後は栄理にしか聞こえないような小声で。

満足したのか、彼女たちはまた元の位置へと戻っていった。

「はあゝすごいわねあの人たちの執念。でもその肝心の木原朔眞が今日は来てないんじゃない？」

「えっ？」

言われて彼の席へ目をやった。始業の鐘が鳴るまであと3分。

話し込んで全く気づいていなかったが、そこは空席のままだった。

朝のHRで、珍しく普通な担任から、夕夜が今週末転校することが皆に連絡された。

驚くひと、悲しんでくれたひと、引越し先のことを心配してくれたひと。…密かにほくそ笑んでいた一部（穂高&朔眞ファンの）女子。…まあこれは置いていて。

嬉しかった。

自分がここを離れることに対して、皆が反応し、言葉をかけてくれたことが。

「お別れ会かなにか開こうか」

クラス委員がそう言うてくれたけど、夕夜は断った。

「ありがとう。でも、週末まで先約いっぱいだし…それに」  
何もしてくれなくなつて、皆がこうして反応してくれたことが  
あたしがこのクラスにいたっていう、確かな証になるから  
だからもう、充分。  
彼女は笑つてそう言い切つたのだつた。

「先約つて？」

昼休み、弁当を食べながら栄理は疑問を提示した。次の瞬間、夕  
夜は待つてましたとばかりに身を乗り出す。

「聞いたね！？聞いちゃったわね栄理！？」

私の、バカ…。

「…聞いちゃったわよ…」

「なにその残念そうな顔？栄理、今日の放課後、ヒマっ？ヒマよね  
っ。ヒマに決まつてるわよねっ」

「ま、まあ…ね？」

何とも言えない夕夜の迫力に気押されて、栄理はしどろもどろに  
返事した。

夕夜ときたら手なんか組んで、目をきらきらさせている。

「あー楽しみだなあ〜」

にまにまして弾んだ声。…栄理には、何のことを言っているの  
か皆目見当もつかなかった。

「…ヒマだったら、なに？」

「もちろん、お・も・い・で・づ・く・りーでしょ」

「ええ？」

栄理は首をかしげた。

放課後、いつもなら早々に穂高とふたりで引き上げる夕夜  
が、珍しく教室にとどまっている。

「夕夜何する気なの…？」



「いいからいいから。ほら来た」

「連れてきてやったぞ」

「さんきゅー穂高ッ」

連れてきてやったぞ。その言葉とともに穂高と現れたのは

…茶髪の、明るい笑顔の。

「これ。大野」

「俺、もの扱い!？」

そう、自称穂高の親友こと、大野智也だった。

「来てくれてどうも。えっと…」

「あ、智也でいいよ」

「智也くん？」

「…夕夜。大野でいい。そうだよな、大野…？」

な、なんか背後から物凄くうすら寒いオーラが…。

智也はいち早く状況の変化を察知した。…後ろを振り向くに振り向けない!

あわてて、先程夕夜に言った言葉を訂正する。

「た、高良さん。穂高ああ言ってるし名字でいいよ!」

「はあ?なんでよ穂高。あたしの勝手でしょ。智也くんだって、べつにあたしのこと下の名前で呼んでも」

「いいから!お願いだから名字呼びでお願いします!」

俺には、穂高を怒らせてまで彼女を名前呼びできる勇気はないっ  
!!!!

あまりにも必死に、両手をぶんぶん振って全身で拒否するものだから、夕夜はそれ以上何も言えなくなる。

…なんか知らないけど、嫌がつてんなら無理して下の名前使ってもらう必要ないわよね?

「そこまで言うなら、名字でこれからよろしく…」

「よ、よろしく…」

智也は、あからさまにホッとした顔をした。

…意味分かんない。

「で、一段落ついたみたいだから聞きたいんだけど」

「あ、栄理」

「なにかしらこのメンバー？」

栄理は輪になって話している全員の顔を、ぐるっと一周一瞥してから腕を組んで、さらに首をひねった。

「高橋さん無粋な質問じゃない？遊びに行くんだよもちろん」

智也が栄理の右肩を親しげにポンとたたく。

「」

それを一瞬横目で見た後、栄理はすかさずさと右肩を左手ではらう。智也はそれをしかと見た。

「ガン…」

シヨックを受けて固まる智也をさておいて。

ようやく合点がいったと、栄理は手のひらをグーでポンと打った。

「分かったわ。それで夕夜お昼にああ言ったのね？そーゆーことなら、私も遠慮なく楽しんじゃおうかしら」

乗り気になって、夕夜とふたりで笑い合う。

「そうしてそうして！あたし、引越しまで今日を含めてあと3日しかないじゃん？だからどーしても最後に皆と遊んどきたかったのよっ」

にかつと笑って夕夜は眼前にピースを突き出した。

「いい考えじゃない」

「でっしょー。べつにあたしと穂高と栄理の三人でもいいかなとは思ったんだけど、やっぱりバランス悪いじゃない」

「まあ…それはそうね」

「だから穂高に、今朝の友達連れてきてって頼んどいたの」

「…ええー。ちょ、俺完全に数合わせ？体面保つための道具っすか？

「ダチじゃない」

「ガン！…黙って聞いていれれば言いたい放題。どうして自分の周りには強気な性格の人だらけなんだろうか。」

智也はガツクリとうなだれた。

「おまえいつまでそこにいる気？」

「えー!!」

顔を上げれば、三人はもう玄関に向かって歩いている。女子ふたりなどすっかり先頭で盛り上がっていた。

…こんなのばっか畜生！

それでも智也は好きで穂高といえるのだから、仕方ない。走って、三人に追い付いた。

夕陽でオレンジ色に染まった校舎の廊下に、4つの影が伸びていた。

## 第二十四話 思い出をつくろう！（後書き）

誰か作者を殴ってください。更新を早めるといっておきながら、この有様…。遅れた理由は色々と（――；）すいません、高校総体がかぶったんです（＜＞）それでも待つて下さった皆様、本当にありがとうございますm（――）m…というか、いらつしやるんでしょうか。私の小説なんか、誰の目にも触れていないんじゃないかとネガティブになってみたり…。それでも、書きます！ひとりでも読んでくれる人がいるのなら！「読んでるよ」という方、評価感想批評、なんでもいいので足跡をお願いします。必ず感謝のきもちを込めてお返事させていただきます！！

## 第二十五話 思い出ダブルデート？

さて。四人が向かった先は、なんてことない、いつも遊んでいる普通のゲームセンターだった。

主役は夕夜、ということで行きたい場所は彼女の一存に任せられたのだが、夕夜は迷わずここを選んでいたのだ。

「夕夜、本当にここでもいいのか？」

「穂高しつこい！いいって言ってんでしょつ。ほら遊ぶ」

「しつこい男は嫌われるぞ穂高ッ」

「…おまえは黙ってる」

「もー！あんた口悪いのよ」

「夕夜に言われちゃおしまいだな？」

「どういう意味よっ！」

「そのままの意味だろ」

「むーかーっくー！！」

と、まあ。いつものぎゃあぎゃあが始まったところで。

「ハイハイ。その辺にしといてよ、夕夜も穂高くんも。時間もったいないじゃない。イチヤイチヤなら家で好きなだけしてね？」

と、栄理が絶妙のタイミングで割って入ったのだった。

「イチヤイチヤしてないっ」

夕夜の反抗の声は、ゲームセンター特有の喧騒に溶けて消えた。

「で？高良さんは何したいの？」

「はあ…大野くん。何したいってか、普通に遊びたいだけ。それじゃだめ？」

「いいんじゃない」

智也に対して投げかけた質問に、横から穂高が答えた。

「つまり夕夜は、いつもどおりの日常的な時間を思い出に残したいのよね？」

「栄理、さすが分かってる！」

それを聞いた智也が、合点がいったと大げさに首肯した。

「あ、そういうことなら俺遠慮なくバンバン遊んじゃうよ?」

「……だから夕夜がさつきからそうしてって言ってるじゃない。あな  
た馬鹿?」

栄理はごく冷たい視線を智也に送る。絶対零度ではなかるうかと、  
疑うほどであった。

「高橋さん。分かり切ったこと言っちゃ可哀想なんじゃない」

「……穂高くん、それもそうね?じゃあ、夕夜遊ぼ」

この話はもうコレで終わり、とばかりに栄理は夕夜の手を引く。  
「ちょ、大野くんいいの?」

夕夜はあわてて出入口で墨のようになった智也を指差した。……穂  
高と栄理、ふたりの他の追随を許さない『口撃』によって、彼は灰  
と化している。つん、とつittedただけでぼろぼろと崩れ落ちそうな  
ありさまだ。さすがに可哀想に思えてくるのだが。

「ああ、大丈夫よ彼なら」

と、栄理が言葉を切ったところで、穂高が智也のそばへ寄った。

「……穂高?」

「大野、遊ぶぞ」

一声かけた瞬間、智也は生氣を取り戻したように目をきらきらと  
輝かせて、元気良く「おう!」と返事をしたのである。

「ほらね」

「……………」

夕夜は、智也と穂高の上下関係を一瞬で理解した。

最初に遊んだのはエア―ホッケーだった。

「くらえ!消える魔球夕夜スペシャルーっ」

ガコンッ。

「消えてないけど」

「消えてんのよっ！今日はあたしが法律よっ」

夕夜・穂高VS栄理・智也。4人はオーソドックスに、2対2で戦っていた。…余談だが、このペアを組む際、栄理は物凄くいやそ  
おおおゝな表情をしていた。

「どーして私があなたと…」

「まあまあそう言わずに」

と、智也がごり押しで強行。ちなみに勝敗は、とりわけ何でもできる穂高と、運動神経ばつぐんの夕夜がいるチームが、当たり前のように大差で勝った。

「大野。おまえもう少し粘れよ？」

「しよっ…正気か穂高！？俺には無理だ！あんな…あんな、人殺せるような破壊力のあるパツクなんて防げねーよ！」

そう言つて腕に顔を埋めて泣き伏した真似をしながら、智也は、離れた場所で栄理と談笑する夕夜をビシツと指差した。

「人殺せるわけないだろ」

「うそじゃねえ！穂高、おまえだって見たじゃねーか高良さんの『必殺ファイヤーアツク』！！必ず死ぬと書いて必殺だぞ！？俺はまだ死にたくない！」

大げさだが、智也がこういう反応をするのも無理はないと思う。だって確かに、さっきのファイヤーアツクは凄かった。何ていったって、パツクのゴール穴付近のプラスチックが、当たったとき  
砕け散ったのだから。

「あんなのに手え当たったら俺完全に骨折だからね？」

「死ぬんじゃなかったの？」

「そっちかよ！」

「いや、どーでもいいけど」

「ひでえ…」

「あたしやりたいのあるんだ」  
テンションが高いまま、一通り体を使うゲームを終えたころ、おもむろに夕夜が呟いた。

ん？と笑顔で聞き返す栄理。

タフなやつ…とひとりごちる穂高。

今度はなんだ…！？と思わず体を震わす智也。

反応は三者三様だったが、夕夜は構わず続けた。

だって今日はあたしが主役。

「UFOキャッチャー」

『UFOキャッチャー？』

三人がハモった。

「そう。はい、レッツゴー！」

間もなく夕夜は、あるUFOキャッチャーの前で立ち止まった。さつきから、これをやりたいと思っていたのだ。

栄理と智也もそれぞれやりたい景品のUFOキャッチャーを見つけたらしく、思い思いの場所で楽しんでいる。穂高は 先程から見たらない。

そのほうが都合がいい。

…だって穂高ってば、昔からあたしがUFOキャッチャーやつてると絶対手伝ってくれるんだもん。

でも、今回ばかりは駄目なのだ。絶対自分の力だけで取らねばならない。

「よしっ、いっちょやりますか」

気合いを入れて、夕夜はガラスの向こうの目標物を睨んだ。

「ねえ、うちらと遊ばない？」

「カッコいいねえ。ドコ高？遊んでよっ」

一方、穂高はいええ。



…知らない学校の子に捕まっていたりした。トイレに寄った帰りの、ほんの数秒の間のことだった。

早く戻りたいのに。

イライラが溜まる。夕夜があと少しでいなくなってしまうと分かっている今は、一分一秒でも時間が惜しいから。

「無理。連れいるから」

目も合わせず、捕まれた腕を振り払う。けれど彼女達は、そんな穂高の言葉など聞いちゃいない。

「連れー？ドコ？いないじゃん」

「だからあゝ、うちらと遊ぼって」

周りが見えていない女は始末に終えない。するりと自分の腕を穂高の腕に絡ませながら、ひとりが甘えた声を出した。

…ぶちっ。

何かが切れた音がした。

「馴々しく触るな。…ここはおまえの場所じゃない」

そう言い置いて乱暴に腕を振り払うと、穂高はさっさと夕夜の前へと向かった。

残された彼女たちは、相当惨めなものだった。

UFOキャッチャーと格闘している夕夜をすぐ発見して、

穂高は歩み寄った。

「いけっ、そこだそこっ。そのままそのまま……、あーっ、なんで落とすのよっ！？この機械おかしいんじゃないの？詐欺よ詐欺」

…どうしよう。やっぱり、他人のふりをしようか。

と一瞬思ってしまうほど、夕夜は必死の形相でUFOキャッチャーにかじりついていた。

と、景品出口に手を突っ込んでいるではないか。なぜそこまで？

「待て待て待て待て。おかしいだろそれは」

穂高は止めに入る。店の注目を集めたら、たまったもんじゃない。「あ、穂高。あんたどっからわいて出たのよ？」

「ふつうにいたから。てかおまえ何してんの」

「え？…こつからなら取れるかと思って」

「いや、常識で考えて取れないだろう。」

「な、なによその目？冗談だってば」

「冗談にしては表情がマジだったんだけど？」

「…じよ、冗談ったら冗談よ！ほら、いいから穂高は黙ってそこにいてッ！」

「ハイハイ、今度は逆ギレね。」

いつものパターンである。

穂高は黙って見守ることにした。

二回目。…取れない。

三回目。…取れない。

四回目。…取れない。

五か…

「と、取ってやるか？」

あまりにおかしくて、笑いを噛み殺しながら穂高は聞いた。

ホントに昔から、これだけは下手だよなあ。

「う、うるさい。体使わないもんは苦手なのよ。ボタンひとつなんて感覚的な…」

「ああ…おまえ凶暴なうえおおざっぱだもんな？」

「ほおーだあーかあー」

その後、引き続き格闘すること5分。

「と…取れない。なんで？」

たったガラス一枚向こうのアレに、どうしても手が届かない。

夕夜は愕然とガラスに手をつき、すっかり意気消沈していた。

「だから手伝っ…」

「だめっ！コレはあたしが取るの！」

いつもなら簡単に取ってもらうくせに、今日は頑なな夕夜を不思議に思う。

…そこまで言うならほつとこつ。

と、再度黙ってみたのだけれど。

「だあーっ、もう辞めよやめっ」

あ、キレた。

夕夜は叫びとともに、二度バンバンッ、と手を叩きつけた。…そこはちょうど、ボタンの上で。

と、次の瞬間。

ピッ。

ウィーン、ガシャン。

「あ」

「え？」

ボトッ。

…除くと、景品出口には大きめのくまのぬいぐるみ。

俗に言うテディベア      などというかわいらしいものではなく、リアルな熊顔の、それはそれは禍々しい一品だった。

くわっとな開いた口からは、赤い口腔が伺える。

「…良かったじゃん、取れて」

なぜこれが欲しかったのかは甚だ分からないが。

「あたしの今までの苦労って…」

「ふーん…まだ機械に200円残ってたんだな。ラッキーじゃん。

あれで取るとかおまえある意味天才？」

すると夕夜はさらりと前髪を掻き分けながら。

「ふっ…まあ、持って生まれた実力ってやつかしらね？」

「ふっ…調子いいやつ」

穂高が眉を下げてくしゃっと笑った。

「……あー？」

「…なに？」

「べつにいい？穂高笑うと、あたしも嬉しいなあと思って！」

今度は夕夜が屈託のない笑みでにこっと笑う。

穂高は驚いたように目を軽く見張った。無言でふい、とそっばを向く。      その耳は、赤い。

「あー、穂高照れてんの？」

「……………」

「照れてるんだー」

夕夜は後ろから頬をつん、とつつく。

どうしようもなく、愛しい。

「…おまえいつからそんなうざキャラになったの？」

「ひっど！あたしは最初からこうですー」

「つまり最初からうざキャラだったと」

「違うっつの！」

そんなこんなでまたぎゃあぎゃあ騒ぎに発展するのだが。

「夕夜ー、穂高くーん。プリクラ撮らない？」

自分たちを呼ぶ栄理の声で振り返ると、プリクラの機械の前で、栄理と智也が手を振っていた。

「夕夜、どれにする？」

「あたしべつにモードとかフレームとかどーでもいい。四人写つてればそれで」

「…ん、まあそれもそうね。じゃあおまかせで」

嫌がる穂高を無理矢理連れて、四人は適当な機械へと入ったのがついさつき。

栄理がタッチパネルのおまかせモードをピッと押した。

「…俺入んなきゃだ」

『だめ』

満場一致で穂高の参加が決定する。

「穂高ー、おまえこの期に及んでそれか？彼女とプリクラ写らないとかありえませんか！」

「べつにプリクラ写りたがらない男なんて、俺以外にもこの世には大勢いますから？」

「この世に大勢いても今のおまえには関係ないですからー。ね、高良さん」

「穂高。撮りやがれ」

語尾にハートマークをつけて、夕夜がにこつと笑った。

「カウントダウン始まったわよ？」

「えー！」

『いっくよー！』

機械音が明るく告げる。

「待つて待つて、穂高ほら早くっ」

「はあ……」

『3・2・1、カシヤッ』

結局のところ。

穂高は夕夜に、勝てないのだ。

「うへへへ」

「……不気味なんだけど」

「だって、ねえ。楽しかったから」

栄理と智也と別れ、ふたりは帰路についていた。

「思い出し笑いはいいけどその声はやばい」

「何とでも言って」

今や気分上々。何を言われてもむかつかない。

夕夜は穂高より一歩前に出て夜道をスキップする。

穂高の嫌みなんて痛くも痒くもないんだからっ。

ほどなく家に着いて、すでに帰ってきていた絵里に迎え入れられた。

「おかえりー。穂高くん、今日の晩ご飯は麻婆豆腐よ」

「いいですね。いただきます」

「待て待てっ。ふつつ先に娘のあたしに声かけるもんなんじゃないの？」

「さっ、穂高くん早くテーブルついて？」

「ありがとございます」

「話を聞けッ」

「さあ食べましょっ」

「あ、いただきます」

「家出しようかなあ」

… 夕夜がそう思ってしまうのも、無理はなかった。

## 第二十五話 思い出ダブルデート？（後書き）

自分の遅筆さと稚拙さに辟易としています…。そんなわけで更新日を決めることにしました！毎週土曜日週一で更新します 今までもり文量少なくなるかもしれませんが…頑張ります！

## 第二十六話 穂高の逆襲（前書き）

どうにかこうにか土曜日です……



## 第二十六話 穂高の逆襲

「俺も一緒に行くか？」

麻婆豆腐の皿を見つめたまま玄関で逡巡する夕夜に、リビングから出てきて穂高が声をかけた。

「大丈夫。行ってくる」

避けられない『あいっ』への差し入れだった。

自分たちがご飯を食べ終わったあとに、絵里が「差し入れよろしく」と言っただけで皿を渡してきたのは言うまでもないが、夕夜は乗り気ではなかった。まあ、今までも乗り気な日などなかったけれど…。  
だけど、彼の分かりにくい心配顔のおかげで夕夜はモチベーションが上がった気がして、扉の取っ手に手をかけた。

…うん、行ける。

「待つてるから早く行け」

「いえっさー」

と言ったところで、たったの2・3歩の距離で隣なんて着いてしまう。

…夕夜は、インターホンは押さず704のプレートをじっと見つめていた。…そして、手に持っていた差し入れを廊下の扉のすぐ横に力チャンと置く。

だめ。やっぱり会えない。…どんな顔すればいいのか分かんないし。

フライパンを投げつけたことは悪いと思うけど、かといって朔眞のしたことを許せるわけがないのだ。

だって…キスよキス!?

散々迷った挙句 差し入れだけは置いていくことに決めた。

夕夜はキッと顔を上げたかと思えば。

ものすごい勢いで、ピンポンダッシュをしたのだった。

「はい？」

呼び鈴が鳴ったから、朔眞は玄関の扉を開けた。  
けれどそこには誰もいなくて。

「？」

ふと足元を見ると、そこには見慣れた模様の食器があつた。

「ああ……そーゆーことね」

瞬時に状況を理解して、朔眞はひとり頷く。

……高良さんママの手料理食べられるのも、あとちよつとかな。

薄く苦笑いして、朔眞はしっかりと食器を手に持ち家のなかに引き上げていった。

次の日、木曜日の朝。

玄関を出て、二人はエレベーターに乗る。

「おまえ土曜日はもう暇じゃないんだよな？」

「……うん」

穂高は黙考した。

……ということは、時間が取れるのは今日と明日のみ。どうにかして二人でゆつくりしたい。

「夕夜、今日」

「あたし今日ね、栄理んとこに泊まりに行くんだっ！」

穂高の言葉を遮るように、夕夜が目線を合わせることなく妙に明るく言った。

「……高橋さん？」「ま、前から約束してて。やっぱり女同士色々語りたいことがあるのよねッ。だから穂高今日はお母さんと二人でご飯食べてくれる？」

「……それはいいけど。おまえ時間ないって分かってる？」

「…分かってるわよ。だから行くんじゃない。友達との別れが寂しいの」

「……………」

夕夜はまっすぐエレベーターのボタンを見つめたまま微動だにしない。

一瞬気まずい沈黙が流れるが、穂高がそれを破った。

「…そーかよ」

ダンッ！！

ビクッ、と肩が揺れた。何事かと思えば、夕夜は壁ぎわに追い詰められていて、顔の横には穂高の右腕。一瞬のうちに籠のなかの鳥と化していたのだ。

唯一の逃げ道であるエレベーターの扉はまだ開かない。無常にもゆっくりと下降中だ。

「な、なに」

すんのよ、という言葉は最後まで紡げずに。

「んっ！」

気づけば、乱暴に唇を奪われていた。

「ほだ んうッ」

なにこれ。

こんなキス、あたし知らない。

「はっ…」

こんな。

奪うような、貪るようなキス。

頭がしびれて何も考えられない。逃げたくても、後頭部を手でしっかりと押さえられてて首を動かすことさえままならない。

こいつ、いつのまに。

「はっ…」

隙間から舌が入ってくる。簡単に絡めとられて、そのときにはもう抵抗する気力なんて失っていた。

人が入ってくるかも、とか防犯カメラでしっかり見られてるかも、

とか。

頭の片隅にあったほんの少しの理性さえ吹き飛んで  
もう、されるがままだった。

やっと解放されても、力が入らない体はずるずると壁伝いに落ちていく。

最後にはエレベーターの床に座り込んでしまった。

「……」

悔しい。

ありったけの反抗心を込めて穂高を睨む。

しかし、真っ赤な顔と涙目では、迫力など無いに等しかった。  
チン！

あんなに開いてほしかった扉はいま開いて。

「ざまあみろ。好きなだけ語ってこいバーカ」

それだけ言い残して、穂高は颯爽と去っていったのだった。

## 第二十六話 穂高の逆襲（後書き）

多分毎週これぐらいの時間になるかと思っていますm（――）m遅くて  
申し訳ございません。

## 第二十七話 思い出お泊まり！（前書き）

遅れまして申し訳ございません。ケータイ本体の不都合で投稿することができませんでした（；|；）溜まった二週分は、今回しつかりまとめて投稿させていただきます。

## 第二十七話 思い出お泊まり！

「ふーん？であんたは今ここにいるわけなのね」

「はい」

「今日って泊まりだったんだ？」

「うん」

「夕夜の頭の中でだけ」

「はい」

「今知ったわ」

「…ですよねー」

現在、午後五時。

いつも通りに学校を終えて栄理が帰ろうとしたところ、夕夜に思い切り引き止められたのが一時間まえのことである。「穂高くんは？」と聞いたら「今日は来ない」と夕夜は答えた。不審に思ったがとりあえず栄理の家で遊びたいと言うので連れてきたのであるが…経緯を聞いてみたらどうだろう。なんという馬鹿げた話だ。

「そこは穂高くん優先しなさいよ？」

「その話は後程！お願い、泊めて！！」

パンツと両手を顔の前で打ち合せて夕夜は懇願した。

真剣に泊めてほしそうだったから栄理は帰れと言えない。もちろん今こうしてるときだって穂高は悶々としているはずで、別れの前にはイチャイチャするのが普通の恋人同士の行動じゃなかるうか？しかし実際夕夜は栄理の家に来ているわけで、しかも泊まっていこうという。

「うーん…」

栄理はしばし逡巡する。

本音を言ってしまうば　　栄理だって夕夜に泊まってほしかった。  
実は最近、穂高にかかりきりだったのが寂しくて、夕夜は自分と

の別れなど平気なのではないだろうかと不安になっていたから。

だから…穂高くんには悪いけど。

「ま、私だってたまには夕夜独り占めしていいわよね。今日は朝まで語ろっか」

「栄理…ありがとう！」

思わず夕夜は栄理に抱きついていた。

そうと決まれば絵里に知らせなければと、携帯を取り出しメールを打つ。今日は泊まるということと、それから　朔眞への差し入れの代わりを頼むこと。

すると横から携帯画面を覗いていた栄理は、ふと思いついたようにそういえば、と言葉を発した。夕夜はん？と目線でその続きを促す。

「今日も木原朔眞来てなかったわね」

よし、送信。…て、え？

「あいつ来てなかった？」

「うん。最近彼女になって病が鳴りをひそめたと思ったら、学校にも来なくなってたわね。最後に来たのは夕夜が風邪で休んだ二日前よ」

「二日前…」

ということは、ちょうど夕夜とすれ違いだったのだ。…やっぱり昨日会つといたほうが良かった？いやいや、でも絶ツツツツ対許したくないし！

一人で首を振ったり百面相だったりの夕夜を栄理はじとつと不躰に見つめると、訝しんだ。

「…怪しいわね。何か隠してるでしょう」

「か、隠してるっていうか、べつに、その」

「なんか行動起こされたわね？」

夕夜はしどろもどろになる。

な、なんで栄理ってこう…。

「当てちゃうんだろ…」

「心外ねー。あんたが分かりやすいだけでしょ。夕夜って思ったこ



とそのまんま顔に出てるもの」

「…まさかあ」

「本当よ？」

「え…ちょ、待って。じゃああたしが穂高のこと、す、好きだったのも周りにはバレバレだったわけ？」

栄理はむしる唾然としてこの目の前の友人を見つめた。

「このニブチンが！いまさら何よ！？あたりまえじゃない！とっくにあなたたち当人以外は気付いてたわよ…。もう、いらいらするったらありやしなかったわね」

…夕夜はカルチャーショックを受けて、穴があつたら入りたい気持ちになつていた。

「い…いつから」

苦虫を噛み潰したような表情で何かに耐えるように、問いかける。

「いつから？ふっ…愚問ね。最初からよ」

「さ、最初って…」

「あなたたちがお互い好きだって自覚する、そのずっとずっとずっと前から。しいて言うなら、中学で初めて会ったときにすでにピンと来たわよ？少なくとも私はね」

栄理はビシッと一息で言い放った。

夕夜は再びカルチャーショック、もういっそ、自分で穴を掘ってやろうかとも思った。

「ま、あくまで『私は』の話だけど」

「……………」

元来。女子とはおしゃべり、もとい『恋バナ』が大好物である。ゆつくり時間が取れば、人というものはこの手の話か怖い話かのどちらかの話になるものだ。まあ、栄理の場合は迷うことなく前者であるのだが。

今夜は 眠らせてくれそうにない。

「ところでさあ」

夕飯も食べ、風呂にも入り、ちょこつとデザートをつまんだりなんかして。その後、布団に潜り込んだ時のことだった。

「結局、木原朔眞には何されたの？」

…泊まりの真髓は、布団に入ってからのおしゃべりである。ああ…その話題、すっかり逸らせたと思ってたのにと、夕夜は唸った。言うべきだよな…やっぱ。

「べつつに？ほんの一瞬キスされただけ、だし」

もう電気は消して暗かったけれど、夕夜は感覚で髪の毛の先を一筋掬うと、指先で意味もなく、くるくると弄んだ。

「げ…それはそれはご愁傷さまだわね」

きつとされた当人である自分より嫌な顔をしているのだろうな、と夕夜はなんとなく雰囲気でつかんだ。栄理は、ともすれば夕夜より男性に対して潔癖なところがある。言ってしまうえば、夕夜は異性に関心がなく理解もないのに対し、栄理はある程度関心もあり、基本的に『男はどういう生き物か』も少なくとも夕夜よりは理解している。

だから、警戒心も夕夜より多少強かったりするのだ。

「まあ、腹立っただけど、フライパン投げつけてやったから少しすつきりしたし…だからもう、い」

「フライパン！？」

夕夜の言葉を遮って、栄理は叫んだ。よほどびっくりしたらしい。…そして、ツボに入っただけらしい。

「フ、フライパンてっ…」

どこまでも夕夜らしい、と栄理は肩を震わせて笑った。どうせなら、思い切り声を上げて爆笑されたほうが、まだ良かったと夕夜は思う。

「そっ、それで穂高くっ、は…、な、何てっ？」

「…ぶん殴りたいくらいムカつく　　って」

あの日、風邪で伏せつていながら初めて本音で語り合った。ほんの数日まえのことなのに、懐かしい気持ちで思い返ししながら夕夜はとつとつと言葉を続ける。

「あたしさあ…それがファーストキスだと思ってたんだ。ものすごく泣いたんだよね。けど…」

笑うのはさすがに辞めて、栄理は夕夜の表情を伺おうと暗闇のなか目を凝らす。けれどやっぱり、細かい表情は読み取れなかった。

「でも？」

もつと重大な事件でもあったのかと、栄理まで神妙な顔で眉根を寄せる。

でも、なんだろう。

…栄理が、不思議そうな顔をしているのが手に取るように分かる。夕夜はくすつ、とひとつ笑う。

「なーにーよー」

「でも、実はね。あたしの初キス、朔眞に無理矢理されたのよりもずっとずっと前だったのよ」

「…って、相手は？」

訝しむ友人に夕夜は、にやりと笑って意味ありげに一拍、間を空けて…。

「　穂高だった」

「…なにそれなんの面白みもない」

栄理は期待はずれとぶーたれた。

「面白さは求めんでいい」　夕夜としてはそっちこそ何なんだ、といった感じなのだが。

「でもその言い方ってなんだか、夕夜が知らないところで起こった、みたいに聞こえる」

「ああ、だって実際そうだから」

「……………？」

栄理は首をかしげる。

「あたしが寝てるときにしたんだって、さー」

真実を告げると、たつぷり5秒。栄理は押し黙り…。

「わぁー、それってよば」

「みなまで言うな!」

叫びかけた言葉を夕夜は強制終了させる。あの続きを言われたら、羞恥で顔が赤く染まってしまう。

「ふわぁー…、穂高くん、へたれのくせに意外とやる　　って、

へたれだから寝てるときにするのかしら?」

「そ、そんなことどーでもいいーよ…」

恥ずかしそうに俯くものだから、追及は辞めてあげようと思った栄理である。だから、その代わり。

「それで夕夜?　　本題がまだだわ」

栄理はずばつと切り込んだ。

対して夕夜は、は?と一瞬考える。

本題?本題って。

「『その話は後程!』って言ったのはドコの誰かしら」

「ああ!はいはい…あたしデス」

「ん、よろしい。で?何で穂高くんそこから逃げてきたわけ」

「…べつに逃げたわけでは」

「だから顔に書いてんのよ、あんたは。…言っちゃいなさい、ね?」

前半は責めるように、後半は優しい声音で。栄理は諭すように語りかけてくる。

「~~~~~っ」

ああもう、降参だ。

夕夜は白状することにする。

「……………そうなんだもん」

「え?なに、聞こえない」

「泣きそうなのよ!もし…もし、このタイミングで穂高とまた二人で話でもしたら　　、あたし、絶対、」

一息でそこまで言う。

「行きたくない、って駄々こねるよ……」

さっきまでの勢いはどこへやら、夕夜はしょぼしょぼと尻すばみに声のトーンが落ちていくのであった。

離れたくない。

けれど、自分が泣いてしまったら優しい彼は絶対困ってしまうだろう。夕夜は困らせたくないのだ。いちばん愛しい、ひとだから。

だって別れ的时候は笑顔でいたい。

だけど、すでに予想できてしまうのだ。今この時、この前のようにふれあってしまったら、必ず自分は自分の心の弱さに負けて穂高にすがりついてしまうだろう。

行きたくない、そばにいてと。

穂高にはどうにもできないのに……。

夕夜は軽い自己嫌悪に陥っていた。

そのまま黙りこくってしまった彼女に……栄理はひとつため息をつく。

恋する乙女って、なんて情緒不安定。

「バカねえ……」

「……バカじゃない、もん」

「バカよ。なにをそんなに気にする必要があるの？」

「へ……？」

「いいじゃない。泣いたってわがまま言っただけで困らせただけ。あんたにはそうする権利があるんだから」

「権利……」

「そうよ。穂高くんは夕夜の『彼氏』なんだから」

彼女が彼氏に甘えて何が悪いのよ、そうでしょ？と栄理は月明かりのした綺麗に笑った。

ああ……いつのまに月が出たのだろう。

夕夜は栄理の笑顔を見て、いま、改めてそうなのだと実感した。自分と穂高はもう、『ただの幼なじみ』ではない。『恋人

同士』、なのだ。

「でも…」

ここで夕夜はあることにはたつと気がついた。

「それって、普段と変わらない」

夕夜のわがままに、穂高が振り回されながらもしっかり付き合う。それって、昔からのスタンスだ。

「あはは！じゃあなおさらいじゃない。それが夕夜たちのいちばん自然な形なのよ。まあ…穂高くんは少し可哀想かもしれないけどね」

けれど彼はそれできつと幸せを感じているはずだ。

決して、マゾだからとかそういうことではなく。

「そーかな…」

「そーよ。夕夜がもつと穂高くんに頼ればいい話。さ、寝るわよ？」  
あつさりと布団に再度潜り込むこの目の前の友人に、夕夜は口を尖らせる。

「栄理…マイペース」

「いきなり家来て泊めてって言う人に言われたくないわね」

それもそうである。

「ごめ…」

口について出そうになったのだが、ふと 違う、と思った。

いま言うべき言葉は、コレではない。なんだかんだ言いながら、家に泊まることを快諾してくれた栄理。自分のネガティブ思考をポジティブ思考に変えてくれた大好きな親友。

夕夜は、残りの言葉を飲み込んで、栄理が寝ているベッドに近寄った。もう一度息をすうつと吸い。

「ありがとつ、栄理」

反対側を向いている親友の肩を叩いて、晴れやかにそう言ったのだった。

世話がかかる。

この時、毎度おなじみとなったこの言葉は、栄理の胸中でのみ呟

かれたのであった。

こうして綺麗な月夜の晩は、穏やかに更けていった  
またひとつ、思い出のできあがり……？

。

第二十七話 思い出お泊まり！（後書き）

続けてどうぞ。



## 第二十八話 思い出?...だって担任ですから

一晩明けて金曜日の朝。

引越しを日曜日に控え、前日である明日はあいさつまわりとか、色々忙しくなることが予想される。だから今日が最後のチャンスだった。

「分かってるわよね、夕夜？今日こそはもう一度しいいっかかり、穂高くんといちゃつき...違った、し・ん・み・つ・に！話してくるのよ？」

「わーかったわーかった。だからもう少し離れてくれない」

今朝は二人で仲良く早めの登校、その後教室で飽きることなく恋愛の何たるかを説かれ、今に至っている。力が入るのは分かるが、こちらに身を乗り出しすぎではなからうか。

栄理の肩を手のひらで押し返しながら、夕夜はため息をついた。

でもまあ、栄理の言っていることは正しい いちゃつくかど

うかは別として と思うので、今日は穂高と帰ろうと思う夕夜であつた。

おしゃべりに興じていれば時間が経つのは速いもので、もうほとんどの生徒が登校を終えていた。ほどなく担任も現れHRも終え、夕夜にとっては『最後となるはずである』授業が始まった。

毎度おなじみのことなのであるが、夕夜たちが通っているこの高校はグラウンドが教室から見えるつくりだ。今日もまた穂高のクラス of 体育の授業が被り、夕夜は窓側の席でいいなとかなんとか思いながら頼杖をついて外を眺めていた。

穂高が体育してるの見るのもコレで最後か...

なんとなくセンチメンタルな気分になりながら、夕夜は先ほどから止まらないため息をつく。

やっぱり授業なんて頭に入るはずもなく、次にはつとした時にはもう昼休みになっていたのだった。

「穂高んとこ行ってくる…」

「いつてらっしゃい」

弁当を片手に、これから彼氏のもとへ行くとは思えないような重い足取りで教室をでる夕夜。栄理は、心配そうにその背を見送るところしかできなかった。

6組の教室に着いたはいいが、出入口から穂高のいる窓側の席までは遠かった。

テンションが下がっていた夕夜は大きな声を出す気にもなれず、小さな声でぼそりと彼の名前を呼ぶ。

「穂高」

「夕夜」

昼休みの教室はうるさくて気づいてもらえないかと思っていたのに、彼は一発で気づいてくれて、そのうえすぐさま自分のところまで歩いてきてくれた。そんなことが…たまらなく嬉しい。

あ いまちょっとだけテンション上がったかも。

「あのさ…ご飯いつしょに食べない？」

「いい、けど」

普段こういう恋人っぽいことは自分から誘わない夕夜である。穂高は軽く目を瞠ったあと、是と首を縦に振ったのであった。

人がいない中庭の芝生の上に、二人は腰をおろす。ここに来るまでの間も今も、夕夜は一向に口を開かない。その視線は遥か遠くの空を見ていて 数日後には自分がいるロサンゼルス の地を眼裏に思い浮かべているのだろうか。

確かに隣にいるはずなのに、今にも消えていなくなってしまうようなうな そんな錯覚を一瞬起こして、穂高は強烈な焦燥感に教われ夕夜を両腕に閉じ込めた。

「うわっ…！ほ、穂高？」

「おまえ、今なに考えてる」

「ふえ？なになんて」

見ると、顔を赤くして焦っている。どうやら抱きしめられていることに緊張して、それどころではないようだった。

気のせい、か…？

「いや、悪い…何でもない」

穂高はそっと夕夜を離れた。

「…??」

それっきり彼は口を閉じ、自分の弁当を食べ始める。

夕夜も、昼休みの時間内に食べ切りたいので黙って弁当に手をつけた。

「…最初で最後の学校ランチだね？」

ちら、と一瞬だけ目線をやって呟いてみる。

「…ああ」

けれど穂高は難しそうな顔でたった一言、そう言っただけで。その後はどちらも話かけるでもなく、静かに食事を進めるのだった。

…ふと、隣で食べる穂高の口元に目線がいった。瞬間、夕夜は昨日のエレベーターでの出来事を思い出し。

「うわああああああ」

「…!?」

そういえばあれきり顔をあわすのは今が初めてだったのだと思い当たって、今さらながら猛烈に恥ずかしくなる。

頭に浮かんだピンク色の思考を消すように、ブンブンと首を振った。

穂高は怪訝そうに目を細め、熱でもあるのかと至近距離に顔を近づけたのだが…夕夜は「やだっ」と声をあげてあからさまに顔をそむけた。

「…は？」

やだ？

穂高の空気が怒気を孕む。夕夜はそれを敏感に察知して。

違う！そうじゃ、なくて…！！

「昨日のっ…」

昨日のエレベーターでの情事を思い出して、恥ずかしかったからなどとは言えず、それ以降言葉が続かない。

「…なに？」

ごく近くで吐息のように問われれば、余計に心音は速くなり。

「な…何でもないってば！」

反射的に穂高を両腕で突き返し、夕夜はそこから逃げ出したのだった。

一方中庭に一人残された穂高は為す術もなく…呆然と夕夜が消えていった方向を見つめていた。

数秒後、自体を飲み込んだ穂高が思ったことは。

彼女が残していった弁当も自分が食べれば良いのか？…という的外れなものだった。

「ああああああああ」

昼休み、走って教室に戻ってきたかと思うと席に座って唸りながら頭を抱える夕夜を、栄理は冷めた目で一瞥した。

どうせまた穂高絡みなのだろう、知らないからね？一言言おうと、もう一度夕夜を見てみたのである、…が。

「ぷっ」

予想に反したその顔に、思わず、吹き出した。

「ななななに笑ってんのよ栄理い」

「だってあんた…」

ありえないほど顔真っ赤！

そう一言言ってから、栄理はまた笑った。

「うぐう…」

「ほつところと思つてたけど前言撤回。あまりにも面白そうだから何があつたの？」

興味津々、目をきらきらと輝かせて栄理は言つたが、さすがにんなこと自分の口からは言えないと思う。

はい、キスされました。

それも、デープなやつ。…いやー、穂高の唇見て、それ思い出して恥ずかしくなつたので逃げ帰つてきちゃいました。なんて、誰が言えるだろうか。

「何でもな」

「きゃあー！朔眞くんッ」

ところが　　夕夜の言葉はクラスメイトの歓声にも似た黄色い声によつて、見事に打ち消された。

…は？　　朔、眞？

夕夜は、ゆつくりと教卓側の出入口を振り返る。

そこにいたのは、紛れもなく木原朔眞…その人だった。

「どおして最近学校来なかつたのー？」

「ねっ、今日あたしと遊ぼうよオ」

「なんで昼休みに登校なの？」

「私も朔眞くんと話す！あんた退きなさいよっ」

「なによ、あんたこそ」

…おまえらはアイドルの出待ち隊か？

そう、夕夜が思わず心の中で突っ込んでしまうほど、朔眞の周りには目をギラギラさせた女子たちがかたまりを作っていた。

ただ　　一人だけ、その群れに混じっていない女子もいたのだが。

「…？」

彼女は、辛そうな切なそうな表情をして、唇をぎゅっと噛みしめている。両手はきつくスカートを握り締めており、皺になっちゃうな、あれ…と思ひながら夕夜は、自分までもどことなく哀しい気分になされた。

…春田さん、だよなあ。

目が大きくくりくりしてて、肩よりほんの少し短いふわふわの髪の毛の少女。

クラスがえ当初、可愛いと思ったものだからすっかりと記憶していたのである。

「夕夜？…大丈夫？」

「あ…うん」

はっと我に返り、もう一度朔眞に目をやった。不思議なことに、今まであれだけ調子よく女子に接していた彼が、愛想笑い程度で済ませている。

何かあったのだろうか？

朔眞と目が合う。

彼はこっちに向かって歩いてきて。

夕夜は、反射的に身構えた。けれど、朔眞は夕夜のところへ来るわけでもなく、まっすぐに自分の席に着いたのであった。

「……………」

「あら珍しい」

隣で栄理も意外そうな声をあげる。

「…フライパンが効いたのかな？」

「あつはは！そうかもねー」

栄理は笑ったが、夕夜は本気でそうだとはもちろん思っていないかった。

…気にはなる。気には、なるけど。

でももう、自分はいつと関わる気は毛頭ない。絡んでこないのならこれ幸いと、夕夜は授業の準備を始めるのだった。

鐘が鳴って授業は全て終了し、担任がHRのため教壇に立つ。

いつもの通り淡々と連絡事項だけを伝えと、彼はパタンと手に持っていた自前の連絡ノートを閉じた。そして、夕夜を注視する。

「…？」

な、なによ　　？

「高良」

「…はい…」

「おまえは今日で最後だなあ」

「…はあ…」

「思えばおまえは入学当初からなにかと注目の生徒だったなあ？あのイケメンの幼なじみのおかげで」

夕夜は苦々しい顔をする。

「その割にクラスでの存在感は薄いつていう不思議な生徒だったよそりゃあ、悪かったですねえ。どーせあたしは穂高と比べりゃ平々凡々なふつーの女子高生ですよ。」

「だがな」

「まだ何か」

「先生は良いと思うぞ？」

「…はい？」

「普段は目立たないがやるときゃやる。これはある意味最強の形だ。日本古来の忍者だって、だから強いんだぞー？…まあ、つまりだなあ」

「齢50の担任が、普段のニヤニヤした笑いとは違う温かい微笑みを見せた。」

「おまえは、大丈夫だ。向こうに行ってもうまくやれる。」  
「が  
んばれ」

この男が自分の担任になって、初めて教師らしい一面を見た気がした。夕夜は不思議な気持ちになりながらも、これは先生からの励ましなのだと、ありがとうございますとぺこりと頭を下げた。

見ると、他のクラスの面々も、「この男腐っても教師だったんだ」と同じような衝撃を受けているようだった。

「さっ、帰るぞー。おまえらも早く散れー」

「が、そう思ったのも束の間、数秒後にはいつもどおりの『教師としてありえない男』に戻っているのだった…。」

「おー、そうだ」

ところが、教室を出て行きかけていた彼は足を止め、夕夜の方を振り返る。

「？」

「高良」

「…はい…？」

「離れるの寂しいから、って今日いちゃこいてすっかりガキなんか作るんじゃないぞー」

「なッ…！！」

奴はいけしゃあしゃあと云つてのけると、何事も無かったかのようにはひらひらと手を振った。

「ふっ…ざけんなあああ！！！！」

顔を朱に染めた夕夜は、担任を思い切り罵倒するのだった。

「なに言つてんだ、大事なことだぞー。できないように、ひに…」

「言うな！！！！」

ああ。皆の視線が痛い…。

「お？噂をすれば結城じゃないか」

「え！！！！！！！！！！」

どうやら迎えに来た穂高と鉢合わせしたらしい。

ちよ、ちよつと待て。つーことは何？もしかして、今の話聞かれて…！！？

とたんに焦る夕夜。

よりにもよつて、本人に！？しかも、「頼んだぞ、結城。おまえにかかっているんだからな」なんて親しげに肩をポンと叩いたりなんかしちゃっている。

こ、これ以上余計なこと云うなあ！

夕夜は慌てて鞆を掴むと、栄理にじゃあねと手を振って人混みを縫って教室を出るのだった。



## 第二十八話 思い出?...だって担任ですから(後書き)

第二十九話は、遅ればせながら明日更新させていただきます。

第二十九話 思い出にたくない。〈前編〉（前書き）

いろいろとスイマセン（ノ　>。　）。。

## 第二十九話 思い出にしたくない。〈前編〉

気まずい。

半端じゃなく気まずい。

夕夜は穂高の大体三步前をぎこちなく歩きながら、猛烈に思った。

教室を出てからこっち、一度も穂高の顔を見ていない。というか、見れない。

昼休みは自分から誘っておいて逃げ出すし、こちらから話しかけることなどできるわけもなく、ひたすら息を詰めて重い足取りで夕夜は道を歩いていた。

せめて穂高からなにか話しかけてくれれば、「あははー。あたしの担任、とことんおかしいわよね」とかなんとか（多少強引にでも）、笑いに変えることができるのに。

「はあああああ……」

夕夜は大仰にため息をついた。

一方、穂高はといえば。

今のため息を聞き取り、敏感に反応していた。こちらもちろで、色々と考えているのだ。思い返せば昼間のあれ。顔を近付けた自分に、いやだと彼女は言った。

そして今の、この態度。

一緒に帰っているというのに、ゆうに二メートルは離れているではないか。

まさか。

（き、昨日のアレが原因か？）

乱暴なディープキスがいけなかったのだろうか。

穂高は内心めっちゃめっちゃ焦っていた。夕夜に、引かれたかもしれない。……はつきり言っ、それはかなりまずい。シヨックである。それに、彼女の担任が言っ、たあの言葉にだっ、過剰に拒否反応を

しすぎな気もする。

けれど、自分だって健全な男子高生である。ちょっとくらい、その、手を出してしまうのは許してほしいと思うのは駄目なのだろうか。

…試しに、後ろから手を繋いでみようと思う。

彼女は、振り返って笑うのか。それとも、また…。

穂高はそっと近づくと、ぷらぷらと揺れている彼女の左手を、無言でさらってするりと指を優しく絡めた。

「ひゃっ」

途端、夕夜は身を硬くして 穂高の手を振り払った。

「さっ…触らないで！」

そう叫ぶと、もう見えているマンションに向かって全力で疾走するのだった。

…穂高は、行き場のなくなった右手を、ぎゅっと握りしめて。

「は…、決定、的」

自嘲ぎみに呟き、笑うしかなかった。

「はっ…、はあッ、はあ」

時計塔の下までたどり着いた夕夜は、乱れる呼吸をどうにか抑え、後ろを振り返った。

穂高が追ってくる気配はないけれど。

…ど、どうしようー！

また、逃げちゃった！

自分がしでかした事に青ざめた。

だって穂高の手の繋ぎ方がなんかいやらしくて、びっくりしちゃったんだもん！でも、穂高絶ツツ対怒ってるわよね ！？

あわあわと右往左往し、どう弁解しようかと考えを巡らせる。ふいに、じやりつと地面をこする足音が耳に届き、そちらを振り返っ

た夕夜は　　。

「ほ…穂高？」

息を、呑んだ。

「…夕夜」

彼がなぜか　　。

「あのさ」

「…う、ん」

今にも、泣きそうな顔に見えたからだ。

彼が次の言葉を告げようと開く唇の動きが、やけにスローモーションで見えて。

「　　傍にいらなくていいよ」

「…え…？」

空耳、だろうか？彼は今、『傍にいらなくていい』と言わなかったか　　？

「無理に傍にいらなくていい。…いやなんだろう、俺が」

「なっ…」

穂高のことが、いや？

なに言ってるの。

そうすぐさま反論したいのに、夕夜はあまりの衝撃にすんなり声が出てこない。

「昼休み。いなくなる前近寄った俺にやだって言ったよな。今だつて、触れられるのを嫌がった」

違う！違うよ穂高、それは…嫌なんじゃなくて、ただ恥ずかしかっただけなんだ。

パクパクと、水面でもかく金魚のように口を動かした。けれどそれでは、言いたいことは伝わるはずもない。

「は…また時計塔の下ね。俺、ここにいい思い出ないよ」

苦笑いしながら穂高は高い高い時計塔を振り仰ぐ。針は午後五時を指していた。

「喧嘩したときもここ。おまえが最初に隠しごとをしたのもここ。

…木原に連れていかれたときだって、ここだった。それで今も時計塔の下にいるなんて、ほんと、何の因果だろうな…」

穂高は俯いて黙ってしまった。

「やだっ…!」

気づけば夕夜は、何も考えずに叫んでいて。

「ここに良い思い出ないなんて言わないでよっ?」

「なっ…うわっ?」

ずかずかと穂高に歩み寄ると、胸ぐらを鷲掴み自分の方に引き寄せて、自分の唇と穂高の唇を重ね合わせた。

「っ…」

そのまま数秒。

「はっ…、ゆう、や?」

しばらくして唇を離れた夕夜は、至近距離で、穂高を見つめたまま宣言した。

「この場所に良い思い出がないなんて言わせない。あたしが初めて自分から穂高にキスした場所。これでもう時計塔の下は良い思い出の場所になったわね」

「」

完全に意表を突かれた。

穂高は目を丸くして、今だ胸ぐらを掴んで離さない、意志の強そうな、自分の恋人の瞳を見た。途端、おかしさが込み上げてくる。

「ふっ…」

「なによ」

「おまえって、本当に飽きない奴」

「あんたがバカなこと言うからじゃない」

「…確かに、もうここに良い思い出がないなんて言えないな」

穂高は相好を崩して柔らかく笑う。

夕夜はその笑顔にきゅんと来たりしたのだが、悔しいから言ってやらないことにした。

「夕夜」

「なに？」

「覚悟できてるんだろっな？」

「は…、え、何の」

わけが分からず首を傾げる。

「昨日の、埋め合わせ」

「う、うめあわせ？」

どうしよう。なんか奢れとか言われるのだろうか。

「…金ならないわよ」

「違う」

「…じゃあ、何」

「今日の残りの時間はずっと俺の傍にいる」

「なっ…」

直球な穂高の言葉に面食らう。

「文句が？」

「う…ない、デス」

ていうか、穂高。

それって逆に、あたしへのプレゼントになっちゃうわよ？

「じゃあ、部屋行くか」

言うが早い、穂高は夕夜の手を取ると、スタスタとエレベーターに向かって歩く。

「ど、どっちの部屋？」

「俺の」

穂高は振り向くことさえせずに、静かに答えた。

穂高の部屋。

それだけでドキドキするのは何故だろう。

途中、エレベーターの中でまた昨日のキスを思い出して一人悶えたりしながら、夕夜は黙って穂高に手を引かれていた。

第二十九話 思い出にたくない。〈前編〉（後書き）

土曜日に更新します。



### 第三十話 思い出にいたくない。〈中編〉

「今日絵里さんは？」

「飲み会で遅くなるって」

「じゃあ邪魔は絶対入らないんだな」

「はあっ？」

穂高は晩ご飯の準備をしながら、まあ、あの人ならたとえ家にいても邪魔なんてしなさそうだけど、と思った。

「なにおまえ顔赤くしてんの」

「べべべつにしてない！」

「…いやらしい奴」

「どつちが！！！」

あの後穂高の方の家に入っすぐ、部屋着に着替えてキッチンにきた穂高は、さっさと晩ご飯を作り始めていた。といっても、まだ午後5時半だ。「早くない？」と聞く夕夜に「いーんだよこれで」と意味ありげに返し、ご飯作りを続行し、今に至る。

「あ、ねえ、それ…」

「ん？」

「その、はじつこのやつ。2、3個取っというて」

夕夜は焼き上がって皿に乗せられた餃子の端の方を指し示すとちよいちよい、とはじく仕草をした。

「は？何で」

「…朔眞の分」

「ああ？」

「だ、だって！届けなきゃお母さんに怒られるんだもん。穂高だっ  
ておととい、あたしが届けに家出るの見送ったじゃない。…ピンポ  
ンダッシュだったけどさ」

「それは分かるけど…今のタイミングで名前が出るのと、おととい  
のタイミングで名前が出るのとは天と地ほどの差があるだろ」

フライパンに水を適当に入れて、ジュワーツと大きな音がたった。  
…それもそうである。

「悪かったわね」

「素直にごめんといえないのか、おまえは。まあ期待しちやいないけど」

「じゃあ言うなよっ」

「てかさ？」

ドキッ。

ふざけ調子だった口調を一転、真剣なものに変えて、穂高は使い終わったフライパンを流しに置くと、カウンターの向こうから見学していた夕夜の方にくるりと振り返った。

「おまえ、まだあいつのこと朔眞って呼んでるんだ？」

「え…、だって一度呼ぶと癖になるし」

「そーだろーけど。…ああ、もう」

「…穂高？」

艶のある綺麗な黒髪を片手でぐしゃぐしゃとかき回して、はあ、とため息をついたあと、穂高は小さな声で呟いた。

「…嫌なんだよ」

「え？」

「嫌なんだよ。おまえが、自分以外の男を下の名前で呼んでるの。大野でさえ、名字呼びにさせてたのに」

チッ、と悔しそうに舌打ちをする。

「なにそれ…だからあの時名字でいって言ったわけ」

夕夜は、つい2日前栄理と大野智也と穂高と四人で遊びに行ったときのことを思い出していた。確かに、下の名前を呼び合おうした夕夜と智也を、穂高は妙な気迫で遮って「名字でいい」と言っていた。

あれは、そういうことだったのか。

「そうだよ」

「…ばかじゃないの」

「は？」

「…やきもち？」

きよとんとした目で問いかける夕夜に穂高は、慚然とした声音で答えた。

「くだらないやきもちだよ。悪いか」

そつぽを向いても、耳が赤くて笑いが込み上げる。  
か、可愛いなあ。

口に出して言っても怒られるから、黙ってるけど。

「ねえ穂高」

「…なに」

「たとえあたしが誰のことを名前で呼んでたって　好きなのは穂高たつた一人だからね」

「！」

首をかしげてほんの少し頬を染めて。カウンターに肘をついて穂高を上目遣いで見やる夕夜が、可愛いと思う。

「ばかやろ…」

穂高は片手で顔を覆って、ぎり、と唇を噛みしめた。その顔は真っ赤だ。

「え、なんでよ」

「　襲ってほしいのか、夕夜？」

「ちちち違うッ！！」

「じゃあおとなしくテーブルに座つとけ。…ほら」

言葉と共にカウンターにとんと置かれたのは二人分の茶碗と箸。それを夕夜はじいっと見つめて。

「え、えへへへへ」

「…なんだよ？」

「なんか…夫婦みたい」

「……………」

あ、あれ。あたしミスった？

「…や、今の忘れて下さ」

「結婚するか？」

「えっ!？」

「…そうしたらおまえと俺は家族関係になるから、向こうに行かなくて済むかもしれないし…」

穂高が寂しそうに笑う。

その笑顔を見ているのが苦しくて、夕夜はつい言ってしまった。

「してもいいよ。あたし、結婚」

「な…」

穂高が目を瞠った。けれどその一瞬後、額にわずかな痛み。穂高にデコピンをされたのである。

「うっ」

「…できるかばーか。圭吾さんが悲しむよ。それに俺、まだ17だし。おまえは女だから結婚できる歳だけど、男の俺は法律的に無理だな」

言いながら、冷めるから早く持ってけと餃子の皿もカウンターに追加される。

少しつまらない気持ちで夕夜は唇を突き出して皿を持ち上げる。

踵を返しテーブルに向かう夕夜の背中に、小さく声がかかった。

「できることなら今すぐ俺のものにしたいのに」

「…っ!」

ど、どういう意味？

夕夜は背中が熱くなるのが感じた。

「誕生日が同じって、やなもんだな」

あ、そっちな…。

自分一人の勘違いに、ガツクリと肩を落とす。

って、何シヨック受けてんのあたし!おかしいから!?

「おまえ何一人で百面相してんの?食うぞ」

「…はい」

そんなこんなで他愛のない話をして、夕食の時間が流れていった。

「あ、穂高、ここご飯粒ついてる」

「…どこ？」

「ここ」

夕夜は指でごく唇近くの頬を指し示した。

すると何を思ったのか穂高は一瞬黙る。次にニヤツと笑い

あ、嫌な予感！

「夕夜取ってよ？」

やっぱりいいい！

「じ、自分で取りなさいよっ」

「やだね。ほら、早く」

「うーっ…」

真っ赤な顔で夕夜は手を伸ばした。

「…だめ。手は使うな」

「はあ！？だったらどこで…」

「どこでって　□？」

「なっ！！無理よっ」

「何で」

「恥ずかしいじゃない！」

「ああ、じゃあ問題ないな。夕夜、頑張れ」

穂高は他人事のように告げてにこりと微笑んだ。

あ…ありえないありえないありえない！！これは悪魔の微笑みよ

！

「早く」

「…っ」

夕夜は椅子のうえに膝立ちし、テーブルに手をつくと前屈みになった。

黙って目を閉じて待っている穂高に顔を近付ける。

心臓がばくばくとうるさい。

肩からさらりと髪が零れ落ちた。

あと5センチ、3センチ…。

「　　っ」

夕夜は静かに、ついはむように、唇で穂高の頬　　といても  
ほとんど唇なのだが　　からご飯粒を舐め取った。

「…えろ」

「！！このS男ッ！」

「そうだけど、悪い？」

「むっ、むかつく…」

「ふ、はっ」

「笑ってんじゃないわよ！」

「あー悪い悪い。おまえおもしろすぎ」

く…っ、駄目だあたしこの笑顔に弱い。

付き合ってから、穂高は前より多く笑顔を見せてくれるようになった気がする。それが嬉しくて夕夜も口では怒っているながら、顔が自然と緩んでいた。

「ごちそうさま」

食べ終わった穂高が立ち上がる。

「あ、あたしも。ごちそうさまっ。ありがと穂高、おいしかった」

「あたりまえだろ。俺が作ったんだから」

「ハイハイそーでしたっ」

「ほらコレ」

「？」

「届けるんだろ？…隣の隣に」

そういえば！

うん、と皿を受け取って夕夜は玄関に向かった。

「早く来いよ。またピンポンダッシュでいい」

「りょーかい」

扉を開けて共同通路に出ると、夕夜は思わず「あっ」と声をあげた。

…朔眞がすぐそこにいたからだ。

「あ、高良さん。それ僕の？」

「そ、そうだけど」

ビク、と反射で身を退きながら夕夜は答えた。

た、高良さん……？この前までは夕夜ちゃん、だったくせに。

「あんた何してんの」

「えー何って……僕いま帰ってきたところだしー」

朔眞はいつもの笑顔でへらつと笑った。言われてみれば学生服だし鞆を持ってるし、その言葉は事実のようだった。

忘れていたけどまだ6時だ。遊んで帰ってきてもおかしくない時間だろう。自分たちが早いのだ。

「はい。じゃあね」

納得したところで手早く皿を渡すと、夕夜は踵を返した。

「待って」

「……なに？」

「もういいからねー」

「はい？」

「……晚ご飯。差し入れは今日で最後」

「はあ？なんでよ」

「……いなくなるから」

「……え？」

「……つて、あんたが？」

「そー、明日」

朔眞が何でも無いことのようにさらりと言う。まるで、初めから決まっていたかのようだ。

「……随分急なのね。あたしより一日早いじゃない」

「まあねー。君は穂高くんとうまくやんなよ。くつついたの僕が君にキスした後でしょー」

「……だから？」

「……いやいや、最後の悪あがきが決定打になったかなつ、てねー？」

「……はあ？」

意味が分からず夕夜は眉根を寄せる。

「気にしないでっ。穂高くん待つてるよ？早く行ったら？」

朔眞は夕夜が今出てきたところが夕夜自身の家ではなく、穂高の家だと分かっていた。

きつと彼はやきもきしながら待っているだろう。

ニコニコしている朔眞を不気味に思いながら、夕夜は素直に戻るのだった。

「遅かったな？」

穂高はリビングのソファ―に座って待っていた。

「なんか…朔眞に会っちゃた」

「は！？」

がばつと立ち上がって夕夜を見る。

「あ！だいじょぶだよなんもされてない」

夕夜は慌てて手のひらを見せて、パタパタと横に振った。

穂高がほーっと息をつく。よほど心配していたようだ。

「で、何て」

「明日いなくなるって」

「…あ？どこに」

「それは聞いてない。なんか分かんないけど、だからもう差し入れ  
いらないよって言われた」

「……………」

「穂高？」

「…そうか。俺、風呂入る」

「ふえっ？」

いきなりの言葉に夕夜は変な声が出してしまった。

おおおお風呂！

「…おまえ反応でかすぎだから」

「だ、だつてえ」

「…一緒に入りたい？」

「はあ！？」

夕夜は首まで朱に染まる。



穂高のことを男なのだと初めて意識したあの夜にも、お風呂がどうのこうのは言われたけれど。あの時とは明らかに違うドキドキが夕夜を支配していた。

そんな夕夜を気にも留めず、穂高はさくさくと話を進めていく。

「ふ、冗談。やっぱおまえ先に入る？そっちの方がいいだろ」

「そ、そりゃまあ」

「じゃどーぞ。着替え、適当に置いとくから。30分で上がれよ？」

「分かってるわよ」

彼女が長風呂なのを承知したうえで穂高は言った。

「夕夜」

「んー？」

もう風呂場に向かっていた夕夜は、足を止めて首だけリビングに覗かせる。

「綺麗に洗っとけ？」

「う、うっさいわ！セクハラだっつーのッ」

上がってみると、脱衣所に置かれていたのはただの白いTシャツとスウェットだった。

な、なにこれ。完全に泊まり態勢？

とりあえず着てみる。また制服になるのだけは嫌だった。

「……………」

ぶかぶかである。

上はまだしも下はひどかった。

…そうだった、あいつは足が長いんだ。

ウエストだって合わなくて、履いても履いてもずり落ちる。これでは履いてる意味が無い。

「……………」

夕夜は黙考した。考えた末出した結論は　。

「ねえ、あんたコレ一種の嫌がらせ？」

「ぶっ！！」

風呂上がり、穂高の部屋に来た夕夜はＴシャツ一枚だった。

いや、実際は制服のときスカートの下に履いていたスパッツも身につけていたのだが、Ｔシャツが大きいせいで何も履いていないように見えたのだ。

「おま…、スウェットは」

「でかすぎて履いてらんないわよあんなの。足の長さを考慮しなさいよね、あ・し・の・な・が・さ・を！」

噛みしめるように言って、夕夜は手に持っていたスウェットをビシビシと指差した。

「…そりゃ、悪かったよ。けど…」  
「けど、何よ」

その格好はないだろ！？おまえこそ俺に対する嫌がらせかよ！！

穂高は痛切な叫びを心の中でどうにか抑えた。

「な、なんでもねーよ…俺も風呂入ってくる」

「？いつてらっしゃい…」

夕夜は頭のうえにクエスチョンマークを浮かべたまま、穂高を見送るのだった。

「はあ…」

穂高は頭からシャワーを浴びながら唇を噛みしめた。

今日、俺はあの無自覚小悪魔野郎に勝てるのか？

…自信がない。

でも、我慢しなければならぬ。それが夕夜の為でもあるし、自分の為であるとも思った。

穂高は頭を一つ振るとシャンプーを手に取り、わしわしと頭を洗い始めた。

部屋に残った夕夜が、何を考えているのかも知らずに。

第三十話 思い出にたくない。〈中編〉（後書き）

次回後編。この3回はとにかくいちゃつかせようと画策している作者です。笑

第三十一話 思い出にたくない。〈後編〉（前書き）

土曜日だったので更新します。

### 第三十一話 思い出にしたくない。〈後編〉

穂高が部屋に戻ると、夕夜はベッドを背もたれにして小学校時代のアルバムを見ていた。

「あ、おかえりー」

「…おまえそれどこから出したの」

「え？…ベッドの下から」

あっけらかんと答える。

「なぜベッドの下を探す」

「いやいや、ほらー、アレがあるかなってね、…アレが。そしたらコレが出てきてさ」

「ふざけんなっ」

穂高は夕夜のそばに歩み寄るとアルバムを奪い取り、ゴンツと軽く頭にげんこつを落とした。

「いったー!!」

「おまえが悪い。そこに直れ」

「…ふーんだ」

夕夜はベッドのうえに正座した。

穂高もそれに向き合って座る。反動でギシッとベッドのスプリングが鳴った。

「おまえはもう少し女の憤みというものを知れ。彼女が彼氏のエロ本なんて探すな」

「だめなの？」

「べつにだめとは言わないけど…おまえ見つけた場合嬉しいの」

「…うーん…、嬉しさ半分悲しさ半分？」

夕夜は首をひねる。

「…とにかく。この行動もそうだけど、その格好も何なんだ。下がはけないにしたりして他に方法あるだろ。…挑発してんの？」

穂高は険しい顔をする。

「むっ、何よ。じゃああたしだって言うけどね。なんで完全に泊まりモードになっちゃってんのよ？…風呂上がりはこの服用意したのはそっちでしょー」

ぷくつと頬を膨らまして夕夜は反論した。

穂高はうつ、と言葉に詰まる。

「服は…、楽なほうが良いかと思って」

「だからって風呂にまで入ってあと寝るだけみたいになってるしー。まだ7時だよ？…えろなのはどっちよ」

夕夜は穂高を見ながら言った。彼は言い返してこない。

やった！口で穂高に勝った！！

と、夕夜は全く関係の無いところで、心中喜んでいたところ。

「…むかつく」

「え？ ふわッ」

視界反転。

さっきまで穂高の顔の後ろには、部屋の壁がいつぱいに映っていたのに。

…今は、彼の顔の後ろは、天井の模様でいつぱいになっていた。

「悪かったなエロくて。…そうさせてるのは夕夜だよ。晚饭早く食べたのだからおまえと二人で話す時間を長く取りたかったら」

「え、えっ」

そうなの？てか、穂高がエロくなるのもあたしのせいなの？

「言えよ。なんで昨日急に高橋さんとこ行った？…約束してたなんて嘘。俺を騙せたなんて思ってないんだろ」

「……っ」

確かに、自分の下手な演技で彼が騙されたとは思っていなかった。けれどもまさか、こんな形で問い詰められようとは。

自分の顔の横に、穂高の手の平が置かれている。

腕の長さ分だけ離れたその先に、彼の整っている顔があった。

「な…」

「な？」

「泣くと思ったから」

「…誰が」

「あたしが」

「…それだけ？」

「それだけ！？だつて、重要なことでしょ！？あたしが泣いて行きたくないつつたつて穂高にはどうしようもできないの分かつてるし、でもやつぱり離れたくないし。そう考えたら泣いちゃいそうだなと思つたのよ…」

あ、だめ。今でまた泣きそう。

夕夜は唇を噛みしめ、ぐっと力を入れて嗚咽をこらえた。

穂高は何も言わない。

あたしに呆れた？ねえ、お願いだから何か言つてよ。

「泣いたらいいよ」

「…え？」

ところが、真上から降つて来たのは思いがけない言葉で。

夕夜は目を丸くする。

「…泣けつて。俺、前にも何度か言おうと思つてたんだ。おまえは何でも一人で我慢しすぎる。もつと俺を頼れよ。何の為に隣にいて思つてるの」

そつと夕夜の頬に手を当てると、優しく笑う。

ゆつくり夕夜の上から退けたあと、よつ、と声を出して横たわつていた夕夜も起こしてやる。

「まだ子供だ。さすがにロス行き止めるなんてことはできないけど、子供だから泣いて嫌だつて言うこともできると思う。今がそのチャンスなんじゃない？」

ほん、と頭のうえに穂高の大きな手の平が置かれる。

夕夜は涙腺が緩むのを感じていた。鼻の奥がツンとする。

「だ、だつてえ」

「ん？」

「嫌なんだもん。なつ、涙なんて見せたくないのー！」

「だからどーして」

「女の武器使ってるみたいで嫌なの。あたしはあたしでいたいのに。それに、泣いたら負けたみたいで悔しいじゃない」

もう半泣きの状態で、それでも我慢しながら夕夜は心の内を明かした。

その言葉を聞いて、穂高は思わずふつと笑ってしまう。

「おまえがそんな器用な奴じゃないって、分かってるよ。何年一緒にいると思ってるの」

「…っ」

「ほら。泣かなくていいのかよ？」

穂高が目尻にたまった涙を指で拭う。

「…ふん、もう引っ込みましたっ」

照れ隠しに視線を逸らし、夕夜は慚然とした声で告げるのであった。

「…あ、そういえば」

「ん？」

夕夜はいきなり思いついたかのようにポンと手を打ち鳴らすと、ちよつと待っててと言って自分の家へ戻っていった。

「うわああああっ」

「！？」

夕夜が入ったであろう隣の家から、直後、叫び声が聞こえる。

何かあったのだろうか。

「おかーさんっ」

え？…絵里さんが帰ってきてたのか。

微妙に緊張するが、大丈夫、夕夜には何もしていない。

穂高は息をつく。

隣が静かになってから数分後、夕夜が疲れた顔で穂高の部屋に戻ってきた。

「絵里さん、帰ってきてただろ。何か言われた？」



「…ううん、なにも」

ただ、意味ありげな含み笑いで頭のとっぺんから爪先までじろーつと見られたあと、「ふーん…あんたもとうとうねえ」と、言われたのだが、穂高には黙っておくことにする夕夜であった。

「そう？…座れば」

穂高がベッドに腰掛けて、ポンと自分の隣をたたく。

「あ、うん」

夕夜はおとなしく座った。

「で、それ何？まさかそれ取りに戻ってたわけ」

…忘れていたけれどそうだった。

夕夜は手元にある、禍々しい熊のぬいぐるみを見て大きくうん、と頷いた。

「これ、あげる」

「…はい？」

「だから、あげるつてば」

ずいっと目の前に突き出されたそれを、穂高は微妙な心境で受け取る。

「それ…この間おまえがまぐれでとったあの熊だよな」

「そーよ」

忘れもしない、恐ろしい形相をしたこのぬいぐるみ。夕夜が必死になって『自分で取らなきゃ意味ないの！』と豪語していたあの UFO キャッチャーの。

なぜ、これを今自分に？

「…あたしだと思ってね」

「…は？」

「これからあんたのそばにはずっとその熊がいるから。だから寂しがんなよつ、穂高」

「…はああああ？」

穂高は目の前にいる夕夜と、手元の熊を見比べて思い切り首を傾げた。

意図は分かった。分かったのだけれど。

「…なんでこれ？ぬいぐるみ置いてくにしたって、もう少しマシなのがあるだろ」

そう尋ねる穂高に、夕夜は「チ、チ、チ」と人差し指を左右に揺らす。

「仮に、可ツツツ愛らしいぬいぐるみ置いていったとして、あんたそれからあたし連想できる？」

「……………」

「ほらね、できないでしょ。だからこれなのよ。この方が何倍もあたらしいでしょ」

夕夜は齒見せてをにっと笑った。

まったく…適わないな、こいつには。

「ああ、ほんと、納得したよ」

「えへへー」

「…夕夜、会いに行くから」

「へ？」

いきなり真剣な顔になって言う穂高に、夕夜の胸が大きくひとつどくと鳴った。

「だからおまえもあつちで外国人かつこいーとかいって、他の男に乗り換えるなよ」

「あたりまえでしょ。あたしを誰だと思ってんの」

「ははっ、さすが」

言葉と同時に、穂高がちゅつと軽く触れるだけのキスをした。

「っ、ちよつと！そーゆー不意打ちやめてよね？」

文句を言いながら夕夜は、あたし齒磨きしたよね！？うん、大丈夫なはず！と心の中で再確認。

…色々言いながら結局は嫌じゃないのである。

「つまり、不意打ちじゃなければいいんだな？」

「は！？」

「夕夜。今からキスするから？」

「なっ…、ふっ」

反論の声は虚しく、唇によって塞がれた。

そっ、そういう意味じゃないってばー！

どんどん、と彼の胸をたたいても、微動だにしない。

触れるだけのキスを、角度を変えて幾度もされた。

「はっ…」

ようやく離してくれたと思えば、そっと肩を押されてベッドに押し倒されて。

「ほ、穂高！」

「ん？」

「そ、その、あのね」

「…何だよ」

答えながら、動きを止めることなく頬へ、耳へと唇を移動させた。

「言っておきたいことがあるの…っ、んくっ、ひゃあ！」

耳を舐められて、そのうえ耳朶を甘噛みされる。

夕夜はびくんと大きくはねた。

「おまえ、反応大きいんだよ」

「あっ、だ、だってえ」

「安心しろって。…最後までするつもりないから」

「…っ」

あたりまえよ！ばかじゃないの！？

…そう返されるつもりで言った言葉だったのに、彼女から出た言葉は予想を裏切っていた。

「何で…？」

「…え？」

「あたし、さっきお母さんに今日は泊まってくるって言ってきたんだよ？」

「えー！？」

「えー！？はこっちの台詞よっ、ばかっ。…っ、ふっ、うわぁーん」

「ゆ、夕夜？」

言葉の途中で、夕夜は泣き始めた。

いくつもの涙の粒が目尻からこぼれ落ちて、シーツに染みを作っていく。

穂高はどうしていいか分からず、ただおろおろとするばかりであった。

なんで泣くのか全くもって分からない。

すると、夕夜が胸の内を明かした。

「穂高は、寂しくないの？」

「…寂しいに決まってる」

「じゃあなおさら何で？あたしは…あたしは、何か支えになるものが欲しくて。いくら言葉で約束したって、やっぱり不安だよ」

「夕夜…」

「穂高はあたしのものだって、あたしは穂高のものだって。…そう、実感できる保障とか、形が欲しいよ」

「……………」

「そう思うのは、いけないこと？」

夕夜が、涙で濡れた瞳で穂高を見上げた。

ここを発つ前に、どうしても穂高とひとつになりたかった。

そうすれば、向こうでも頑張れる。そう、思ったから。

「…穂高がお風呂に入ってる間、ずっと考えてたの。どうすれば、そう実感できるかなって。だから、だから、あのね」

「待って」

夕夜の言葉を、穂高がか細い声で遮った。

「それって、つまり…。最後までしていいってこと？」

「うん」

揺らがない瞳で、はっきりと夕夜は答えた。

「……………」

「…穂高？」

「ばかだよ、おまえ。…ばかだ」

そう言う穂高の表情は、どこか苦しそうで泣きそうで。けれどやっぱり、優しく、優しく笑ってた。

「ばかでも、いいよ。穂高があたしを愛してくれるなら、どんなにかだっていい。」

そして二人は、また唇を重ね合った。

もう、触れるだけではない深い深いキス。

「あっ、穂高。」

「っ、喋るなって夕夜。舌、噛むぞ？」

「……!!」

なにこれ、なにこれ。あたまがおかしくなりそう。

部屋に、二人の吐息だけが響く。

エレベーターでしたのよりも、もっと深くて激しくて、それでいてやさしい。そんな、キスだった。

「ふぁ……」

いつの間にそうしたのだろう。穂高の右手が、裾の長いＴシャツをめくって夕夜の服のなかに滑り込んでいた。

おなか辺りを触れられて、思わずびくっと身体が揺れる。

中途半端な意識の中で、夕夜は思った。

終わらせたくない、終わらせたくない、このまま時が止まって欲しい。。

どうして離れなきゃいけないの？

こんなに好きなのに。

どうしてこの時間を思い出にしなければいけないの？

こんなに幸せなのに。

思い出になんか、したくないよ。！！

「……夕夜？」

穂高が、異変に気づいて動きを止めた。

夕夜がかすかに震えている気がして。

「……っ」

暗闇のなか目を凝らしてみると。彼女は声を押し殺して、音

もなく、ただ静かに泣いていた。

第三十一話 思い出にたくない。〈後編〉（後書き）

というわけで、ひたすらいちゃつかせよう企画は作者の中では成功ものたりねーよっ、て方。これ以上書くと小説がR18化してしまいます（笑）ところで私、毎月月末と月初めはケータイが使えません。なので恐らく土曜更新2・3回止まるかと思われます。申し訳ございませんm（――）mでも話はきちんと書き溜めるので、復活した週の土曜にはまとめてUPしたいと思っています。しばしお待ちを…。

### 第三十二話　ありえないネタばらし（前書き）

幸運なことに今月は携帯の復活が早かったです



### 第三十二話　ありえないネタばらし

最初、やっぱり嫌になって泣いているのかと思った。

けれど、口から小さく漏れる言葉を拾うとそうではない気がして。

「夕夜…」

名前を呼んで、頭を撫でた。夕夜が小さく、蚊の鳴くような声で何事かを告げる。

「…穂高、あたし行きたくない…」

「」

「今、こんなに幸せなのに。穂高とのこんな時間が全部思い出になっちゃうのかと思うと、辛くて仕方ない」

思い出とは、すなわち過去のことを指す。

穂高が過去のひとになる？そんなの、ありえない。

生まれてから今まで、ずっと一緒だった。ケンカもしてきたけれど、どうせ本気で縁が切れることはないって。…距離ができるはずはないって、そう信じてた。

だけど明日から、自分たちはその距離に苦しめられることになる。耐えられるはずがない。

「思い出にしたくない…思い出になんか、したくないよ。穂高とあたしは、いつだって隣を歩くはずなんだからっ…」

結局あたしは　泣いて彼を困らせた。

手のひらで顔を覆いながら、夕夜は自己嫌悪した。

ああほら…穂高が苦い顔してる。あたしはどこまで、自分勝手な女なんだろう。

「過去になんかせないから」

「え…？」

「だから、夕夜。やっぱり最後までできない」

夕夜は顔を上げる。

「…どういうこと？」

「だって、最後までするとその先がないだろ。ここからは、おまえがこっちに帰ってきたときに取っとく」

そう言くと穂高は、夕夜の乱れた服を直してやって、自分もベッドから降りて、最後に夕夜も降ろして立たせた。

「穂高…？」

「そうすると、過去のひとにならないだろ。事実上、俺たちの関係は『現在進行形』だ」

「そ、そっか…うん」

「言っとくけど、それ目的じゃないから？あくまでも形づけるため」  
穂高は、少しだけ恥ずかしそうに、ぶっきらぼうにそう告げた。

「…そっか。あはは、うん。頑張るよ」

「…俺も、ばかだったよ」

「？」

「夕夜に子どもらしく泣いとけって言っというて 自分は子どもらしく悪あがきさえしてないんだから」

にっと笑った穂高を見て、夕夜は何をするんだろうと思った。

彼がこっという顔をするときはいつも 何か行動を起こす前なのだ。

「いくぞ、夕夜」

穂高が夕夜の手を取り玄関に向かう。

「ど、どこへ」

「決まってるだろ。 絵里さんのところ」

「…！」

夕夜は目を見開いた。

「とりあえず、制服のスカート履いてこい。それから行くぞ」  
「わ、分かった」

三十秒と経たないうちに、二人は絵里がいる居間へと足を踏み入

れていた。

「あら、夕夜に穂高くん」

彼女は別段驚くでもなく、視線を二人に向ける。

「どうしたの？」

「絵里さん…やっぱり俺、こいつ口スになんか行かせたくありません」

「…え？」

いきなりの穂高の宣言に絵里は目を丸くする。

「…無理を承知で言ってるのは分かってるんです。でも、それでも俺は離れたくないから」

穂高は拳を握りしめて、それでも絵里から視線を逸らすことなくそう言い切った。

「穂高くん…」

「夕夜の引越し、取り止めにして下さい。お願いします」

「いいわよ？」

「はっ？」

…ハモツた。

「やめればいいのよね。やっと言ってくれたわー。そう言われるのずっと待ってたのよー。この嘘つくのも最近飽き…ゴホン、疲れたのよねえ」

飄々と絵里が言う。

「……………う、うそ？」

「そう。嘘。あー、やっとネタばらしできる。あんたち、ちょっとあたしの部屋見てらっしゃい？」

事態は飲み込めないが、言われるままに二人は絵里の部屋へ向かった。

扉を開ける。

「…なにこれ…お母さん、全然荷造りしてないじゃない！」  
すると、どうだ。

絵里の部屋は、明日引越したというのに以前のまま、全く何も

変わっていなかったのだ。

鏡台に並べられた数々の化粧品も、本棚に乱雑に置かれた沢山の雑誌も、床に脱ぎ散らかされた大量の服も。

以前と、なにも変わらない。

「じゃあやっぱり…初めから引越する気なんてなかったってこと？」

「あつたりー」

「うわぁ！」

いつの間にか、二人の後ろに絵里は立っていた。

「どーゆーことよ!？」

夕夜は絵里に詰め寄る。きちんと説明しろと、言外に告げた。

「だから…そーゆーことよ。ネタばらしはリビングでしましょうか」スキップで移動する彼女に対して、二人はまだまだついていけない頭のままゆっくり歩く。

ソファーに座った絵里が、向かいに座るように指示を出したから、夕夜と穂高もソファーに座った。

「まず、そうね。引越しのことだけど…それ自体が真つ赤な嘘なの。ロスに行く予定なんて、これっぽっちもないわ」

「はぁ!？」

「まあまあ、夕夜落ち着いて」

落ち着いて?　これが落ち着いていられるか!

「だってお父さんの話は!! すっかり信じてる栄理やクラスメイトへの対処は!! 担任だってあたしがいなくなると信じて疑ってなかったわよ!？」

「お父さんの話も私のねつ造。あのノートタッチだもの。まあ、栄理ちゃんやクラスメイトへは、『行かなくてよくなった』って言えばいいわ。あと…担任の先生には、私がもう電話で説明済み。どう? 平気でしょ」

さも当然とばかりに彼女はにっこりと笑う。

夕夜は目眩を覚えた。

じゃあ、あたしたちの苦勞は？

あの涙を返してよ！

「意味分かんないよ！！　　なんのためにそんな嘘ついたの！？」

「ええ」

絵里は眉尻を下げて意味不明な声を出す。

まるで　　言わなきゃだめ？と訴えるように。

「絵里さん…できれば俺も理由知りたいんですけど」

今まで黙っていた穂高が、遠慮がちに口をはさんだ。

「んんゝそうねえゝ……言っても怒らない？」

絵里がちらつと夕夜に視線を向ける。

「事と次第によつては」

「夕夜こわあーい」

「いいから！早く！」

絵里が潮時ね、とかなんとかひとりごちて、その理由を明かした。

「…くつついて欲しかったから？」

「　　は？」

くつついて欲しかったから？

何と何に。

誰と誰が。

…いや、そんなの聞かなくてもすでに分かっている。

「俺と…夕夜にですか」

穂高が呆れたように、

実際、呆れているのだろう

た

め息と共に尋ねた。

「まあ、それしかないわよね。だって、そうでもしないとあんたたち一生そのままいそうで心配になったんだもの」

「…だからってロサンゼルスはひどいんじゃないんですか？…規模が大きすぎる」

「だって隣町とかよりも断然信憑性あるじゃない。事実お父さんが単身赴任してるしー、行くならそこかなって思ったのよ」

「そりゃそうですけど…夕夜？」

ふと、彼女が会話に入ってこないことに違和感を覚え、隣に座る夕夜の顔を見つめる。

彼女は、作った握りこぶしを膝の上に置いて、ふるふると震えていた。

あ、やばい。また泣く？

…と、穂高が思ったのも束の間。瞬間、いきなりソファからすごい勢いで立ち上がると、

「ありえないッッ!!」

と絶叫して、夕夜は自分の部屋に駆け込んでいったのだった。

「……………怒っちゃったわね」

「ああまあ…そうなるでしょうね」

穂高は夕夜が消えた方角を見つめ、嘆息した。

「でもあれ…それだけじゃないと思いますけどね」

「…どういうこと？」

聞いた絵里の言葉に対して、穂高はふつと笑った。その笑顔は、何かイタズラをしかけて、でも何をしたかは教えない。そ

んな笑顔だった。

「すみません。…ちょっと、言えないです。それから、俺はロス行きが嘘で良かったと心底思ってますよ？」

言いながら、もう夕夜の部屋へ歩きだしていて、絵里はひとりりビングに残されていた。

「…皆大人になっていくのねえ」

何があつたのかは知る由もないが、絵里はなんとなくそう感じて、思ったことそのままを口に出しているのだった。

一方、夕夜の部屋。

「ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない

…」

夕夜はただ一つ、荷造りされずに残されていたベッドに潜り込むと、掛け布団を頭からかぶってぶつぶつと繰り返していた。

「ありえない、ありえない、ありえない……！」

「何がそんなにありえないんだよ？」

「うわあああああ」

一人の世界に入っていたはずが、いきなり目の前に穂高の顔があらわれて、夕夜は奇声を発していた。

どうやら、部屋に入ってきて布団もめくっていたらしい。そんなことに気づく余裕さえなかった。

「すっかり部屋片付けちゃってるな。……夕夜、大丈夫か？」

穂高が、夕夜の目を覗き込むように首をかしげていた。

「……………」

でも、恥ずかしくて彼の顔が見られない。だってだって、この行動の理由は……。

「あんまり絵里さんに怒りすぎるなよ？」

「……っ」

「……聞いてる？」

「違うよっ」

とつさに、布団をはねのけてベッドの上に立っていた。

あたしが言いたいのは、そんなことじゃない。

穂高が、分かりにくいけどびくりした顔をしている。

「あたしが怒ってるの、お母さんにじゃない！そりゃあちよつとひどいとは思ってるけど、嘘で良かったって……そう、思ってるもん！ただあたしは……」

そこまで一息でまくしたてると、それまでの勢いが嘘かのように、夕夜はベッドに静かに座り込んだ。

「あたしは……」

「そうだな。俺はむしろ感謝してるよ、絵里さんに。だって……」  
ベッドの上に座る夕夜と、床に座ってベッドに頬杖をつく穂高。  
普段とは視線が逆の状況に、知らずに胸がドクンとひとつ脈打った。

「そうじゃなきゃ、夕夜に迫ってもらうなんてこと、ありえなかつ

「たもんな？」

穂高はにやつと笑って「だろ？」と言った。

「っ！」

「ああ、っと首まで赤くなるのが分かる。

ああもう……こいつには全部お見通しだ。

そうなのだ。夕夜は、恥ずかしかった。それとともに、つい一時間前の自分の行動を激しく後悔していたのだ。

絵里の嘘に乘せられて、まんまと誘いを申し出た自分。ほんとに、ありえないくらい浅はかで、恥ずかしい。

あの時出した勇気とか、近くで感じた穂高の体温とか。

そういうものがしつかりと頭にこびりついて離れないし、その瞬間が、嘘に煽られて生まれたことなのだと思うと、恥ずかしいやら悲しいやら情けないやらで、どうにも収まりがつかないのであった。「そんな泣きそうな顔するなよ。俺は夕夜がああ言ってくれて嬉しかったし」

「……………ほんと？」

「ああ」

「あたしのこと、痴女だっと思ってんじゃないでしょうね」

「ぶつ。思ってないから」

「……じゃあ、いいや。あたしも、変わらずここに居られることが嬉しいのは、事実だし」

「そうだな」

そうして二人は、笑った。

数週間まえ、突然引越し宣告されて。それを隠して穂高と喧嘩して。穂高のイタズラで、彼のことを『男』なんだと認識して、意識して。仲直りしたと思ったら今度は変な転校生に色々絡まれて。でも、そのおかげで自分の気持ちに気づいて、そうして、幼なじみから恋人同士になった。

それからの数日間は怒涛のような日々だったけれど、周囲の人たちの暖かさに触れることができた。



穂高との距離も、近づいた。

振り返れば、そんなに悪いことばかりじゃなかったかな、と夕夜は思う。

時刻は十時を廻っていて、四角く切り取られた窓に、絵画のように美しく満月がかかっていた。

穂高はひとり、あの時と同じだと、くすつと笑う。

「何？」

「いや、なんでも？」

そうして、きょんとしている夕夜の肩を引き寄せて、静かに唇を重ね合わせた。

「また、ふいうち……」

何も答えず、穂高はただ笑う。以前、満月の下で初めて夕夜にキスをした夜。今夜の月がそれを彷彿とさせて、こんな行動を起こしてしまったのだ。でもそれは、自分だけの秘密。

ゆるやかな空気が流れる中で、夕夜が「あ、そうだ」と声を出す。

「ん？」

「穂高、頼みがあるんだけど」

「……なに」

「明日、荷ほどき手伝って」

「……………」

5秒間は沈黙が流れた。

### 第三十三話 朔眞の正体 - 1 - (前書き)

今回、何度直しても機会が受け付けず、変なところで行替えになつて場所が二ヶ所あります。∴ スルーしていただけたらうれしいです。

### 第三十三話 朔眞の正体 - 1 -

一夜明けて、土曜日の朝。本当ならば今頃は荷物の積み込みや挨拶回りで忙しかったはずなのに、どうして自分は絵里と二人、ゆっくりと朝ごはんを咀嚼しているのだろう。

引っ越しが嘘だったことを喜びながらも、やっぱりどこか腑に落ちない夕夜であった。

昨夜。

結局あれから、二人はそれぞれの家でいつもどおりに寝ることになった。絵里は夕夜に「穂高くんちに泊まってきてもいいのよ」と言っただけけれど、それは両者ともに拒否した。

だって、キスより先のことをしようとした後で一旦頭が冷静になってしまったら、それ以降、二人きりになっても気まづくなるのは目に見えていたから。

しかも引っ越しが嘘だった以上、今キス以上のことをする理由も、勇気も、度胸も、全部全部消え失せてしまった。

箸をくわえたまま、知らず知らずのうちに、はあとため息をつく。残念だと思っっている自分がいる。

夕夜はそのことに、戸惑いを隠せなかった。

「ねえ夕夜、もう怒ってないー？」

向かいの席に座る絵里が、ばつが悪そうに聞いてくる。

「…初めから、怒ってないってば」

「嘘！だって、目つきが怖いもの」

「気のせいだよ」

「そうかしら…。でも夕夜、あたしの嘘のおかげでちょっとは穂高ちゃんと進展あったでしょ？」

さっきまでのしおらしさはどこへやら。

絵里は目を爛々と輝かせて野次馬よろしく、夕夜に鋭く切り込んでいった。

う、とどもる。

「いいわよ答えなくて。あんたの顔見てれば分かるわー。ああ楽しい…」

箸を置いて手を祈るように胸の前で組んで。

絵里は、恍惚の表情になっていた。

楽しいってどういうことよ！

我が母ながら、気持ち悪い。

夕夜は食事のピッチを上げた。

「いやあでも…朔ちゃんも良い働きしたわよねえ」

は？サクチャン？

聞き捨てならぬ単語が耳に届いて、夕夜は眉をひそめる。

いや、まさか、そんな。

…そんなわけないわよね。うん、ないない。

現実を受け入れられなくて、自己完結させた。

夕夜は止まっていた箸の動きを再開させ…ようとしたのだが。

「ねえ、夕夜。世界は意外と狭いものよ」

絵里の声が、それを許してくれなかった。

やだ。やめて。聞きたくない。

「朔ちゃんっていうのは」

見ざる言わざる聞かざるー！あたし、聞かないんだからね！

しかし、夕夜の願いは届くはずもなく。

「察しの通り、木原朔眞くん。彼も今回の『夕夜と穂高ラブラブカ  
ツプル大作戦！』の協力者の一人よ」

「はい？」

なんだか今、それはそれは薄ら寒い、聞いてはならない単語を聞いてしまったような。

夕夜は耳を疑った。

「その気色悪い作戦名に突っ込みたいのは山々だけど…、それよりも、つまり朔眞がうちの学校に転校してきたのは偶然じゃないってこと？」

「そうよ。そもそもこれはね、私が立てた計画じゃないの」

絵里がいたずらっ子のように、目を細めた。

絵里がたてた計画じゃない？

「じゃあ、誰が」

「ふふ、誰だと思うー」 絶妙のタイミングの問いかけに、夕夜

には一人だけ、うつすらと頭に浮かんだ人物がいた。

いや、でもまさか…まさかね。

けれど、考えれば考えるほどにその線の推測は色濃くなる気がして、夕夜は信じられない思いだった。

だって、どう考えてもあの人しかないのだ。このとんでもない母と、くだらない 彼女『たち』にしてみればくだらなくないてないのだろうが 作戦を画策して、それを実行する人物。

「あのさあ…全身全霊で信じたくはないんだけど」

「うんうん」

この余裕綽々とした感じが癪に触る。だけどここは、はつきりさせるしかない。

「…もしかして、穂高ママ？」

「ピンポン！そう、麗ちゃん」

「ありえないんだけど…」

食欲など消え失せて、夕夜は箸を置いた。

頭がずきずきする。

でも同時に、納得もしてしまうのだ。だって、絵里と麗子、二人は昔から何かと夕夜と穂高をくつつけたがっていたから。

いや、厳密に言えば絵里より断然麗子の押しが強かった。絵里は、言葉では穂高とくつついてほしそうでも、常に夕夜には

「ほんとうに好きな人と付き合っていていいんだからね」と、再三言ってくれていた。ただ夕夜はそっち方面にはてんで無頓着で、それこそつい最近

「好き」という気持ちを知ったから、今までそういう人ができたことがなかったのである。

それに、たとえ恋愛をしていたとしても、その相手はやっぱり穂高だと思うのだ。「それで…何で朔眞と穂高ママとお母さんが知り合いなわけ。…理解できないんですけど？」

絵里を責めることはやめて、純粹に疑問をぶつけた。だって、絵里はどうせ押し強い麗子にたきつけられて、勢いのまま気分とデシヨンだけでここまでやったのだろぅことが、手に取るように分かるから。

「それはね…んー、私の口から言っただけのことじゃないわ。

朔ちゃんと麗ちゃんが、いいと思ったならいずれ話してくれるわよ」

「いずれ…」

絵里の言葉を反芻しながら、夕夜は昨日の朔眞との会話を脳裏に描いていた。

晩ご飯。差し入れは今日で最後。

はあ？なんでよ

いなくなるから。

ってあんたが？

そー、明日。

そしてその瞬間、夕夜は椅子から立ち上がる。

「だめだ！お母さん、今日ね、朔眞いなくなる日なの！」

「ええ？」

「しかも何時に行くかとか全然分かんない。だからあたし、今行ってくるね」

とるものもとらずに、夕夜は玄関へ向かった。

サンダルをつっかけて、家を出る。

「朔眞！朔眞！」

二度三度インターホンを押しても何の応答もなかったから、夕夜は扉をどんと叩いて叫んだ。

「夕夜？」

「穂高…」

出てきたのは、反対隣の穂高だった。騒ぎを察して様子を伺いに

来たようで、扉から半身だけをこちらに覗かせている。

「何してんのおまえ」

「あ…」

一言では説明できない。

煮え切らない夕夜の様子に、穂高は今度こそしつかり身体を出して夕夜の元に歩み寄ってきた。

「木原に用？」

「うん…あの、信じられないかもしれないけどさ？」

「なに」

「その…朔眞が、偶然じゃなくて故意的にあたしたちに近づいてきてたとしたら、どうする」

「…は？」

夕夜からの突拍子もない質問に、穂高は眉を寄せた。

夕夜はいきなり何を言っているのだろう？根拠もないただの憶測？けれども、目は口ほどにものを言うというか。

今の夕夜の瞳は、嘘などではなくて、本当に狼狽の色を湛えているように見えた。

「し、しかもね？その、穂高ママが」

「」

「母さん？」

彼女が、どうかしたのかと。

問い返そうとした、その時。

「高良さん？」

今までうんともすんとも言わなかった厚い扉の向こう、ガチャリとドアノブを回す音がして、そこには朔眞がいたのだった。

「どーしたの？」

よっしゃ、まだいた！

夕夜は心の中でガッツポーズをすると、掴み掛からんばかりの勢いで自分の疑問符を一気にぶちまけた。

「失礼承知で聞くけど！あんたと穂高ママ、一体どういう関係なのよ。それから、あの気持ち悪い作戦の協力者ってのもほんとなわけ

？何でそれだけの為にわざわざ転校までする理由があるの」

「……………」

朔眞は二、三度ゆっくりと瞬いた。その間、夕夜はひたすらじつと待っていて。穂高はいえ、何が何だか分からないといったふうに黙りこくっていた。

すると、朔眞はふんわりとやわらかく笑う。

「…なあんだ。絵里さん、ばらしちゃったのか」

「！！」

朔眞のこの言葉は、肯定を意味していた。ということは、やはり…？

「質問に答えるよ。僕が、君たち二人に恋人同士になってもらうための協力者っていうのは、本当だよ。けしかけて、って言われたんだよねー。それから、何でそれだけの為についていう質問だけだ。…他人からみれば小さいのかもしれない。けれど、僕にとつてその『お願い』は、何にも代えがたい…一番にやり遂げるべきことだったんだよ」

静かな語り口調で、淀みなく。何か、大切なものを思い描いているような…そんな風体で朔眞は真実を告げた。

二の句が告げなかった。朔眞の、真剣な気持ちが伝わってきたものだから。

静寂。

夕夜は、思いの外真剣な朔眞の態度に。穂高は、今初めて知った事実。誰も口を開くことなく、まるで時間は止まったようだった。「それで、僕と麗子さんの関係だっけ。その質問の答えだけど

」

「きゃー、夕夜ちゃん？久しぶりー。それに、穂高じゃない」

それは、ここにいるはずのない人物の声によって、かき消され。

ああもう、ここが一番知りたいところだったのに！

誰よもう、と夕夜が声のしたほうへ視線をやると。

「えっ？ほ…、穂高ママ？」



「　　母さん…」

朔眞の後ろ。部屋の中から出てきたのは、他でもない、穂高の母親で絵里の親友　結城麗子であった。

「もう、麗子さん出てきちゃったの？…中にいてって言ったのにー」  
朔眞が、あまりにも自然に麗子と会話をする。

夕夜はその光景を信じられない思いで眺めていた。そしてそれは、穂高だっておなじで。『なんでここに…』

「あ、それ聞かうー？」

穂高と麗子、三年ぶりの再会。だというのに、この目の前の結城麗子という女性は、緊張感の欠片も感じさせないあっけらかんとした声音で、唇を尖らせるのだった。

「あたりまえだろ。説明してよ」

穂高も穂高で、驚いていたのは初めのうちだけで、すんなりこの状況を受け入れたようだ。

親が親なら子も子だ。

「説明ねえ。…朔ちゃんを引き止めるため？」

麗子は小首を傾げて、尻上がりの調子で言った。

夕夜がはつと我に返る。

「あつ…、今日どつか行くって言ってたから？」

「そうよーん。夕夜ちゃん察しが良い」

朗らかに笑って、ぱしつと夕夜の肩をはたく。なんというか…相変わらず『若い』と、夕夜は思った。

麗子は、言動が可愛くて本来の年齢が分からなくなるような女性だ。それに見合って容姿も可愛らしい。ちなみに穂高の父もかなりの男前で、穂高はこの二人のDNAを受け継いで生まれたことがありありと見て取れる子どもに育っていた。

「こいつにけしかけるなんて言ったの、母さん？」

穂高が親指で朔眞を指し示す。

普通に考えて、外国にいたはずの母と朔眞に、接点があったとは思えない。けれど実際、二人はこうして親しげに話していて。

「まあまあ。とりあえず質問には全部答えるから。」

『私達の

家』で話しましょ、穂高？」

麗子が完全に廊下に出てきて、穂高にふんわりと笑いかける。穂高は苦虫を噛み潰したような顔した。

……昔から、この笑顔には誰も勝てないのだ。

**第三十三話 朔眞の正体 - 1 - (後書き)**

予定ではあと二話で終わりますね (^ ^ )

第三十四話 朔眞の正体 - 2 - (前書き)

遅れまして申し訳ございません。昨日一日忙しくて……言い訳です  
ね、はい。すみません。

### 第三十四話 朔眞の正体 - 2 -

場所を変えて、穂高の家。家の掃除をしていた絵里も引つ張つてきて、夕夜、穂高、麗子、朔眞、と関係者五人勢揃いである。先刻、麗子と絵里が再会したのだが、その時のテンション高さとうるささったら、見ているこつちが疲れるくらいだった。

核家族化が進む現代に合わせて作られた家族4人設計のこのリビングは、五人では少々狭くも感じられたが、とりあえず皆ソファーなりテーブルなりに落ち着く。そうでないのは、張本人の麗子だけであり。

「きゃあー、ちょっとやばーい。懐かしー！なんにも変わってないじゃない。穂高以外はー」

久しぶりの我が家にテンションを上げて、一人騒ぎ立てる。風呂場を見て、寝室を見て、トイレを見て。今は、リビングに隣り合わせているカウンターキッチンをパタパタと歩き回っていた。

「最後の『穂高以外は』ってなに、母さん」

「だってえー。あんた前別れたときはまだ青臭い子どもって感じだったのに、すっかり男くさくなってるんだもの。ますますせーくに似てきたわ」

せーくん、もとい静<sup>せい</sup>くんとは、穂高の父親の名前だ。

「って、その父さんは？二人ともシンガポールにいたはずだろ。何で母さんだけ来てるんだよ」

夕夜と絵里も、こくこくと頷く。

「せーくんは向こうに留守番。ていうか、仕事が終わってないのよ」

「…ああ、押し付けてきたのか」

「人聞きの悪いことを！頼んできたわよっ、ちゃんと」

「母さんのお願いは脅迫なんだよ」

「そんなことないわよー。ねっ、夕夜ちゃん」

「え！？」

いきなり話を振られて、夕夜は必要以上に大きく反応してしまった。

…とりあえず考えてみる。

「…とりあえず穂高ママ今そんな話しにきたんじゃないよね」

「……………あ、ああ。そういえばそうだったわ」

目から鱗が落ちたような表情で、麗子はキッチンから戻ってくる  
と、皆が待つダイニングテーブルに座った。

「えー、ごほん。話せば長いことながら…。先に、朔ちゃんの説得  
させて？」

そう言つと、可愛く「ね？」と上目遣いで周りを見渡すのであつ  
た。たちが悪いのは、それが無意識だということだ。

「勝手にすれば…」

穂高はありていにため息をつく。

「ありがとう。では遠慮なくー。…ねえ、朔ちゃん？どうしても、  
向こうに戻る気なの」

空気が変わる中、朔眞は何も答えない。

「理由が言えないなら、向こうになんかやれないわ。朔ちゃんのこと  
とだもん、何か変に悩んでるんじゃないの」

すると朔眞が、苦笑しながら「ひどいなあ、麗子さん」と言つた。  
「べつに変じゃないって。僕、それでも結構真面目に悩んでるんだ  
よー？」

「じゃあやつぱり、理由聞かなきゃね？」

手厳しいなあ。と朔眞は思う。でも、こんな彼女だからこそきつ  
と自分は、こんなにも敬愛の情を持てたのだろう。

「だって、麗子さん。僕、本来は日本にいるはずのない人間だよ。  
ここに長居する理由もないし、麗子さんにずっとマンションの家賃  
払ってもらうわけにもいかない。…どう考えたって、僕は向こうの  
施設に戻るのが自然なんだよ」

朔眞は哀しそうな笑顔で告げる。

「だからねえ、お金のことは気にしなくていいって言ってるじゃな

い。こうして、絵里ちゃんも差し入れに協力してくれてるんだし」  
「そんなわけにいかないよ」

「…そこまで言うなら。どうして、そんなに寂しそうな表情してるの。これから行くっていう人間の顔じゃないわ」

「…やだな、僕そんな顔してる？」

「なめないで。私と朔ちゃん、もう十一年付き合ってるんだから。分かるの、それくらいは」

沈黙が流れた。事情を知っている絵里、麗子、朔眞の

三人は沈痛な面持で。なにも分からず、言葉の端々からことのいきさつを把握しようと、水面下で奮闘する残りの夕夜と穂高は、麗子の言葉の強さに圧倒されて。

「このままここにいなさいよ。私もそれを望んでる」

「私『も』…？」

「もう一人は、朔ちゃん自身よ。本当は、ここに残りたいっ

て、そう、思ってるんでしょう？」

「……っ」

どうして、あなたは。そう、問い掛けようとしてやめた。どうせ、もとより自分がこのひとに勝てるわけがない。…いろんな意味で。

「朔ちゃん。人はね、自分の意志を主張する権利があるのよ。…朔ちゃんはどうしたいの？自分がしたいようにすればいい」

話を初めてから、ずっと真剣そのものだった麗子の表情が、ここにきてふつと和らいだ。

それを見た瞬間　　ああ、自分は言っただけなんだと。わがまましても、いいのだと。…そう、思った。

「…たい」

「ん？なあに」

「残りたい、です。僕は、ここに」

本当は、日本に来てからずっと思っていた。このままここにいられたらどんなにいいか。このまま、平和で怠惰な非日常を享受することができたら、どんなにいいか。周囲に集まってくる女の子たち

の人数は、正直鬱陶しかつたけれど…それでも日を追う毎に、馴染んで、慣れて。教室も、その教室のゆるやかな喧騒さえも、今では朔眞にとって、心地いいものになっていた。

けれど、それが叶わぬ願いだということは、誰よりも自分が一番理解していて。だから特定の友達だって作りたくなかったし、広く浅い付き合いをしていたのだ。

一人だけ、踏みこんできた女の子はいたけれど。

…朔眞の本音を聞いて、絵里も麗子も、ホツとしたように笑った。  
「じゃあ、決まりっ」

「あ、それなんだけど…麗子さん、ひとつだけ僕にもやりたいことがあるんだよね。いい？」

「うん、なあに」

朔眞が一拍間を置いて、しっかりと麗子と視線を合わせたまま、ずつと考えていたことを告げた。

「日本に残るし、もちろんこのまま学校にも行くよ。でも、このマシオンからは出たいんだ」

『え？』

この言葉には、朔眞以外の全員が同じ反応を返した。

「許可してよ、麗子さん。人には意志を主張する権利があるんですよ。…これは、僕なりのけじめ。学校の近くに下宿して、その下宿代は自分でバイトしながら払って、生活したいんだ」

だって、いつまでも麗子さんに甘えっぱなしじゃ申し訳がたたないからさ。

最後にそう付け加えたのち、朔眞はガタンと椅子から立った。

「朔ちゃん、どこ行くの」

「とりあえず今は自分の家に」

「でも」

「だーいじょーぶだよ、麗子さん。勝手にいなくなったりしないから。それに、話はもうついたでしょー？…それより、そこにいる二人に早く事情説明してあげなよ？きつと、頭こんがらがってるよー」



「あ…」

もう部屋から出ていきかけている朔眞から視線を外し、穂高と夕夜を振り返る。

「じゃあね、夕夜ちゃんまた月曜日。…学校で、会おうね」

笑って、ひらひらと手を振る。すかさず穂高が、

「夕夜にだけ色目使うな、木原」

「やだなあ、してないってそんなこと」。僕、君のこと結構好きなんだからさー」

「…え」

「ゲイ的な意味じゃなくね？人してって、話。でも、夕夜ちゃんは、わりと、本気で好みだったかな」

「げっ、やめてよね」

さらりとした問題発言に、焦ったのは他の誰でもなく麗子だった。「ちょ、ちよつと朔ちゃん？私、けしかけて早くくつつけて欲しいとは言ったけど、本気で穂高のライバルになってとは言ってないからねっ？」

「そうだねー。でも、人の気持ちなんて変わるものだから」

どうなるか分かんないよねえ、なんて言いながら、朔眞は呑気に笑っている。

「まさか、朔ちゃん本気で夕夜のこと好きになったんじゃないでしょうね」

絵里まで身を乗り出して、問い詰める。

当人たち二人を差し置いて、話はどんどんヒートアップしていき。

「そーだつて言ったら、絵里さんどーしますか」

「朔ちゃん！」

「あはは、冗談ですよー。だって僕、他にちゃんと気になる子いますもん。それじゃ」

『ええ！？』

驚愕に目を瞪る四人を尻目に、朔眞は意味深な微笑みと、最上級の疑問を残して姿を消したのであった。

「ふうー…」

その後、家から出た朔眞は、ひとり共同通路から外の景色を眺めていた。ひとつ役目が終わって、なんとなく少し寂しい。こんな時こそ、誰かに傍にいてほしいと思ってしまう。けれど、夕夜は穂高のところへ。麗子は自分の家へと、居るべき場所に帰ってしまった。

「ま、だれもいないかそんなひと」

自嘲気味に笑って、部屋へ引き上げようと踵を返したのだが。

「朔眞くん…っ」

「え…るみちゃん」

なんとそこには、春田るみが立っていたのだ。

「どうしてここに…」

「あのね…っ。た、担任に住所聞いてきちゃった。なんか、噂で朔眞くんいなくなるって聞いたからあ」

あたふたとしながら一生懸命理由を話す。

「けど、嘘だよねえ？ねっ、なんか答えて　さ、朔眞くん？」

ふと、目の前にいる彼の表情を見るみは瞬いた。

「…どおしたの？泣きそうな顔してる」

「そんなこと、ないよ」

「嘘、だつてえ　きゃっ」

反論の言葉は、最後まで言えなかった。朔眞に、抱き締められていたから。

「来てくれて…ありがとう」

「…うん…」

るみも、黙って抱きしめ返した。

「……まあ、朔ちゃんの相手が誰なのかはすっごく気になるところ

「だけど」

麗子はコホンとひとつ、わざとらしい咳払いをして。

「朔ちゃんから許可もおりたわけだし…夕夜ちゃん、穂高。教えてあげる。私と朔ちゃんがどういう関係なのか」

厳かに、そう告げた。

「二人とも、少し昔話をしましょうか」

「ストリートチルドレンって、知ってる？」

その昔話は、こんな言葉から始まった。

十一年前。結城麗子は、仕事でカンボジアへ来ていた。駆け出しのメイクアップアーティストである彼女とその夫は、その頃どんな仕事でも引き受けて、今回この国の地を踏んでいたのだ。

夫をホテルに残し、一人道を歩く。特にすることもなく、ただの時間潰のつもりだった。

カンボジアはまた経済的に豊かとは言えない国で、道のそこかしこには『ストリートチルドレン』と呼ばれる親族も家もない、小さな子どもから、果ては日本ならば中学生くらいに相当するだろう年齢の子まで、様々いた。心は痛むけれど、自分にしてやれることは何もない。

そう思って、麗子が道を通り抜けようとした、その時。…目の前に、明らかに外国の子どもではない、『日本人の男の子』が行き倒れていたのだ。さすがにほっとけなくて、麗子は日本語は通じるだろうかと思いつながら、傍にしゃがみ込み、大丈夫？生きてる？と肩を叩いた。しばらくしたあと、その子のかすかに呻き声をもらしながら、水…と呟いた。生きてる！

そう、確信した瞬間、麗子

はその子を抱き上げると、大急ぎでホテルへの道を引き返した。

その時の子が、木原朔真だったのだ。

「まっ、大まかに言えばこんな感じー？」

話し終えた麗子がからつと笑って言った。

「…信じられない」

「でもその話、本当なんだろう？」

「うん、もちろん。そのあとね、アメリカに行く仕事があったから、朔ちゃんも一緒に連れてって、その施設に預けたのよ。…日本に帰る予定が、その時はなかったからね」

そして、十七になった今年。恩返しをしたいと言う朔真に、麗子はそれじゃあ、と『あるお願い』をした。それが、夕夜と穂高を幼なじみから恋人同士にして欲しいという、なんともくだらないお願いだったのだ。

「でねえ、最後に一押しってことで、絵里ちゃんには引越しの嘘ついてもらったの」

ブイサインなんてしながら、悪怯れることなく朗らかに笑っている。

「どう？どう？私の作戦、大成功だったでしょー」

「…ったく、ありがた迷惑だよ、ほんとう…」

「ねっねっ、穂高。私が帰ってきて、嬉しい？」

身乗り出して、麗子こそが嬉しそうに笑って言うものだから、つられて穂高も苦笑する。

「……元気そうで、良かった。おかえり、母さん」

「えっへへ、ただいまー」

麗子登場から一時間。ようやく果たされた親子の対面を、絵里と夕夜は気を利かせて静かに穂高の家を後にするのだった。

そして、結局。

夕夜はひとりで黙々と、自分の荷物を荷ほどきするのであった。

第三十四話 朔眞の正体 - 2 - (後書き)

被害者は夕夜ひとりだけ(笑) 今回彼女、2回しか喋ってません。

### 第三十五話 誕生日、そして（前書き）

またもや遅れて申し訳ございません…。第三十五話。話もクライマックスです。待ってくださいっている読者さま（が、いることを信じ！）掲載したいと思います。あと少し、付き合ってやってください  
m (——) ( m

### 第三十五話 誕生日、そして

「平和だなあ……」

6時間目の授業中。国語教師の朗読の声に紛れるように、夕夜はまったりとした気分で呟いた。

季節は秋。月は十月に移り変わって、十一日目が終わりを告げようとしていた。

朔真が日本に残ると決めた日から、約一ヶ月。まわりもようやく落ち着いて、再び普段通りの日常が彼女のもとに戻ってきていた。斜め前の席で、朔真もしっかり授業を受けている。

今は、麗子も夫の待つシンガポールの地へと飛び立ち、穂高がまた夕夜宅で晩ご飯と一緒に食べる日々が続いていた。

ふと、国語教師の向こう側に位置する、黒というよりは緑に近い黒板を見やる。視線を、中央から右へ。ずーっと、ずーっと、右へ。端にたどり着いたとき、目に映ったのは今日の日付だった。白いチョークででかでかと、縦書きに『十月十一日』とかかかれている。そのすぐ真下には、曜日と日直の名前。

夕夜はしばし黙考したのち「あっ」と声を上げた。自分にしか聞こえないような、小さな声で。

そうだ、忘れてたけど。明日、十月十二日は、自分と穂高の誕生日だ！

「ねえ栄理」

「なに？」

「忘れがちだけど、あたしと穂高って誕生日一緒なのよね」  
「今さらなによ」

六時間目もHRも終えたその後、運良く掃除当番が当たっていな

かった二人は、教室の椅子に座ったままそんなことを話していた。

「いや、忘れてたの。さっきの授業中、思い出した」

「そりやまた唐突ね」

「へえー。高良さん、明日誕生日なんだ。しかも穂高くんと一緒に」

「いきなり会話に入ってこないでよ朔眞」

「まあまあ怒らないでよ」

「高良さん、誕生日おめでとぉー」

「いやまだ誕生日じゃないんですけど明日ですけど。でも、ありがとね春田さん」

「んーん」

「じゃあ僕達帰るね。バイバイ」

「ばいばあーい」

台風のように唐突に現れて颯爽と消えていった木原朔眞と春田るみ、二人の後ろ姿を、栄理はじっと見つめていた。

「うーん…分かんないわ」

「…なにが？」

「最近春田さんと木原くん、よく一緒にいるわよね。…付き合ってるのかしら？」

『付き合ってないっ！！』

返答は、クラスの女子一同から帰ってきた。

「わーお。だってさ夕夜」

「う、うん…」

よく見れば、あつちにも、こつちにも。

恋に敗れた者たちが、恨めしそうな目つきでるみの背中を見ていた。

女って、こえー。

自分が女なのも棚に上げて、夕夜はそう思うのだった。

「言っとくけどね、夕夜、あんただってあーゆー目で睨み付けられてんだからね」

「えっ！？」



なにゆえ!?

「あんたどこまで馬鹿なの。決まってるじゃない。ほ・だ・か・く・ん・よ!」

「ああ…氷の王子だもんね」

「だもんね、じゃなくて」

「だって、今さらすぎ。あたし小学生の頃からそんな目ではっから見られてたから、いつのまにかそれが平常に感じてんのよ。じゃなきゃ穂高の幼なじみなんてやってられない」

そう突っぱねる彼女に、栄理は不敵な笑みをひとつよこした。

「幼なじみじゃないでしょ。恋人でしょ」

「……………栄理むかつく」

「あははっ」

そんなこんなで、ふたりが十五分ほど談笑した頃。

「夕夜悪い、遅れて。日直だった」

「おー、穂高。いいいいいよ、おつかれ」

「うん」

「穂高くん来たなら、私も帰ろうかしら」

初めから、穂高が来るまで夕夜が暇をしないようにと、教室に残っていた栄理だ。目的の人物が来たなら自分はお役御免だ、と立ち上がる。

「べつに一緒に帰ったっていいのに」

夕夜が、さも不満そうにブーブーと口を尖らせた。

「やーよ。なにが悲しくてカップルに挟まれなきゃならないの。私に対する一種の嫌味かしら、夕夜ちゃん？」

う、それを言われると。

夕夜は、口で栄理には一生勝てないと改めて思ったりする。

「そんなことより穂高くん」

「？」

へこんでいる夕夜はさておき、栄理は隣の穂高へと向き直った。

「明日、ふたり揃って誕生日でしょう。いい思い出にできてよ？」

ちょうどよく土曜日で学校休みなんだし、と栄理は黒板の曜日を指差した。

「はいこれ」

と差し出されたのは、近くの遊園地のペアチケット。

「私からの誕生日プレゼント。受け取ってくれるわよね」

「…もちろん。ありがとう」

穂高は差し出されたチケットを凝視しながら、ゆっくりとそれを掴んだ。

夕夜はといえば、思いがけないサプライズに口を開けて呆けている。

「ん、どういたしまして。じゃあね」

につこり笑って教室を出ていこうとする栄理に、はっと我に返った夕夜は思わず叫ぶ。

「えっ…栄理！ありがとう！！ほんとに」

その言葉に、栄理は笑顔でひらひらと手を振る動作だけで答えて消えた。

ふたりだけになった静かな教室で、穂高はぽつりと呟く。

「俺、高橋さんには一生頭が上がらない気がする…」

夕夜は激しく同感した。

土曜日。

「すっ…ごい人」

夕夜と穂高二人は、

「ほんとだよ…」

栄理からのチケットをその手に携えて、

「…帰ろっか」

「馬鹿。プレゼントだぞ」

この、人がごった返す遊園地へと足を運んでいた。

「冗談よ、冗談」

「どーだか…」

出鼻から挫かれた気分で、ふたりは入園する。

今日、夕夜は珍しく朝早く起きたりなんかして、オシャレをしてきていた。と言っても穂高が濃いメイクをあまり好きがらないので、ビューラーにマスカラ、薄いピンクのリップくらいのものであるが。気合いを入れたのは、服装だ。いつもはスカートに適当に上をあわせていたのだが、今日は違う。白いニットの、ざっくり編んだかたちのワンピースだ。髪だって、巻いてみた。

穂高は、口には出さないけれど「いいな」と思っていた。元はい夕夜だ。普段無頓着なだけであり、それなりに着飾れば可愛い部類に入るだろう。否、誰がなんと言おうとも、普段の起きてそのま真的な夕夜だって可愛い。口が裂けたって言わないけれど。

「うわああああああ」

きらきら、と。

さっきまでのあの辟易ぶりはどこへやら。

夕夜は、目に映るアトラクションの数々（主に絶叫系）や、耳に届くたくさんの歓声に、すっかり心を奪われて魅入られていた。

「やっぱー！テンション上がってきたっ。行くぜ穂高！」

右手をくいと自分側に引く動作をして、駆け出す。

「……夕夜。俺が絶叫系苦手と知っての狼藉か」

「うん」

「喧嘩売ってんの」

「だって隣に穂高いなきゃ楽しくない」

「……………」

夕夜は、ずるい。

そんなふうに言われて、逆らえるわけがない、と思う。

穂高はひとつため息をつく、ニコニコして待っている 穂

高が来ることなんて分かっているのだろう 夕夜のもとへと、

歩み寄るのであった。

「ぎゃーっ」

「…………っ！」

待ち時間四十分の末、二人は絶叫系代表ジェットコースターに乗っていた。

「あはははーっ。穂高も叫べってーっ」

無理。無理。ふつうに無理。

穂高はひたすら下を向いて目を瞑って、時間が過ぎるのを待っていた。隣の夕夜がうるさい。どうすればあんなに騒げるんだ。…などという悪態をつける状態でさえ、なかった。

「ひゃー」

回った。360度。

降ろせ。降ろしてくれ。

そんな、穂高の切なる願いなど聞き入られるはずもなく。

彼はしつかり、一周終了するまで乗っていた。

「…………ごめん、穂高。だいじょうぶ？」

「……………」

だいじょうぶなわけがない。

穂高は、遊園地内のベンチに座りながら、そう思った。

「あの、なにか冷たい飲み物買ってくる。ちよっと待っててベンチを離れかけた彼女の手を、穂高はパシッと掴む。」

「穂高？」

「…いい。行くな」

「でも」

「いいって。おまえが　　夕夜が、傍にいてくれたほうが、よっぽど早く良くなる」

「……………」

そんなこと言われて、それでもまだこの手を振りほどけるひとが、  
いるだろうか。

夕夜は顔を赤くして、おとなしく隣に腰を降ろした。

「おまえ…楽しかった？」

「え？」

「さっきの」

「あ、ジェットコースター？うん、もちろん！」

とたんに明るく笑う夕夜に、穂高もふっと笑う。

「ならいい。乗ったかいがあった」

そうして穂高はまた、顔を伏せた。

「なんなのよ…」

だから、隣の夕夜がさらに赤くなったなんて、分かっている。

「さて、行くか」

数分後、黙っていた穂高が唐突に顔を上げて言った。

「もういいの」

「うん」

「…どれ、乗るの」

その言葉を受けて、穂高はにやりと笑う。

「…！」

やばい！この顔は、知っている。

夕夜は、冷や汗がにじむのを感じていた。

彼女にはひとつだけ、どうしても苦手な乗り物があるのだ。

「まさか…まさか…『アレ』に乗るんじゃないでしょうね」

「さあ？アレってなに。…ちゃんと言ってくんなきゃ」

「いやああああ！」

この顔は、この顔は、絶対そうよ！

夕夜が足を突っ張って引っ張られるのを拒否していると。

「…夕夜？」

「な、なによあ」

「隣に夕夜いなきゃ、全然楽しくないんだけど」

「~~~~~っ！」

ずるい！ずるい！なにそれ、いま使う！？しかもそんな、囁くような色気のある声で！

断れるわけ、ないじゃんか！

「よし、行くか」

すっかり鳴りをひそめた夕夜を確認したのち、穂高は彼女の手を取り、歩きだすのだった。

夕夜は、為す術もなく。…おとなしく、手を引かれていた。

「恋人同士っていったら、やっぱりこれに乗らなきゃな？」

「……………」

「回り見るよ。景色が回って楽しいぞ」

「……………」

「夕夜、俺と乗るの、そんなに嫌」

「ち、違っつたら！…うっ」

二人が次に乗ったのは、コーヒーカップだった。

夕夜はこの、周りの景色がゆっくり回る感じが嫌いだった。彼女曰く「三半器官がやられる」らしい。だから、顔なんて上げたら瀕死だ。そう分かっていたからずっと、下を向いていたのに。

「穂高の、ばかあ…」

彼の言葉につられて、つい顔を上げてしまった。

「はははっ」

目の前の眩しい笑顔が憎たらしい。

夕夜は残りの一分間、ただ耐えるしかなかった。

次は自分が介抱される番だなあ…なんて、思いながら。

その後もふたりは、いろんなアトラクションをまわった。

案の定夕夜はコーヒーカップを降りた直後、十五分ほど介抱されたりしたが、具合がよくなるや否やまたすぐに元のテンションに戻っていた。

そうしていつもの、『夕夜に振り回されながらも楽しそうな穂高』というスタンスの出来上がりだ。

誕生日だからって、何も特別なことはなくていい。

ただ、一緒にいられたらそれでいい。

何も言わなくても、ふたりはお互い、そう思っていた。それだけで、この、人が多くて待ち時間が長い遊園地デートだって。

……十分すぎるほど、楽しかったのだ。

「最後に一個。……どうしても行きたいところがあるの」

夕夜がぼつりとそう呟いたのは、時刻も五時を回った頃。オレンジ色の夕陽が、眩しく世界をあかく染める頃だった。

「行きたいところ？」

穂高が不思議そうに夕夜を見やる。

「うん。いい？」

「そりゃ、いーけど」

どこへ？

そう、続きを聞く前に、手を取られて遊園地の出口へと連れられていた。

ありがとうございました、というクルーの声を聞くのもそこそこに、ふたりはもと来た道を戻っていた。

そう　家への道のりを、そのままに。

夕夜に引かれて、繋がれている手を見ながら。

穂高は、自分の推測が確信に変わっていく感覚を、はつきりと感じ取っていた。

「夕夜、行きたい場所って」

「　時計塔の下、だよ　」

振り返って笑った彼女は。

とてもとても艶やかな微笑みを、その顔にたたえていた　。

### 第三十五話 誕生日、そして（後書き）

次回、最終回です。10月23日の明日、更新しようと思います。  
ここまで読んでくださった方。本当に、本当にありがとうございます。  
す。最終回も付き合ってくれたら、万感の思いです！！



最終話　く時計塔の下でく（前書き）

日付変わってしまいましたね、すみません。では、最終話をどうぞ  
m (—) m

## 最終話　く時計塔の下で

時計塔の下。

すべての、はじまりの場所　。

空が。

<sup>だいだい</sup>橙色から藍色へと、変わりゆく。

その様を、二人は声を発することもなくただじつと、眺めていた。ベンチに座るでもない、今日のデートの思い出話を語るでもない。この場所に　時計塔の下に着いてから、二人は一度も言葉を交わしていなかった。ただ静かに、心地よい空気を共有するだけ。

ここに来たいと言った夕夜本人でさえ、何を言うこともない時間が、五分は続き　。

「穂高。あたしの名前の由来、知ってる？」

「は？」

唐突な彼女の言葉に、穂高は思わずすつとんきような声を出していた。なぜ今、そんなことを？

そう考えて、すぐにああそうかと、合点がいった。今だから。

『今日』の『この瞬間』だからこそ、彼女はこんな質問を投げて寄こしたのだ、と。

「あたしは、穂高の名前の由来、分かるよ。」

稲穂のようにすくすくと育つように願いを込めて「

隣に並んでいた彼女が、振り返って真正面から対峙するように立

ち位置を変えた。つられて、穂高も向き直る。

「……俺だって、分かる。覚えてるよ、おまえの名前の由来」  
小学校一年生の頃。

誰でも一度は経験する、『自分の名前の由来を調べましょう』という、よくある授業の課題。

あの時知ったお互いの由来を、二人はお互いに覚えていたのだ。

「……ほんと？」

「いま嘘つく理由、ない」

「そうだけど」

自分から聞いておきながら、なぜか少し焦ったふうの夕夜に穂高は首を傾げる。

「……言ってるいいの？」

「何を？」

「はあ？だから、おまえの名前の由来」

「！う、うん。いーよ」

その言葉を受けて、穂高は、自分たちの頭上に広がる、広大な空を振り仰いだ。

その行動を見ただけで夕夜は、ああ、覚えているんだ、と。そう確信した。

「ちょうど、今ぐらいの時間だったって、聞いた」

「……うん」

夕夜は。……朝から、ずっと考えていたことがある。

「橙色から、藍色へと空の色が変わる、ほんの短い時間」

もし、もし、穂高が約十年前に一度言ったっきりの、名前の由来を覚えていたら。

「『夕焼け』と『夜』の、ちょうど間の時間に生まれたから。……だから、夕夜」

あたしは迷わず、あの言葉を言おう。

だろ？そう言ってふわりと笑った穂高のその身体に。次の瞬間、夕夜は腕を回して抱きついていていた。

「ゆ、夕夜？」

珍しくあわてている彼が、可愛くて仕方ないと思うのは、やっぱり惚れてる証拠。

とくとくと心地よい早さで胸が打つのも……あたしが、穂高を好きだっていう証。

「穂高。誕生日、おめでとう」

「ああ。…夕夜も、おめでとう」

「ありがとつ。それでね、お祝いといっちゃんんだけど、ひとつお願いがあるの」

「……何？言ってみな」

ずっと、一緒にいたいって。

「ほんと？聞いた後に嫌だって言わない？」

「言わねーよ。だから言えって」

絶対、離れることなんかありえないって。

「約束だからね？」

「ああ」

そう、思うから。

「あたしと、結婚して」

「いいよ？」

「え！…いいの？」

「……なんだよ、言ったのおまえ自身だろ？」

穂高が訝しげな顔をする。

「そりゃ、そうだけど…」

夕夜は、戸惑った。

朝から決めていた一大決心。それが、こんなあっさり受け入れられていいものなのだろうか。

そりゃもちろん、嬉しいのだ。嬉しいのだけれど。

腕を組んでうーんと考えはじめる彼女に、穂高はむっとした声で問う。

「なんでまた考えてんだよ。やっぱり嫌だとか言っつなよ？」

先ほど、夕夜が言った言葉をそのまま返す。

「ち、違つよ！そーゆーことじゃなくて」

「じゃ、問題なし。どーせこの先何年経つても、隣にいるのはおまえ以外考えられない。だからだろ」

おまえもそう思ったから、結婚なんて言葉、出したんじゃないのかと。穂高は、そう聞いているのだ。

「…うん」

思考を見事に当てられて、夕夜はおとなしく頷いた。

「今すぐつてわけじゃない。将来的な話、でいんだよな」

「それも、うん」

「じゃ、婚約だな」

「こ、婚約っ？」

「世間一般ではそー言うだろ？結婚の約束のこと」

まあ、どうせ子どもの口約束だけだな。

穂高はそう言つて、肩をすくめた。けれどその直後に、

「でも」と真剣な表情に変わる。

「口約束だけで終わらせるつもり、ないから」

思わずドキッしてしまう。

「うん…」

以前、穂高の家のキッチンで、冗談で結婚の話をしたときのことを思い出す。あの時ははぐらかされてしまったけれど、今の穂高にそんな雰囲気は全くなくて。夕夜はそれが、本当に嬉しかった。

「夕夜。俺からもひとつ、誕生日の願いがあるんだけど」

「いーよ？なに」

「欲しいものがあるんだ」

「高いのは無理っ」

間髪入れずに叫ぶ夕夜に、穂高は思わず吹き出した。

「馬鹿。違つよ」

馬鹿！？

憤慨する夕夜など歯牙にもかけず、穂高は『欲しいもの』を続け

る。

「夕夜が欲しい」

「ふえっ？」

驚きのあまり変な声が出た。

「あた、あた、あたし!？」

「そう」

「どどどーゆう意味でっ」

「どーゆう意味って…そーゆう意味？」

「ばっ…ばっかじゃないの!？」

「なんで」

「なんでって」

真っ赤になってあたふたとする夕夜を穂高は笑いながら、とても可笑しそうに抱きしめた。

「…ちよつと、もしかしてからかってない」

「からかってない。大真面目」

そっ、それもそれで困る!!

「おつまえ…顔に出すぎ。なにも今日って言ってるわけじゃないんだから」

あ、そうなの？

夕夜はほっと体の力を抜いた。

「…そこまで安心されるのも逆にむかつく」

「えっ、あっ、ごめん」

「いーよべつに。…先は長いし気長にいくから。…な？」

疑問系で覗き込んでくる穂高の顔は、とても妖艶に笑っていて。

夕夜は、恥ずかしさから顔を逸らした。

「なあ夕夜、おまえ気づいてた？」

「…なにが」

依然としてお互いの体に手を回したまま話す二人の横を、興味津々な眼差しを向けながら、同じマンションに住んでいるおばちゃん  
がひとり、通り過ぎていった。

そういえばここは外だったと、はっと我に返る。

そそくさと、人ひとり分の距離を取った。

「ごほん。…で、何が？」

「…あのさ。何気に、ちゃんとしたデートって今日が初めてだったんだよな」

夕夜はぱちくりと数回瞬きすると。

「…そーだっけ」

「そうだよ。俺は、すごい楽しかったけど、おまえは？」

何当たり前なこと聞いてんの？馬鹿はそっちじゃないの。

と、その時夕夜は思った。

「楽しかったに、決まってる。隣に穂高がいたから、だよ？」

につこりと、目の前にいる穂高を見上げた。

「どーしておまえってそう……」

「？」

穂高が、再び夕夜を有無を言わず、その腕の中に閉じ込めた。そしてそのまま、後頭部を右手で支えながら、距離を近付ける。

「ふわあっ、ちょ、ちよっ」と

「なに」

「人が見るつてば！」

「平気。誰もいないから」

事もなげにそう言っ、穂高は唇を合わせようと、その綺麗な顔を傾けた。

さらさらと、黒髪が頬に擦れてくすぐたい。

ごく近くの耳元で、穂高が焦れたいほどゆっくりと、とびきり色気のある声で、何事かを囁いた。

「…!!じよ、上等よっ」

その言葉に、夕夜は瞬間的に赤くなり。

そうして、広場に伸びていたふたつの男女の影は、徐々にひとつに溶け合っ。

二人は、時計塔の下で、キスをした。

喧嘩して。

仲直りして。

落ち込んだり。

綺麗な景色を見たり。

励まされたり。

キスしたり。

ここで、いろんなことがあった。いろんな、思い出ができた。

そして、きっとそれはこれからも続いてゆくんだろう。

それは、自分たちだけではなく 共に年月を重ねてきた、この時計塔だって覚えているはずだと、夕夜は思った。

唇が離れて、二人は視線を合わせてどちらからともなく、笑い合  
う。

幸せだと、心から感じた。

「ねえ穂高。これからもよろしくね」

「……離れたいって言ったって、離さないから？」

それから。

夕夜と穂高は、手をつないでマンションに入っていった。

すっかり陽が落ちた藍色の暗闇のなか、広場の中央に堂々と鎮座  
している時計塔が、六時の鐘を鳴らす。

それはまるで、結婚式で鳴らされる祝福の鐘のようで。

辺り一帯に、その音色を響かせていた。



『……いつか必ず、心も身体も俺のものするから』  
『……じよ、上等よっ』

完

## 後書き

```
- - mime k00
Content-Type: multipart/altern
ative; boundary="mime k01"
- - mime k01
Content-Type: text/plain; char
set"iso-2022-jp"
Content-Transfer-Encoding: 7bit
```

最後まで読んでくださり、本当にありがとうございました。

作者のあずまひとみです。

この作品を書き始めて、早一年二月と一日。  
途中で何度も挫折しそうになりました。でもそのたびに頑張れたの  
は、ひとえに読者の皆様のおかげです。

月さま。

最後のひとふんばりの、最大の支えになったコメントでした。本当  
にありがとうございました。

ゆうCHANさま。

今はもう読んでくれているかどうか分からないけど、高校で初めて  
まともに小説を読んでもらった友達です。いつもありがとう。

李和さま。

挫折しそうなとき、このコメントでまた活力が湧きました。感謝してもしきれません。本当にありがとうございます。お元気ですか？

柳瀬悠さま。

細かいコメント、感謝しています。多分、お友達の一人かな？違っていたら、ごめんなさい。批評、ありがとうございました。

そしてそして、

はるかさま。

最大限の感謝を！

この小説は、あなたが運命を握っていたといっても過言ではありません。

コメント、本当に嬉しかったです。ありがとうございました！！次回作にもぜひ、顔出してくださいね（＾　＾）！

そんなわけで、これにて一旦『時計塔の下で』は終幕です。

コメントを下さった方々ひとりひとりに感謝の気持ちを述べたいという野望も叶え、もうやり残したことはありません。

この後、書きたい番外編がいくつかあります。

気づいた時にふらっと立ち寄っていただけると、小説増えるかもしれない。

夕夜と穂高、ふたりの番外編を乗せるかどうかは、迷っています。

皆様絶対突っ込んでほしいであろう、その後のあっち方面の進展とか。笑

リクエストが多ければ書こうかな、と思っています。

どうぞ、ご一報を（\*^ ^\*）

一話目とかの、恥ずかしい文章を直したい衝動に何度もかられましたが、これも記念だ。成長のあしあとだ、とあえてそのままにしておくことにします。笑

下手だなと、笑ってやってください。

全編通した感想など寄せていただければ、単純な作者は飛び上がって喜びます！

それではそろそろこの辺で。本当に、ありがとうございました！！

08.10.23

秋の夜長に。

あずまひとみ

- - mimek01

Content-Type: text/html; chars  
et="iso-2022-jp"  
Content-Transfer-Encoding: quo  
ted-printable

"1B\$B::G8e\$^\$GFIs\$G\$/\$@5\$j!:"K  
¥Ev\$K\$" \$j\$,"  
\$H\$&amp;p;\$4\$6\$^\$7\$?!#"1B)B&a  
m p ; n b s p ; & a m p ; n b s p ; " 1 B \$ B : n  
& a m p ; n b s p ; & a m p ; n b s p ; " 1 B \$ B % 3 % a  
s % H \$ r 2 P " 1 B ) B " 1 B \$ B % j % / % ) % 9 % H \$ , B  
? \$ 1 \$ l \$ P " 3 D q \$ 3 \$ & a m p ; \$ + \$ j ! " \$ H ; W \$  
C \$ F \$ \$ \$ ^ \$ 9 ! # "  
" 1 B ) B & a m p ; n b s p ; & a m p ; n b s p ; " 1 B \$ B  
\$ I \$ & a m p ; \$ < ! " \$ 4 0 l j s \$ r " 1 B ) =  
B ) \* ^ " 1 B \$ B " O " 1 B ) B ^ \* ( & a m p ; n b s p ; &  
a m p ; n b s p ; " 1 B \$ B 0 l O C L ¥ "  
\$ H \$ + \$ N ! " C Q \$ \$ : \$ + \$ 7 \$ \$ j 8 < O \$ r D < \$ 7 \$ ?  
\$ \$ < W F 0 \$ K 2 ? E Y \$ b \$ + \$ i \$ l \$ ^ \$ 7 \$ ? \$ , ! "  
\$ 3 \$ l \$ b 5 - G 0 \$ @ ! # @ "  
. D 9 \$ N \$ " \$ 7 \$ " \$ H \$ @ ! " \$ H \$ " \$ ) \$ F \$ " 3 D \$  
N \$ ^ \$ ^ \$ K \$ 7 \$ F \$ \* \$ / \$ 3 \$ H \$ K \$ 7 \$ ^ \$ 9 ! # <  
P " 1 B ) B & a m p ; n b s p ; & a m p ; n b s p ; " 1 B \$  
B 2

- SAKUMA - (前書き)

お待たせしました。私が個人的に大好きな、彼のお話です（、、）

いま思えば、あの時、僕は一度死んでいたんだと思う。

今じゃもう、顔も名前も思い出せない：『産みの親』に捨てられた、その時に。

その当時の僕はまだ分かっていなかったけれど、僕たちは「カンボジア」という国に住んでいたらしい。僕を生んだ、俗に言う『生みの親』の彼女と自分の、二人暮らしたった。

日本人であり話す言葉も日本語の僕らが、なぜそこにいたのか、今となつちや永遠の謎だ。

知りたいとは思わないし、知ろうとも思わない。

父親についても同じ。ただ一つ、分かっているのは同じ日本人だということだけだ。なぜなら、僕自身がハーフでも何でもないからそんな理由だ。

なぜ『彼女』が、『彼』のことを『子ども』である僕に一言も言わなかったのかは、分からない。

けれど、ただの一度だって、彼女自身の口からその男の話を聞くことは、終ぞなかったんだ。

ある、晩秋の日のこと。その日、いつもは全くと言っていいほど外に出たがらない彼女が、珍しく外の市場へ買い物へ行こうと僕を連れだした。

吹きすさぶ風が、妙に冷たかったことを覚えている。

すたすたと歩いていってしまう彼女の背中を、離れまいと子どもながらに一生懸命追いかけた。

人通りの少ない、メインストリートから一本外れた道に出たとき、彼女が唐突に立ち止まり僕を振り返った。

お母さん、と言おうとして開いた口は、彼女が発した言葉によつてすぐさま閉じられる。

私、ちよつと用事あるから。あんたここで待つてて。

そんなようなことを言つて、彼女は人混みの中へ戻つていき、そして消えた。

視界から消える直前。

目で追つたその先に、最近よく家にくる若い男と、うれしそうに抱き合う彼女の姿が見えた。

当時六歳。

それが、僕が見た彼女の『母』としての最後の姿だった。

そこから先のことは、今でも鮮明に、昨日のことのように思い出せる。

一日目。まだかなあ、お迎え遅いな、と思う。

二日目。事故にでも遭つて来れないのかと、心配する。

三日目。空腹が限界に近づいて、意識が薄れながら、もうこのまま自分は一人なんじゃないかと感じる。

四日目。もしかして自分は、捨てられたのかと疑う。

そして、五日目。偶然、腕を組んであの時の男と歩く『彼女』を目撃する。一瞬、迎えに来てくれたのかと期待した。けれど、一度絡んだはずの視線は当たり前のように逸らされ　その瞬間、僕は悟つたんだ。

…捨てられたのか。

それからの生活は、悲惨だった。『生活』という呼び名を呼ぶことさえ、ためらわれる毎日。

自分が、人間なのか何なのか、分からなくなるのだ。生きてるのか、死んでるのかも。

貧富の差が激しい国だったから、一步都心を離れると僕のような



身寄りがない子どもなんて、ざらにいた。その子たちと徒党を組んで、時には農家の畑に忍び込み、飢えをしのいだりした。ゴミを漁り、喉が渴いたら雨水を飲み、晴れが続けば側溝の泥水だって口にする。生きるためだった。

寒い夜は身を寄せ合って道端で寝て　。

僕は、すっかり『ストリートチルドレン』だったのだ。  
ある寒い冬の日。

その日は、何日か前からどうしても食べ物が入らなくて、僕は力尽きて道端に倒れてしまった。光が一筋も差さない、真っ暗闇の晩だった。

だんだんと手足が冷えてゆくのが分かり、ああ、僕は今ここで死ぬんだな、と。…ただ静かに、そう思った。  
楽になれる。やっとな。

人は死ぬ直前に今までの人生が走馬灯のように見えると言っけれど、その時の僕にはなんにも浮かんでこなかった。

当たり前だ。浮かべられるような出来事、何一つとして無かったのだから。

…死ぬ前に、一度でいいから泣くほどおいしいもの、食べたかったなあ…。

近くで聞こえていた人々の喧騒も、今はどこか遠い場所で聞こえる。

意識がふつと切れて、僕は、命を手放した　はず、だった。  
「大丈夫？生きてる？」

肩を叩く刺激とともに、優しい声が聞こえた。…生きたいという願望が、心の底にはあったのだろう。口が勝手に「水…」と答えていた。

……カチャカチャという、聞き慣れない音が聞こえて、今まで嗅いだことの無いような、いい匂いが鼻についた。  
どうして僕、生きてるんだろう。どうしてまた、目を開けられるんだろう…。

不思議なことだらけだった。

体が動かなくて、薄目を開けて周囲を眼球だけで見渡す。

外じゃない…寒くない…。

そして、気づく。

僕が寝てるの…もしかして、フトンってやつ…？

捨てられる前、『彼女』と一緒に住んでいたとき使っていたが、あれはこんなにふかふかしてなかった。もはやただの布地だった。

不安で、でもどこか期待してる自分がいて。

そうこうしてる内に、左手側にあったドアが、ゆっくりと開き

姿を現したのは、真っ黒な髪とくりくりした目の、女性だった。

「目、覚めたのねえ！良かった」

久しく他人から聞いていなかった日本語で、心底嬉しそうに、彼女は傍に近寄りながら言った。

「ベッドに寝せたかいたわねえ」

そっか、これフトンじゃなくてベッドっていうんだ。そういえば、なんだか位置が高い気がする。

そんな、どうでもいい感想を持った記憶がある。

「起きられるかしら」

ふんわりと笑って言うものだから、警戒心なんてもっばら起きなくて、素直に起き上がった。

「お腹空いてない？ご飯食べる？」

ゴハン…ゴハン？

残飯とか、生の野菜とか、そんなのじゃなくて？

半信半疑で、でも思い切りコクコクと首を縦に振った。

すると彼女はまた笑って、幼い僕をだっこして部屋を移動し始めた。

泣きそうだった。…こんなこと、くらいで。

今だかつて、こんなに人の体温を『あったかい』と感じたことが、あったらどうか。

こんなに、大事なものを扱うように優しく抱きしめられたことが、

あつただろうか。

何だかとても切なくなつて、僕は、彼女の首筋に顔を埋めていた。

ほどなくテーブルにつかされて、目の前に持ってこられたのは、ご飯をどろどろになるまで煮た『お粥』なるものだった。

「いきなりこつてりしたものは無理かと思つて。…どう？食べられるー？」

頷くや否や、僕はガツガツとすごい勢いでお粥を食べ始めた。うすい塩味で、卵も入ってた。

おいしい…。

おいしい、おいしいよ。

気づけば、泣いていた。痩せこけたその頬を、大粒の涙が次から次へと伝い、滑り落ちてゆく。

「あらら…そんなにおいしかった？」

いろんな感情がない交ぜになつて、声も発することができない。…唯々、頷いた。

人間の体とは不思議なもので、あんなに空腹に慣れていたにも関わらず、ちよつと胃にもものを入れると余計に沢山食べたくなつた。

「お肉とかもあるけど」

僕があからさまに反応してばつと顔を上げると、彼女はくすつと笑つて立ち上がり、どこからか皿に乗ったチキンも持ってきた。

「う…、う…ッ」

次いで食べて、お礼を言いたいのに口からは嗚咽しか漏れない。こんなに嬉しいと思つたのはいつぶりだろう。感謝してもしきれない。

久しぶりにちゃんとしたご飯を食べたおいしさと、有り難さに。そして何よりも、無償で与えられるひとの優しさに。

僕はいつまでも、涙が止まらなかったんだ。

「ね、あなた名前は？私は結城麗子」

そんな僕を見ながら、彼女は当たり前前の質問を口にした。

ナマエ…。

まだぐずる鼻を押さえながら、一瞬黙り込む。

僕のナマエ…なんだっけ？

僕を捨てたあの人は、滅多にナマエでなんか呼ばなかったし、ここ最近にはナマエなんか必要ない暮らしだったものだから、自分のナマエだって忘却の彼方に追いやられていた。

わずかしかない記憶の糸をたどって、手繰り寄せる。

ああ… そうだ。

「サクマ」

「ん？」

「…キハラ、サクマ」

音だけ、覚えていた。

「サクマ、ね。いい名前じゃないっ。漢字は分かる？」

「カンジ…？」

横に首を振った。

「ああそっか、知らないのねー。漢字ってね、日本じゃふつうに使われてる書き文字なの。名前には、大抵漢字がふられてるわ。私がサクちゃんに漢字ふつてもいいかしらっ」

矢継ぎ早にカンジの説明をした彼女は、目をキラキラッとさせて、今度はそんな提案をしてきた。

素直に嬉しかったから、首を縦に振る。

「やたっ。じゃあね…」

数秒、そのままじっと。

刹那、顔を上げて。

「朔眞」

近くにあった紙とペンを引き寄せて、その容姿や口調からは想像できない恐ろしく達筆な字で、僕の名前の『漢字』を書いてみせた。

「この『朔』っていう字はねー、一とか最初とかを意味するの。何

言いたい、分かる？」

…分からないから、黙っていた。

「…朔ちゃん。今日、ここから、あなたの新しい人生よ。また一から、始めましょ？」

あ、ちなみに『眞』の字は私が個人的に好きだけえ。

そう言っ、麗子さんは朗らかに笑った。だから、僕も

「…うん。ありがとう」

何か月かぶりに、温かい気持ちで笑えたんだ。

「…、朔ちゃん…っ、可愛い…ッッ！！」

「わあっ」

そしてこの日、僕は『木原朔眞』として、生まれ変わった。

その後　この結城夫婦に連れられて、カンボジアの地に別れを告げて新しくアメリカへ移った。この時八歳。あの人に捨てられてから、二年が経っていた。

同じ日本人の子が多い施設に入っ、それなりに教養も身につけた。勉強は独学。今まで何もやってこなかったから、楽しかったしね。元々能力は高いほうだったみたいで、苦労はしたけれど今では年相応の頭がある。

国籍とかの難しい問題は、全部麗子さん達がやってくれたから僕は関与していない。そこは安心して。

仕事でアメリカに来たときは必ず寄ってってくれる麗子さんを、僕はお母さんのように思い、慕っていた。毎日傍にいるわけじゃなかったから、淋しくなかったといえは嘘になるけれど、それでも僕は、充分過ぎるほど幸せを感じていた。

だから何十年間も、恩返ししたいと思っ、何かしてあげられたらっ、て思っ、た。…そのチャンスは、十七になった今年、訪れてくれる。

「プレゼント、したいんだけど。麗子さんに」

唐突にそう告げた僕に、麗子さんが真ん丸な目をさらに大きくさせたのを、憶えている。

「えっと…誕生日なのは、朔ちゃんよねえ？」

「うん、そうだけど、だからこそ。僕がこうして誕生日を迎えられるのは、麗子さんのおかげだし。今までの感謝の気持ち込めて、何かプレゼントしたいんだ」

僕の誕生日は、麗子さんが僕を拾ってくれたあの日だった。生まれた年月日なんて知らなかった僕に、「じゃ今日が誕生日ーッ」と、そりやもうあっさり決めてくれたのだ。

それまで誕生日なんてなければ、祝うなんてもっての外だった僕にとっては、誕生日を与えてくれたことと、毎年駆けつけて祝ってくれること。この二つがもう、一生分に相当する贈り物だったから「じゃあ…」

そうして、何かして欲しいこと、ある？と聞いた僕に麗子さんが答えたのが、穂高くと高良さんのことだった。

これは……正直、大変だった。穂高くんには嫌われるわ、フライパンは投げられるわ。本当は僕、高良さんとしたあれがファーストキスだったわけだし。彼女は違ったみたいだけどね。でもまあ、面白かったよ。

今は毎日、本当に日本って平和だなあと思いながら、楽しく過ごしてる。何よりここには、いつも傍にいてくれる優しい女の子がいる。

最近本当に愛しくて、こんなじゃ僕、一生アメリカには戻れないな、って毎日実感してる。…戻る必要もなくなったんだけど。

もう、手放せるわけないよ。僕の中で、いつの間にかこんなに存在が大きくなっちゃってるんだからさ。

空を見上げると、綺麗な秋晴れだった。

冷たい風が頬を凪いでも、もう、悲しくない。あの日の僕に、さよならを告げた。

- SAKUMA - (後書き)

と、いうわけで。やっと肩の荷がおりた感じです。朔眞の話は、本編書いてるときからずっと書こうと決めてたんですよ。^ ^むしろ、本編より先に朔眞の生い立ちの話は詳細決定されてました(笑)本編ではかなりはしょってしまったので…。本編の中で書くと、どうしても話が逸れてしまうんですね。なので、番外ということでは書いて良かったです(^ ^)辛い過去を生きてきた彼だから、幸せになってほしいですね。近いうち、るみるみとの話を載せようと思います。また、もう少し待っててください。ご意見、ご感想いただけるとうれしいですツ。+。( \* 、 )。+。

t h a w i n g - 雪解け - (前書き)

人気が高かったセカンドラブカップル、朔真とるみのお話です。



t h a w i n g - 雪 解 け -

初めて見たとき、君のあまりの綺麗さに言葉を失った。

初めて見たとき、一瞬にして心を奪われた。君が、あんまりにも悲しそうに微笑むから。

あの時見た、君の笑顔。それが、今も私の心を掴んで離さないんだ。

「朔眞くん、帰ろー」

秋も深まる、11月。

春田るみは、掃除が終わっても教室でぼーっとしている彼

木原朔眞に、そう、声をかけた。

しばらく気づいていなかった様子の彼は、目の前でふわふわと揺れる栗色の髪に、はっとする。

「ああ、るみちゃん」

「もお、また考えごとー？好きだよねえ、朔眞くんも」

「あははっ、好きでいつも悩んでるんじゃないんだけどなあ」

朔眞が笑った。哀しさを含んだあの笑顔じゃなくて、からっとした、晴れやかな笑顔で。

るみも、嬉しくなって笑う。

「えへへー」

ふと、沈黙が訪れた。しばらくそのことに気づいていなかったるみは、こちらをじっと見つめる朔眞の視線で、初めて言葉が途切れたことに気づいた。

「あ、あの…なに？」

気恥ずかしさに、そう問えば。

「…なんでもないよ。帰ろっか」

とても優しく、ふんわりと目と口元をゆるませて答えるものだから、また言葉を見失ってしまう。

…う。なんか恥ずかしい…。

そう、恥ずかしい。

あの日、朔眞があのレストランを出てから、彼は麗子への宣言通り自分で下宿先を見つけ、生活していた。

るみは、以前朔眞のレストランを訪問したときのことを、脳裏に思い浮かべる。

あの日、クラスメイトの女子が『朔眞が転校するかもしれない』という噂話をしていたのを、偶然耳にした彼女は、まさかとは思ったけれどもどうにも悪い予感が止まらず、担任から住所を聞き出した。約束もなしに行くのもまずいとは思ったが、そもそも自分は朔眞の連絡先など知らない。

だから、悪いとは思ったけれど突撃訪問をした。これが、あのタイミングよく彼女がマンションにいた理由、だったのである。

…目が合うなり抱きしめられて、「来てくれてありがとう」と呟いた朔眞。

泣きそうな顔をしていた、というのが第一印象だったし、耳元でささやかれた声音だって、幾分震えている感じがした。

それは、いつも当たり障りのない笑顔で周りをやり過ごしている彼の、初めて目にする『弱い部分』で。

るみはそれを、とても嬉しく、苦しいほど愛しく感じていた。

あたしが、この人を幸せにしたい。心からの笑顔を、見せてほしい。

そう、切に願うほどに。

それからだいぶ時間が過ぎているが、あの日を境に朔眞はとても優しくなった。

優しいのは前からだったが、違うのだ。そういうことではなくて、なにかこう…、先程のようなふとした瞬間に、すごく優しく見つめられることがある。前のような裏になにか隠してそうな笑顔じゃな

ければ、憂いを含んだ笑顔でもなく。

ただただ優しく、ふんわりとした笑顔で見つめられるのだ。そりやあもう、こっちがなんだか恥ずかしくなって目を伏せてしまうほどに。

ああでも、とるみは考えてしまう。

あんな　あんな、愛しいものを見るような眼差しで見つめられれば、勘違いしてしまいそうになる。

だめだめっ、とるみがかぶりを振ったとき。

こっん、とその頭を軽く小突かれた。

「ふえっ？」

「なーに考え込んでるのー？行くってば」

「あ、ごめんなさい」

朔眞に促され、教室を出て玄関に向かう。

並んで扉を出たとき背中に感じた、多数の痛い、そりやもうめちやくちや痛い妬みと羨望の視線は、多分、いや絶対気のせいではないだろう。

毎度のことではあるのだが、玄関に着くといつも女の子に囲まれる。  
朔眞が。

「朔眞くん！もう帰っちゃうのー」

「寂しい」

…べたべた触らないでよ。

「あはは、今日はちよつと用事あるからー」

「用事い？私も一緒に行くっ」

やめて。くつつかないでってば。

思考が真っ黒な、陰鬱いんうつなもので覆われて、るみは頭が痛くなる。隣にいたのはあたしなのに。あたしだって、手とかつなぎたいのに。

…ああ、いつからこんなに欲張りになってしまったんだろう。

前は、ただ隣に立っていらただけで良かった。見てくれさえすれば、良かったのに。

今は自分のことを想ってほしくて、触れたくて。

でも出来なくて、るみは喋りかけた口と、出しかけた手を止めた。まだなにやら騒いでいる彼と彼女らから静かに離れると、自分の靴を履きかえに下駄箱に向かったのだった。

面と向かって嫌みとか言われるのもきついけど、存在無視ってゆうのもきついなあ…。

最近の自分の扱いを思えば、また気分が下がる気がした。

あたしなんて、彼女でもなんでもないのに…。

「るみちゃん！」

えっ？

後ろから名前を呼ばれて振りかえれば、女の子たちの制止を完全無視して自分の方へくる彼の姿が目に入った。

どくん、とひとつ心臓が大きく波打つ。

もう、靴を履き替えて外に出ていたるみの後を追って自分も靴を履き替えると、るみの隣に並んだ。…それが当たり前のように。

「…お、女の子たちはいいの？」

とつさに口を突いて出たのはこんな言葉。

あ、やだなコレ。可愛くない聞き方しちゃったあ…。

「…関係ないよ」

「…ふえ？」

「僕にとつてはたくさんの女の子泣かせるより、るみちゃん一人泣かせるほうがよっぽど大問題だから」

「……………」

そ、それって…。

るみの顔にさあつと朱色が広がる。

それを確認して、朔眞はくすつと笑った。

「ねえ、今から時間ある？」

「…え？あ、あたしは大丈夫だけど…。朔眞くんこそさつき『用事ある』って」

「うん、それるみちゃんのことだから」

「……………」

さらりと言う朔眞に、るみはまた分かりやすく反応する。

ああもう、可愛いなあ。

思い切り抱き締めたい衝動に駆られたけれど、ここはまだ校庭。そこはかろうじて自粛した。

「大丈夫なんだよね？じゃ、僕ん家行こう」

…っても、下宿だけだね。

そう言っただけなのに、笑った彼の手と、真っ赤な彼女の手は、いつの間にか、しっかりと繋がれていた。

「何か飲む？あ、お茶しかないや…」

「お茶でいいヨッ？」

う、うわあああああ！声ひっくり返っちゃった！

るみは、冷蔵庫をのぞく朔眞の後ろ、ちょこんと正座しながら一人あたふたしていた。

いつ離されるのかとびくびくしていた手は、結局最後まで離されることはなく。

すんなりと、この部屋まで通されてしまった。

お願いだから落ち着いてよお、あたしの心臓…。

ひとつ大きく、深呼吸をする。

コップを二つ持った朔眞が中にお茶を入れて、るみの前にあるテーブルに置いた。

コトン、という些細な音にさえ反応して、ビクンと体を揺らす。そんな彼女に気づいているのかいないのか、朔眞はごく自然にるみの隣に腰をおろすと、言った。

「話しておきたいことがあるんだ、るみちゃんに」

「…話したいことお？」

目をくりくりつとさせて隣の朔眞を不思議そうに見つめる。

「うん。…聞いてくれる？」

「…あたりまえだよ」

るみはにつこりと笑った。

その笑顔に安堵した朔眞は、すうっとひとつ息を吸うと、静かな  
声音で話し始める。

自分の、『木原朔眞』の生い立ちを　　。

語り終えた部屋の中は、静寂に包まれる。

るみは、一言も発せず、ただ何かを考えているようだった。

やっぱり、話さない方が良かったかなあ。

ふう、と息をつく。誰かの答えを待つことが、こんなに不安だとは思いもしなかった。

彼女が何を言うのか、どんな言葉を言われるのか、怖くて仕方なく　　。

…怖い？

朔眞は、ああ…と気づく。

そうだ自分は　　怖いんだ。この子に嫌われるのが、こんなにも怖い。

はっ、と自嘲したくなる。

『あの人』を待っているときでさえ、こんなに怖くはなかったのに…。

弱くなったものだ、と思う。

あーあ…つくづくるみちゃんって僕の弱点だなあ。

ふっ、と思わず笑みが零れた。

と、今まで思案顔だったるみが、いきなり「あっ」と声をあげて

すぐさま「ああそつかあ。だからかあ」と笑った。

…それはもう、朗らかに笑った。

「？」

朔眞はわけが分からない。るみは、構わず続ける。

「朔眞くんは、怖かったんだね」

「…はっ？」

思ってもみなかったような言葉を言われて、まぬけな声が出た。怖かった？そりゃあ、確かにたった今そんなようなことは思っていたけれど。

でもそれは、『今』のるみに対する『現在』の感情であって、『昔』の自分に対する『過去』の感情じゃない。

少なくとも彼自身は、そう思う。

「…子どもってねえ、どんなに親にひどいことされても、結局は親のこと好きだつて言うじゃない。小さい子どもはそれこそ、虐待されてもお母さんに好かれようと頑張るんだつて」

この前テレビで言ってたよお、とるみは朔眞に笑顔を向けた。

「……………」

「それぐらい大切な人なんだもん…失くしたら、怖くなっちゃうのも仕方ないよ」

彼女は 何を言っているんだろう。

何を 言おうとしてるんだろう。

「あたしね、ずっと気になってたんだあ…。転校生の男の子の、哀しい笑顔。寂しそうに笑うのに、そのくせどつか一歩引いていて。なのに、すんごく綺麗に笑うんだもん。あたし、気になって気になつて…いつのまにか、その子のこと、目で追ってた」

のどが乾く。手足は動かない。なのに、頭だけはいやにはつきり覚醒していて、朔眞は、彼女の話す一言一句を聞き逃さないように、ただ黙って隣に座り続けていた。

「それでね、気づいたんだあ。」

この人のこの態度は、周りから本気で孤立しようと思つてやってるんじゃないな、って。あたし

には逆にね…仲良くしたそうに見えたんだ。でも、できない。そんな感じ」

るみはそこまで言うと、完全に体の向きを、朔眞の方に変えた。そして、でも今分かったよと言葉を紡ぐ。

「大切な人ができたら、その分失くした時の傷が大きいよね。それが怖かったから朔眞くんは 皆と、本当の意味で親しくならなかったんだね」

…ううん、『なれなかった』ってゆうのが正しいかなあ？

るみは首を傾げてそう一人ごちるのだった。

彼は ただただ言葉を失った。…凶星だったというよりは、自分でもはつきり形を掴めていなかったモヤモヤを、しっかりと捕まえ、理解し、意味を説き伏せられたような感覚だった。…実際そうなのだろう。

だって、今の彼女の言葉を受けた自分は、妙にすっきりして、その言葉はすくと胸に落ちていたのだから。

ああそうか…そういうことだったんだ。

朔眞はくすつと笑う。

「…うん、多分僕はずっと、怖かったんだ。そして、寂しかった」  
「…っ」

るみは胸が痛むのを感じた。朔眞が辛そうなのは嫌だ。

「でもっ」

でも今はあたしがいる。

るみはそう言おうと身を乗り出したのだが。

「でも今は、るみちゃんがいる」

「……え」

その言葉は、そっくりそのまま朔眞に奪われた。  
「いて、くれるんでしょ？」

……とっさに返事が出てこなかった。

こんなに。

こんなに嬉しいことって、あるだろうか。



自分の好きな人が、傍にいて欲しいと自分を選んでくれた。

あたしはこれ以上、何を望む？

るみは、涙で目を潤ませ、勢いのまま朔眞に抱きついた。

「うんっ、うんっ、いるよっ……。だから、失くすことを怖がらないで。何があっても、あたしは傍にいる」

朔眞は、その両手をゆつくりるみの背中に回す。

この子は、なんてあたたかい。

「るみちゃん？」

「ん？」

「付き合おっか」

「うん……」

……ああ、あたしはやっと。

焦がれて止まないものを、手に入れた。

「るみちゃん？泣いてるの？」

「……うん、泣いてない」

「

「じゃあ、顔あげて？」

るみは言われるがまま、涙でぐしゃぐしゃの顔を上げた。

「ふっ、やつぱ泣いてるじゃん」

「これは……嬉し涙だもん」

「そう。でもね」

そこで一旦言葉を切ってから、朔眞は抱きしめ合っていたるみを、少しだけ体から離れた。……そして。

ちゅっ。

「……………はえっ？」

「付き合ったからにはこーゆうこともするんだからね？……あんまり隙みせないで」

そう言っ、にやっとな笑うのだった。

「さ、朔眞くんっ？いい今、キスう」

「うん。したね。だから、気をつけて」

るみは思う。

悲しく笑う朔眞よりは、断然、少し意地悪でも明るく笑う彼がい。  
い。

…でも。

「これはこれで心臓、もたないかも…」

E  
N  
D

t h a w i n g - 雪解け - (後書き)

読了ありがとうございましたm(――) m作者のあずまひとみです。  
本編連載終了から約5ヶ月、遅い番外追加となりました( - - )  
この二人に関しては続き書いて欲しいというありがたいお声をいた  
だいたうえ、私自身もずっと幸せにしてあげたいキャラでした。今  
回載せることができて本当に良かったです。ていうか朔ちゃんの過  
去なしにこの二人の幸せはないだろ、的な(笑)そういうこともあ  
つて、この話より先に朔眞過去話を載せたわけですね。何はともあ  
れ、この二人はこれからもうまくやっていくでしょう。案外朔ちゃ  
ん、るみるみの尻にしかれるんだろうな(笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5499c/>

---

～時計塔の下で～

2010年10月8日13時19分発行